

# 破壊者たち

五十嵐 勉

東京 1 スクラップタワー

「壊すのが君の仕事だ」と僕は言われた。  
すでに日がとつぷりと暮れた八時、僕は腕時計から外へ目をやって、最初言われた言葉を反芻した。

24階から見る都市の風景はビルや街路や店や広告ネオンの光できらびやかにまたたいている。しかしそれはいま厚い壁ガラスの向こうにひどく遠く見え、色褪せ、活気を失って見えた。黒々と聳える高層ビルはまばらにしか光を宿していない。ビルが建ちすぎ、空き室や空き空間が目立つ。光をなくした階は、不況の影を濃くし、蝕まれた都市の繁栄を象徴して映る。縮小と緊縛の冷たい気配を帯び全体に荒廃の色を宿して、都市全体を衰退や滅びの予感で包んでくる気がした。はるか外から包んでくる濃い闇に底知れず沈み、不気味な静寂に包まれていくようだった。

この不安は何だろう。街全体を包むここ数年の不安は、先行きもつと色を濃くして未来を閉ざしていく気がする。

僕は何度就職に失敗し、何度アルバイトを替えただろう。それは僕が替えたくて替えたわけじゃない。いつも向こうから断られるのだ。「もういいよ。悪いが明日でおしまいにしてくれ。君のせいじゃない。会社がもう立ちゆかなくなってしまうんだ」——僕はそのたびに言葉を呑み込んでいた。「急に言われたって、困ります。僕にも生活があるんです。僕はどうして生きていったらいいんですか」

しかし僕の事情や会社の事情など関係なく、どうしようもない何か、目に見えないところでどんどん進んでいる気がする。僕は大学にいるときから、何度も就職試験に落ちた。卒業してからも正式な社員としてどこにも採用されなかった。社会は僕を必要としていない。せいぜいアル

バイトで、一カ月か二カ月、長くてせいぜい半年しか使ってくれなかった。僕は落ち込んで、一時はノイローゼ状態だった。他の大学の友人は、ほとんどどこかへ潜り込んでいるのに、僕だけがみじめに就職浪人を続けていた。この先、僕はずっとこのままなのだろうか。田舎に帰ることもできず、ふらふらと浮くボウフラ生活を続けていくのだろうか。でも、最近になって気がついたことは、全体が眼に見えないところで、坂を転げ落ちるみたいにどんどん悪い方向へ行っているということだ。転職した友人も多い。リストラされた仲間の話も聞く。社会全体が人間を必要としなくなっているようだ。現実には空きビルが増えている。一階、二階はまだいいけれど、上のほうの広いフロアなんかはガラガラだ。それが癌細胞のようにどんどん増殖し、ビルを蝕み、荒廃させているようだった。

夜になると、光のつかないフロアがたくさん見えてくる。街全体も少しずつ暗くなっている。最近では自分自身の生活の不安以上に、都市全体が一日一日と荒廃を深くしていっていることのほうがより重く感じられるようになってきた。むしろそれが僕のノイローゼ状態を救ってくれたのだ。人は自分独りだと孤独に陥り、疎外感を覚えるが、みんなが同じ状態だと少しほっとする。周りもそうなのかと、道連れの連帯感を覚える。それで僕のノイローゼ状態もいくらか緩和されたというわけだ。

それにしても、都市全体はどうなってしまうのだろうか。どこへ行くのか、どうすればいいのか。悪い方向へ行っていることだけは確かだ。それはみんなが漠然と感じながら、でもどうすることもできなくて、ただ大きな流れに呑み込まれていくままになっている。

僕の友人はいつも笑いこけている。テレビを見て、ただ日々を笑うことで自分を誤魔化している。テレビもたいしておもしろくないことをあえておもしろく見せて、楽しく笑うことがすべてだというふうには、毎日、笑いを氾濫させている。おいしいもの、楽しく気持ちいいもの、そして歌や踊りで満たしてくる。でも僕には、そうすればそうするほど、かえってとんでもないこともっと早く近づき、やがてすさまじい力で僕らを呑み込んでくるような気がするのだ。笑いや快楽に逃げても、それは避けられない。むしろ考える力や危機を感じる力を失くしていく。ますます何かが見えなくなっていく。ただ虚しくなるだけだ。どうなっていくのだろう。何をすればいいのだろう。僕はその重苦しい不安を覚えながら、それでも今日を生きていくためのアルバイト探しに明け暮れていた。僕はネットで探したこの条件のいいアルバイトに、ついさっき、三〇分ほど前に飛びついたというわけだ。

「とにかくマネキンを壊してくれればいいんだ」

その男は僕と視線を合わさないようにして、逃げるようにそう言った。

「この二日間でするだけたくさんのマネキンを」

「はあ……」と僕はよく事情を飲み込めないまま男の説明をただ聞いていた。男はずいぶん焦っているようだった。

「夜ぶつとおしでやってくれるんだったら、三万円を出すよ。二日で六万円だ。一日で全部やってくれたら、それも六万払う」

「そんなにももらえるんですか」

「ほんとうは、ブルドーザーでも、踏み潰してしまえばいいんだが、何せ24階にあるマネキンたちなんだ。25階にもある。26階にも……。それをとにかくエレベーターに運びやすいように、細かくしてくれればいいんだよ。五日後にそのフロアをすっかり空にして返さなきゃならないんだ。急ぐんだよ。できるだけたくさん、できる限りたくさんだ。もし全部のマネキンを壊してくれたら、一フロアごとに報奨金を出すからね。頼むよ。方法は任せる。何でもいい。どんどんやってくれ。昼夜を問わないが、むろん夜のほうがいい。深夜のほうが他の階の迷惑にならないからね」

他の階の迷惑と言ったって、ガラガラなのに……。僕は言葉を呑み込んだ。

「どんだんやってくれ。時間がない。そこに泊まって、少しは仮眠してもいいし、腹が減ったら、近所のコンビニで買って持ち込んで食べてくれ。領収書だけ取っておいてもらえばあとで清算する」

「あの……。ベッドはどこにあるんでしょうか」

「ベッド？ ああ、すまないがそんなものはないんだ。寝袋が一つあるだけだ。それでがまんしてくれ。あつと、大事なことを忘れていた。マネキンを全部壊してくれたら、報奨金を五万円プラスする。二つフロアをやってくれたら、全部で一六万だ。全部のマネキンを壊すのはちょっときついかもしれないがね」

何かのつべりしたその顔は、だんだん人間臭さが消えて、ロボットののように口を動かしているように見える。テープレコーダーが回っているようだ。整然と分けられた豊かな頭髪も、カツラのように見えてくる。男はスチール机をそそくさと片付けながら、まるでどこかへ今にも逃げ出すように、慌しく話し続ける。

「24階から26階までテナントはいない。何階かは倉庫になっている。だから、静かだよ。音が響くが気にしないでやってくれ」

「夜、ビルの電気はあまり点けられないんだ。節約するように管理会社から言われているからね。だから、電気の量が落ちるから、薄暗くしか点かないよ。慣れてきたら、きつと暗闇でもだいじようぶだろうけど、その点も心得ていてくれ」

彼は何を焦っているのだろう。明日にでもとんでもないことが起こるような、ひどく急かされている様子だった。僕の中に置き去りにされ取り残されていくような感覚がひろがってきた。

「あの……。どの程度に壊せばいいんですか」

男は、僕の華奢な体を嘗め回すように見ながら、言った。

「胴体二つくらいじゃだめだよ。手足バラバラくらいにはしないと。とにかく運びやすくしてもらわないと困る。できるだけ細かいほうがいい、もちろん」

「24階と25階ですね。それだけやればいいということ……。それでワンフロアごとに全部やれば報奨金がもらえるんですね」

僕はビルのワンフロアが相当広そうな感覚を思い返しなが、心細く確認した。

「そうだ。たいへんだよ。26階にもあるんだが、それはまあ、いい」

「普通のマネキンですよね」

「そうだ」

僕はデパートや駅の地下街で見るマネキンたちの体を想像し、のつぺりしたそのつくりを想い浮かべた。

「道具は廊下の突き当たり右の用務倉庫の中にある。トイレの裏側だ。その中の大きなロッカーの中に入っている。けっこういろんなものを用意しておいたはずだ。時間がないので、もう今日から、今からやってくれ。いいかい？ 三万円はそういう条件でのお金だ」

僕は明日からのお金もないことを振り返り、夜食も自由に寝てもいいという言葉に、背を押された。どうせ家に帰ってもまた職探しにパソコンに向かうだけの淋しい夜なら、何か仕事をしていたほうがいいと覚悟した。

「だいじょうぶです。今からやります」

何といっても一日三万円はこれまでのバイトのなかでいちばんいい。これで一週間は食いつなげる。

「そうか。ありがとう。見込んだとおりだ。頼もしいね。君ならできる。頼むよ」彼は作り笑いをした。

「ところで、君は人を殴ったことがあるか」

「……いいえ」僕はいつも衝動だけは覚えるけれど実際には何もできない自分を振り返りながら答えた。殴られたことはあります、何度も……と僕は胸の中で呟いた。

「けっこうだ。この仕事は殴る快感のようなものがある。えーと、あとは……そうそう、その服じゃ、困るだろう。すごい作業になるから汚れるよ。作業服はそのロッカーの中にあるから、それを着たまえ。つなぎの白いが入っているはずだ」

この片付け作業は立ち退きが二日前に決まったばかりなので、君が応募第一号だ、即、決まった、だから君は運がいい、君に全部任せる、報奨金を用意しておくから……じゃあ、一休みしたら上へ行ってくれ。付いていって説明したいが、お客と約束があるんだ。申し訳ないがここで失敬するよ、奮闘を期待する、がんばってくれ、そういい残すと、ポマードをてかてか光らせて分け目のくつきりしたマネキンのようなその頭をくると後ろに回し、そそくさとコートを手にしてその男はドアを開けた。最後にドアから頭だけが覗き、ドアが閉まった。

エレベーターの中は埃や塵で汚れていた。39階が最上階だけど、もうだれもこの上には昇っていないようだった。エレベーターも動いているのは、一台だけだった。おそらく事務所もみな閉じてしまっているのだろう。上はもうがらんどうになっているのかもしれない。こんな巨大なビルがほとんど使われなくなっているということは、とんでもない不況が進行していることの証拠なのだろうか。下はいくらか賑わっていたような気がするが、上へ行けば行くほど空虚な気配がある。やがてこの荒廃は下に降りてゆき、下もいつか廃墟のようになっていくのかもしれない。エレベーター自体がもう不気味だった。

ランプが24階で止まると、エレベーターは僕を吐き出し、棄てるようにして、下の階へ消えていった。静かだった。廊下に僕の足音が響く。だれもない。この静けさは何なんだろう。地上の喧騒はもうまったく聞こえない。すべてが止まってしまったような、動かない世界にいる。どこか埃とコンクリートのおいひのする冷たい剥きだしの世界に放り出された気がした。コンクリートの威圧感が僕を小さくする。もしここに人間のおいが充滿していたら、この空間はもつと生きていて、僕を萎縮させることもないだろう。ここにあるのはコンクリートがコンクリートとして蘇っている、無機質な、石の世界だ。冷たく硬いものが人間の生気をすべて排除しようとしている。廃墟の圧力が僕に向かって四方から押し寄せ、僕を小さくしてくる。この巨大な建造物が、その石の冷たさを回復させ、中にいるものをも石化させてくるようだった。

ここにいと、時間が失われていく。今何時だろう、と僕は時計を見るが、8時12分という数字も、何か根拠のない記号の羅列のような気がしてくる。時間の感覚そのものが無彩色の中に溶け込んでいく。それは、石が石として、コンクリートがコンクリートとして、その荒廃の果てに横たわる何百年何千年という時間の海を露わにしてくるからだった。生き物として生きる時間をはるかに越えて、遺跡として残る時間の膨大な量が覆い被さってくる。生身が晒される。僕はあとせいぜい五十年、六十年しか生きられない。しかし廃墟は数百年、数千年を生きる。時間の直線的な延長感がこの冷たい荒廃の中で僕を貫いてくるのだった。もし僕がここに閉じ込められ、何も食べられずに飢え死にして外界とまったく遮断されたままだとしたら、僕は白骨になってこのコンクリートと同化するだろう。もしここで核戦争が始まって白熱の光に照射されるとしたら、僕はこの場所で炭や石になって、瓦礫と同化するだろう。コンクリートの感触と冷たさの中に、生身の生きる時間が凍結されていく気がした。

僕の一足一足に響いていく音が廊下の向こうへ駆けていく。それは密閉されたまま反響し増幅して、逆に僕に絡み付いて僕の体を浮遊させる。

目の前にドアがあり、僕の仕事がここにある。僕は用務倉庫に行く前に、その現場をまず見ながら、準備をしようと思った。

ドアはノブが少し錆び付いていて、埃がたまり、軋む音がした。それはもう何ヶ月も開かれたことのない扉のようだった。ここに入る人間は、この数ヶ月だれもいなかったような気もする。ひよっとしたら、一年、二年前かもしれない。気づかれることなく、この都市の中に放っておかれた、遺棄された世界、街の中の忘れられた墓場のような気がした。だれもいず、何も動いていないはずなのに、何かが生立している量感がある。物の重なり合った、密集感がある。

ドアは途中で少し動かなかった。力を入れて思い切り押しした。弾みでドーンという大きな音がし、裏側の壁にぶつかる音がした。その響きは暗がりの向こうへ深く、大きな空洞へ吸い込まれるように反響した。

中は真つ暗だ。僕はスイッチを手探りで探して、ライトをつけた。

弱い光の中に無数の手足が浮かび上がった。頭が交錯し、裸の胴体が森をなしている。それらは埃をかぶりながら、多くは肌色の光沢を宿している。顔はそれぞれがまったく別の方向を見、目はバラバラな視線を四方に向けている。あるものは下を向き、あるものは天井を見上げ、ある

ものは首をねじって後ろへ向けている。それぞれが自由でそれぞれが勝手に、偶然の自由さでそこにただ置かれ、存在し、重なり立っている。そこにあるのは量で、僕の仕事を受け止める物のボリュームを開示しているだけだ。それはずっと向こうへ続いている。それは数十という量ではもちろんない。百、二百……数百……。それはマネキンの海という量感で僕を圧倒してきた。

これを壊す……一つ一つ……それはとほうもない量の仕事として、僕の前に大きく海を広げている。僕の前にいるマネキン——それは女のツルツル頭のウインクしているマネキンでコケティッシュな笑顔で腕を前に突き出し指先を反らせて、もう一方の手の先は向こうを指し示している姿形のものだった。乳首のない乳房が上を向いている。長いスラリとした足が一方はわずかに「く」の字形に曲げられ、一方はしなやかな伸びを見せてつま先を反らせている。微笑を浮かべる唇の稜が俗っぽい明るさでどこかへ誘<sup>いざな</sup>っている。裸の恥部には性毛も割れ目もなく、丘の曲面を盛り上げているだけだ。ウインクしている彼女は僕を見ていない。開けられた片目は僕の後ろのはるか彼方を見ているようだ。その視線の食い違いが、僕と彼女を決定的に隔っている。彼女は微笑みを浮かべている。そして僕はそれが僕に向けられていないことに、独り微笑む。この食い違いがあるのなら、物と生きている自分との決定的な溝があるのなら、僕は自分の仕事が容易にできる。僕はここに林立する夥しい「物」を壊せばいい。マネキンたちがここに海のように広がっていくように、僕はただ壊していけば仕事を終えることができるのだった。僕は笑う。

僕は水平に伸びているその腕の先に、そこだけ奇妙に赤い手の先を見つめた。それは指先に塗られた赤いマニキュアだった。口紅もない。乳首もない。しかし指先のマニキュアだけが赤を宿している。だれかがマニキュアの練習にそこだけ塗ったようだった。しなやかに方向を指差すその先に血のような赤を燃え上がらせている。その赤がよけいに胴体からの水平感を際立たせて床面と平行の感覚を僕の前に突き出してくるのだった。それは何かのスタートを暗示しているようでもあった。

ドアの裏側の横に鉄パイプが落ちていた。それは少し曲がり、錆びていたが、握りはちょうどよく、僕の手にしっくりした。僕はそれを握り、ビュッビュッと二度振ってみた。それは空を切り、ひどく大きく、重く響いた。ビュッビュッ……

僕はそれを上に振りかぶり、まず試すつもりで、指を向こうへ上げてほぼ水平に反り返らせた腕に打ち下ろした。それはゴツという音を広い空間に大きく響かせて、折れ離れた。奇妙な手ごたえが僕の鉄パイプの手に残る。マネキンの腕はガターンという陰惨な音とともに床に落ち、碎けた音をひろげながら、弾んだ。そしてさらにカラカラという音が続いた。

いっせいに、視線が僕のほうに向けられた気がした。  
《何をしやがるんだ》

マネキンたちは動かない。しかし僕を見ている。

折れた片腕を突き出しているウインク女のマネキンは、やはり僕の向こうを見ている。転がった腕から赤い爪の指が立ち、僕に向けられている。

僕はただ、これからの本格的な作業の前に、だいたいどんな感じか、その感触をつかんでおけ

ばいい。マネキンたちはもろい。素手でも折れるかもしれない。  
 僕はツルツル頭のマネキンの首を狙って水平に鉄パイプを振った。それはきっちり頸部に入り、ガシャーンという音とともに、ウインクの目の首が床に転がった。もんどりうって、それは三度回転し、鼻を下にして静止した。

### Cambodia 1 コンポンチュナン

私の名はユオンです。チア・ユオン。カンボジアでは苗字が上で、名は下にあります。私は皆からユオンと呼ばれていました。

私はポル・ポト軍の兵士として、本分を尽くしてきました。私は カンボジア共産党 クメール・ルージュの軍を信じてここまで生きてきました。私は夥しい人間を殺してきましたが、自分がしてきたことを否定することはありません。それは私の運命だったからです。それ以外に自分の生きる道があったとは思わないからです。

クメール・ルージュの軍に参加したのは一三歳のときでした。ベトナム戦争の最中でした。あの事件がなければ、私はクメール・ルージュの兵にはなっていなかったでしょう。  
 家は農家で、父と母、子供は私と妹と二人でした。連日、はるか上空を大きな飛行機の編隊が北東をめざして飛んでいきました。アメリカの爆撃機B52でした。かなり遅れてから、その飛行機のすさまじい音が田んぼに届いてきました。私はそれが何をしに、どこへ飛んで行っているのかも知らずにきれいな編隊を見上げていました。

ある日ロン・ノルの政府軍が来て、村から米を没収していきました。私たちの村はクメール・ルージュに協力しているというので、武器を隠していないかどうか、嚴重に探索され、同時に米や食料を奪われ、鶏まで持っていかれました。私たちの家にはクメール・ルージュの兵は来たことがありませんでしたが、隣の家には出入りしていたことは私も知っていました。隣家の男は抵抗し、政府軍兵士の銃で撃ち殺されました。パンツ、パンツという音とともに、彼の体が飛び撥ねたのを憶えています。

母は食糧をすべて持っていかれると困るので、泣きつき、両手を拝むようにして、いくらかでも残してくれるように懇願しました。しかし返ってきた答えは鉛弾でした。パンツと同じようにそれは母の頭を貫き、後頭部を破碎して、鮮烈な赤で地を染めました。さらに体に数発撃ち込まれ、やはり母の体はその音のたびに撥ねました。母の口から赤い泡が出ていました。太陽がギラギラと母の体に空いた穴から流れる血を光らせました。殺された母を見て、父は逆上し、兵士につかみかかりました。父も同じように頭にも何発も銃弾が撃ち込まれ、ボロ屑になりました。母に取りすがった妹も撃ち殺されました。妹はまだ一二歳だったにもかかわらず、胸ばかりでなく、下腹部に銃弾を撃ち込まれました。私はココナッツパームの陰でただ震えていました。私も殺されるかと思いましたが、出て行けず、逃げ出すこともできず、ただ木陰で震えていまし

た。ゲリラの報復を怖れたのか、警報が出ていたのか、彼らはすぐ立ち去る素振りを見せ、私を見逃しました。彼らが立ち去ったあと、私は茫然と太陽が傾くまでそこに立ち尽くしていました。父や母を穴を掘って埋めようとも思いませんでしたが、一人では何もできず、ただ放心していました。私はその夕方来たクメール・ルージュの兵士たちに連れられて、村を離れました。彼らは「やつらに仇を討て」と言ってくれました。私はただ彼らに付いていくしかありませんでした。

二時間ほど歩き、彼らの基地に入りました。基地といっても、バナナの畑の中にある小さな農家です。黒い服を着た兵士たちは、自失していた私を慰めてくれました。「やつらへの憎しみを祖国の建設に捧げろ」と肩を抱いて水を飲ませてくれました。「銃の訓練を受けろ。政府軍をやっつけるんだ」と彼らは耳元で囁きました。

「字は書けるか？ 読めるか？」と聞かれました。私は首を横に振りました。私は小学校へ行くには行きましたが、一年も経たないうちに、止めてしまっていました。家が貧しく、教科書も買えませんでした。制服ももちろんです。それに私は勉強が好きではありませんでした。牛を追いかけているほうが性に合いました。「親孝行ない子だ。働き者だ」というのが近所の人たちからよく言われていたことです。

時々村の中心にある寺へ両親といっしょに行ってお坊さんたちの話を聞きました。お坊さんは私たちに善行を勧めました。殺生をしてはいけないこと、盗みをしてはいけないこと、嘘をついてはいけないことを教えられました。善行を積むことが徳を積むことになる、それが来世の良生を約束するというものでした。私はその話をとても気に入って、それを信じていました。寺院は村の中心にあり、村人は何でもお坊さんに相談に乗ってもらっていたのです。村の人は私の父母を含めていつも朝お坊さんたちに食事を捧げていましたし、家で祝事があると、お坊さんを招んでお経をあげてもらい、祝福を受けていました。村はどんなに貧しい村でも、お坊さんたちに毎朝食事を捧げることは欠かしませんでした。すべての村はそういうことで成立していたのです。

七月の安居入りカオ、ハンサーのときの捧げ物や、秋の稲の収穫時の安居明けオイク、ハンサーのときのカチナの寄進も、その後の村の祭りも、一年の重要な行事でした。私の家も、どの家もみな、食べ物や衣や、なげなしのお金まで持って寺へ寄進に行きました。村はどの家も貧しかったですし、華僑の金貸しに依存しなければやっていけない状態でした。しかし積徳タシブすることで心が浄化され、将来や来世の運命が切り開かれるということのみな信じて、素朴に日々を営んでいました。たしかにそれでけっこう和やかに暮らしていたのです。小学校を途中で止めてしまった私を、読み書きを習わせるために、また家の食い扶持を減らすために、一時小僧として寺に預けることも両親は考えていたそうです。それは結局農作業に私の手が不可欠になって、実現しないまま流れてしまいました。

しかし、両親が殺されたとき、寺院の僧は逃げてしまいました。人の道や極楽浄土を説く僧が、真っ先に逃げ、身を隠してしまいました。私は両親が目の前で撃ち殺されたそのとき以来、極楽

などまったく信じなくなりました。積徳ツクテンなど意味がない。あるのは地獄だけだとわかったのです。父や母の死体を埋めることもできず、寺で経を上げてもらって火葬することもできず、それ以後見たたくさんの死体と同じように、父母の死体もただ腐っていったことを、あるいはせいぜい犬の餌になったことを、私は漠然と受け入れていました。

一三歳の私は、黒い服を着た兵士たちから、様々なことを教えられました。銃の撃ち方、手入れの仕方など、厳しかったです。根気よく彼らは教えてくれました。字も少し習いました。自分の名前は前から書けましたが、クメール・ルーージュの名前やポル・ポトの名前くらいは地面に書けるようになりました。読み書きは少しは進歩したように思います。

私よりも一、二歳若い兵士もいました。彼らの多くは私と同じように、ろくに字も書けませんでしたが、やはりできるようになりました。みな純粹で、言われたことを信じ、そのまま忠実に実行しました。

彼らはほとんど私と同じように、父や母が政府軍兵士に殺されていたのです。浮浪者として町をさまよっていた者もいました。私たちはいつもいっしょに行動していました。

あるとき、私たちの班長が来て「今日はおもしろい遊びをしよう」と言って、鶏を持ってきました。班長は二十四歳の精悍な人で、政府軍と何度も実戦を重ねてきた少尉の位の人でした。彼は私たち少年兵の教育係を兼ねていました。私たちの前で、彼はコーラのビンに入れてきた灯油を、抱いている鶏に頭からかけました。鶏はキョトンとしていました。そして彼はその鶏を地面に置くと、ライターで火をつけたのです。鶏は炎の塊りとなって燃え上がり、白い羽をいっぱいにひろげて猛烈な勢いで駆け回りました。私は最初政府軍兵士にすがりつく母の姿を思い出しましたが、仲間たちが笑い興じるのを見て、おもしろさのほうに目が移り始めました。石のところをピョンとものすごく高く飛び跳ねるのを見て、笑いがこみあげてきました。鶏は空を飛んだようにも映りました。ずいぶん高く飛んだ気がします。でも、それを最後に、ほとんど動かなくなりました。羽をなおバタバタわずかに動かし続け、やがて炎の中で真っ黒になりました。

班長は、さらに黒焦げのそれを頬張りました。うまかったです。うまさと同時に、鶏の飛び回る姿が、私の脳裡に焼き付きました。それは、最初に母のことを思い出さなければ、とても滑稽な、おもしろい姿でした。私は母のことを思い出したことで、仲間たちに「勇気がない」「臆病だ」と言われることがいやでした。仲間たちがあんなに腹の底から笑って興じたのを見たことがあります。ですから、最後は笑っていましたし、事実慣れるととてもおもしろく感じるようになったのです。

私たちには、楽しみと叫びたら、ココナツパームの木に登ってヤシをとったり、牛に乗ったり、牛の乳を飲んだり、トカゲをとったり、トツケーと呼ばれる大型のヤモリを捕えたりすることしかありませんでした。両親もいず、兄弟もいず、ただ黒い兵服を着た銃を持った人たちといっしょに暮らし、彼らといっしょに食事をし、訓練を受けることが、私たちの毎日でした。もちろん、テレビやラジオや雑誌など、そういう潤いのある娯楽的なものはいっさいありませんでした。

た。私たちは班長の言うことをすべて信じ、その声に耳を傾け、その方向に自分たちが歩んでいくことを疑いませんでした。班長は私たちに、マツチをプレゼントしてくれました。小さな一箱を一人ずつくれました。ただ、それはけっして火薬の扱い方をマスターするまで、使ってはいけないと言われました。

私たちの日常は、訓練と勉強と、あとは農作業などの手伝いでした。午前中はだいたい銃や火薬の扱い方の勉強、あと簡単な読み書き、ほとんどそれは軍事的なものに対する知識でした。三人一組でそれが四つ集まって一つの班になります。班が三つ集まって三六人の小隊になり、また三つ集まって一〇八人の中隊になり、それから三つが集まって大隊になります。さらに大隊から連隊、そして師団になりました。それぞれの役割や、地雷のこと、迫撃砲のこと、塹壕の掘り方、砲弾にはどう対処しなければならぬかを教えられました。爆裂は水平から45度の角度で飛び散るので、そのときはどういう伏せ方をすればいいか、とか、地雷の種類や信管の扱い方、B1という携帯ロケット砲、軽迫撃砲、バズーカ砲の使い方など、実際の兵器を見せられながら、実地訓練を受けました。武器のないときはどうやって相手を殺すか、また棒の使い方や紐の使い方、針金の使い方まで習いました。匍匐のまま水の中を進んだり、草で頬が切れ、そこに汗が染み込んでヒリヒリするのもかまわずに前進したり、逆に雨のジャングルの中を後退したりしました。

私たちが特に勉強したのは、AK46銃とM16銃でした。AK46銃は中国製で、重く、弾倉が湾曲しています。マシンガンのように連射もできませんし、一発一発で狙撃もできます。AKの弾はずんぐりしていて、M16より重く、発射音も、反動も大きいので、命中率は少し下がります。しかし音が大きい分、威嚇効果があり、一斉射撃のときは同じ人数の敵兵よりもはるかに大きな音になって、敵はその音で逃げ出したりすることがあります。実際にその後実戦でも経験したことです。M16銃はAK46よりずっと軽く、持ち運びにはとても有利です。弾倉は直線の箱型で、これも携帯用には便利です。連射速度はAKよりも勝っています。しかし口径はわずかに小さく、弾丸も細身なので、破壊力はAKよりも劣ります。分解したり、中を掃除したりするのは、AKのほうが構造的に簡単に、頑丈にできているので、やりやすい面があります。水の中を歩いて濡らしても、AKのほうが故障が少ない。ですから、AKはゲリラ向きです。

しかし、銃の補充がなく、弾も私たちのところへ届くのはまだ当時は少なかったので、政府軍をやつつけたり、輸送トラックを襲撃したりして、奪った政府軍の兵器や銃を転用しなければなりませんでした。それで、M16も使わざるを得ず、かなりの時期まで仲間たちも半数はそれを持って使っていました。私たち少年兵は体がまだ小さい者がほとんどでしたから、体力的には軽いM16銃のほうがふさわしかったのですが、音の大きいことや正規銃の意味合いから、誇りとしてAKのほうに憧れていました。

実際に銃を撃たせてもらったのは、訓練を受けてから一カ月後でした。中古のAKが訓練用に私に手渡されました。初めて握ったときの感触は、鉄の重みが手にずしりと来て、威厳が体に伝わってきたような気がしました。右手の人差し指に引き金の手ごたえがかかってきたとき、これで政府軍に復讐ができるという喜びに身が震えました。安全装置を外すときのガチャリという

音、弾倉の美しい濃緑の溝に、私はそれが私の体の一部のようない感じがしたものです。最初に撃つたときの体に返ってくる反動の手ごたえは、これで私も戦争のただ中に飛び込んだという、生々しい緊張感でした。

標的はたわいもなく、ただのアキ缶でしたが、私は銃架を安定させ、狙いをしっかりとつけて、引き金を引きました。反動が私の顎を叩いてきました。しかし、アキ缶はピンと弾け飛びました。それは三〇メートル向こうで見事に穴を開け、コロコロと転がりました。班長が誉めてくれました。AKで、最初からこの距離で命中させるのは成績がいいということでした。

私たちは、それから火薬の作り方、混ぜ合わせ方を学びました。AKの弾を分解して解いて、そこから火薬を集めて地雷を作る方法も教えられました。外殻は木の箱で、それは自分たちの手作りでした。もちろん、信管の配線も、最も重要な部分として、厳しく訓練されました。全体を実現するのはまた別な労力が必要でした。実際、作業中暴発して仲間の一人が足を失いました。最初地雷を組み立てたときは緊張感の連続で、その作業が終わったときにはどっと汗が吹き出し、体重が減ったような気がしたくらいでした。

銃の撃ち方を実習し、全体的な扱い方が身に付き、地雷の作り方を勉強し終えたとき、私たちはクメール・ルージュの正規兵として、兵番号が与えられました。私は28R・4578という数字でした。そして正規の銃が与えられました。

私たちはマッチを自由に使えるようになりました。火薬やガソリンとの兼ね合い、それらに引火する危険というのを熟知した上で、処理できるとされたからです。それはまた別な意味で、一人前になったような充足感を与えてくれました。タバコも喫<sup>+</sup>つていいということでしたが、私たちの仲間はまだだれも喫いませんでした。

あるとき、仲間の一人が蛇を見つけてきて、みなでそれを殺しました。石油をかけて、それに初めて火を点け、くねり踊るのを笑いながら見、それから尖った棒で突き殺しました。それからさらに焼き加えて、それを食べました。それは他愛もない私たちの遊びでしたが、一度それをやると何か他の動物もやりたくなってきました。ネズミやトカゲやトツケを獲ってきて、それを焼き殺したり、マンガースを捕えてきて、みなで鬺り殺したり、フクロウの翼に火をつけて飛ばしたり、しだいにエスカレートしていきました。動物を捕えてそれを食料にするのは、田舎ではだれもがやっていることでしたが、それらに火を点けて、みんなで興じるところに奇妙な快感がありました。断末魔といいますか、最後に逆り出るすさまじい力を見ることに、わくわくしました。私たちにはスポーツなどの娯楽はまったくありませんでした。ただ軍事的な訓練と農作業だけが、私たちは特に軍事訓練には忠実で、機械のようになっていったかもしれませぬ。しかし、そのことだけは、私たちの娯楽であり、楽しみでした。

私たちは前線に出ることになりました。東部のベトナム国境付近は当時ホーチミン・ルート最後の領域として、激戦地帯でした。アメリカから五〇万を超える兵が派兵されていて、ベトナム政府軍はそれ以上いるということでした。班長は、当時小隊長でしたが、とても視野の広い人で、全体の状況をよく把握していました。彼が言うのには、アメリカと南ベトナム政府は、共産

化を防ぐために、ありとあらゆる手段で共産ゲリラを掃討しようとしている。北ベトナムのホーチミンは南ベトナムだけでなく、カンボジアもラオスもみな同時に解放して共産化し、自由で貧富の差のない平等の社会にしようとしている。これはそのための戦いだということでした。南ベトナム解放戦線への武器弾薬は、中国やソ連からの軍需物資をラオス・カンボジア経由で大規模に運んでいるものでした。これがホーチミン・ルートで、この補給ルート確保のための戦いは同時にルートの広範な全域をまとめ、ラオス、カンボジアを含めてインドシナ半島全体を解放しようとする大きなスケールの解放戦争でした。アメリカはこれを叩こうとして、連日北ベトナムやラオスに爆撃を繰り返していました。私が毎日見ていたB52もそのための爆撃を繰り返していたわけです。しかし思うように効果があげられず、ルートを遮るには、やはり地上部隊でないとダメで、その掃討のために大きな作戦を展開することになったそうです。カンボジアのホーチミン・ルートを遮断するには、カンボジア側からの軍事行動が必要でしたが、当時国王のシハヌーク殿下は北ベトナムと南ベトナム解放戦線に好意的で、ホーチミン・ルートを対アメリカの取引の材料にしていました。それで業を煮やしたアメリカが、將軍のロン・ノルを焚き付けて、シハヌーク国王の外遊中にクーデターを起こさせ、政権を奪取させたというのです。それによって南ベトナム政府軍と、アメリカ軍と、ロン・ノル政府軍とで連携して、カンボジア領内とラオス領内のホーチミン・ルートを壊滅させようと大規模な軍事作戦を展開したわけです。それはしかし一時的には成功したものの、またゲリラ側が勢いを盛り返していました。解放の戦いは、南ベトナムは南ベトナム解放戦線、ラオスはパテト・ラオ、そしてカンボジアはクメール・ルージュが主導していると彼は丁寧に教えてくれました。政権を追われたシハヌーク殿下も、ロン・ノル政権を倒そうと、クメール・ルージュと共闘しているということでした。

東部へ行くと、上空を通過する飛行機が、多くなりました。ジェット爆撃機、そしてヘリコプターも低空をけたたましい音を立てて飛んでいきました。ナバーム弾で森全体を焼き払っている光景もしばしば見ました。真っ赤に燃え上がる森は、ずっと地平線を這い、夕焼けの紅い光と呼応して、ますます戦争が激しくなっていく印象をつのらせました。母が殺されたときの血の赤い色が、空いっぱい広がってくるような気がしました。

初めての戦闘は、国境へ続く道路の政府軍の検問を襲ったときでした。B1ロケット砲を撃ち込み、戦闘が始まりました。敵の銃弾が、私の足元の地面を跳ね上げました。そればかりか、頬のすぐそばをウイーンと風を切る音が飛び過ぎました。私は恐怖に襲われ、体が硬直しました。意識は闘わなければいけないと思うのですが、体が固まり、動かないのです。私がかろうじてできたのは、後ろを向き、そのままの姿勢で銃身だけを敵に向けて、引き金を引いたことだけでした。それがせいっぱいでした。私たちはすぐに敵の反撃を受け、逃走しました。敵に増援部隊がやってきたからです。私は恥ずかしさでいっぱいでした。「最初はだれでもそうだ」と班長から慰められました。

それから一週間後、私たちは援軍を得て三倍に膨らんだ勢力で、別な幹線道路に配置された検問所を襲撃しました。三発のロケット砲を撃ち込み、混乱を引き起こして、逃げ出した者から狙撃しつつ、包囲を狭めていく、常套的な方法をあげました。

私は伏せたまま、待ち伏せの態勢でAK銃の銃身を固定させて待機していました。突然政府軍の将校らしい男が中から飛び出してジープに飛び乗り、エンジンをかけて猛烈な勢いで私のほうに突っ込んできました。もしそのままでしたら、私は跳ね飛ばされるか、轢き殺されるかどちらかでした。私は立ち、もう逃げ出すことは考えずに、真正面から男を狙って引き金を引きました。

フロントガラスをぶち割って、顔に穴の空く手ごたえが、私の手に残りました。車は私への軌道から大きく外れ、横の窪地に突っ込んで車輪を空転させました。横に大きく放り出された将校に伏せた姿勢で近づき、私はもう抵抗がないかどうか確認しながら、念を入れてさらに二発、胸に撃ち込みました。血の流れ出た伏せた顔を蹴り上げると、私の最初の弾は左眼に命中し、真っ赤に潰れていました。後頭部にグシャグシャのものが飛び出ていました。血が乾季のカラカラに乾いた地面に流れ出し、光りながら広がっていきました。殺すということはこういうことか、それなら自分ももっと前から殺していたな、と思いました。私はヒリヒリして粘つく<sup>ねば</sup>渴きとともに、銃身がいつそう熱く焼けていく灼熱感を太陽の光の下に覚えていました。

## ENOLA GAY 1 南西太平洋 テニアン

### テイベッツ

最後の指令は下りた。出発まであと四時間。今、夜の二〇時半だ。

「スペシャル」はすでにおれの機に積まれ、爆弾倉の中でおれたちを待っている。向こうの舗装<sup>ハード</sup>駐機場<sup>スタンド</sup>で、五〇人を超える整備兵が夜のなかに皓々と光を灯し、おれのB 29に群がっている。最後の整備に精を出している。すべてはうまくいっている。ここまでやるべきことはすべてやった。これからですべてが決まる。この日のためにいっさいを賭けてきた。何もかもこのためだ。皆が全意志を集中すればおそらくだいじょうぶだろう。爆撃は成功するはずだ。

戦争にはいつも音がある。爆音や、砲や機銃の音、機械の音、車輪の軋み、エンジンの音、ブレーキ音、人間の醸し出すざわめき、命令の声、ぼやきや絶叫や怒りや、憎しみや絶望の声、それらはよく聞こえなくても、どこから熱い空気となつて全体を包んでくる。人間が破壊のために活動している全体の音が巨大なドームのようにおれたちを包んでいる。このテニアンという島や、サイパンをも掩蔽している。

出発を間近にして熱いうねりが押し寄せてくる。しかし同時に大きく圧してくるものがある。この重苦しさは何だろう。いまおれに押しつぶさてくるそれは、ヨーロッパの戦線に参加していたときも覚えなかったものだ。おれにはわからない。「スペシャル」のせいだ。しかし「スペシャル」だけではない、もっとその向こうにある何か、この重圧をのしかけてくる。もっと大

きな「怪物」がそこにいる——おれは「スペシヤル」の爆発さえまだ見たことがない。「スペシヤル」は一発で都市を破壊してしまう代物だ。しかしこの「スペシヤル」でさえただの始まりにすぎない、もつととほうもない巨大なものが繋がっている。その「巨大な何か」が始まる。それがおれに苦しくのしかかってくるのだ。科学者の先生たちは「この『スペシヤル』もとほうもない破壊力を持つているが、あとからさらに開発される爆弾に比べれば『爆竹』のようなものだ」と言った。ほんとうだろうか。「スペシヤル」が一発で都市を粉砕してしまうものだとしたら、それより大きいものというのはいったい何だろう。……くそ。わかりやしない。とにかくおれはこの爆撃を成功させるだけだ。それにベストを尽くそう。

グローブスも科学者たちも、この「スペシヤル」が戦争の終結を早めると断言した。おれもそう思う。だからこのフライトがどれくらい重要な意味を持つか、おれにもよくわかる。すべてを尽くして、おれの能力のすべてを賭けて、何が何でも成功させなきゃならん。

もし、失敗したら、グローブスやファレル將軍が言うようにおれは軍法会議にかけられて刑務所送りになるだろう。よくてアラスカだ。決して脅かしじゃない。それだけのものがこの「スペシヤル」には賭けられている。

いやいや、そんなのはまだいいほうだ。何か事故があつて、日本の上空でおれの機がダメになった場合、おれはきょう渡されたこの胸のポケットにある一二個のカプセルをみんなに一つずつ渡さなきゃならん。一粒で簡単に死ぬる青酸カリ入りだ。おれはそのとき、みんなに言うだろう。

「もし撃墜されて、我々が日本軍に捕まったら、やつらはどんな手段をとるか、想像してみろ。我々が何をしようとしていたか、どんな機密を持っているか、やつらは白状させるために手段を選ばない。生爪を剥がすことや、皮膚を焼いたりすることは序の口だ。ありとあらゆる拷問にかけるだろう。死んだほうがましだと何度思うことか。だから、そんな目にあいたくなかったら、自分で選択しろ。二つに一つ——ピストルか、カプセルか、だ」と。そしてそれは、だれよりも自分に言い聞かせる言葉だ。

グローブスはおれがアラモゴードへ行かなかったことをえらく怒っていたが、しかたがない。あのときはこのテナアンからファイビーがおれたちの509部隊が危機に瀕していると信号を送ってきていた。いつも冷静な爆撃手のファイビーが言ってくるんだから、相当なことだ。めったなことでは弱音を口にするような男<sup>やう</sup>じゃない。だからおれは「スペシヤル」の実験を見るのを犠牲にして、こちらへ飛んできたんだ。やむを得なかった。しかし、きのうパーソンズがブリーフィングでみんなに映写して見せたあのフィルムを見ると、グローブスが怒るのも無理はない。あんなものは二度とお目にかかれるもんじゃやない。あのフィルムはたしかにそういうものだったな。あの雲は化け物みたいだった。あれが急速に上昇しておれたちの機体よりもつと高く昇ってくる。

おれたちは、あの爆発から現実には逃げられるだろうか。科学者たちは言った。「この爆発はこれまでこの地上で経験のないものです。だから、何が起るか、どうなるか、具体的なことはわからない。実際に爆発してみないとその規模も範囲も詳しいことはわからないのです」と。だか

ら最悪の場合はおれたちはその爆発に巻き込まれて、消えてしまうかもしれない。いくら計算上、155度の急降下旋回で圈内からの回避を訓練してきても、そのときになればそれも無駄な訓練だったということになるのかもしれない。

去年初めてロスアラモスでオッペルオッペンハイマーから「スペシャル」のことを聞いたとき、おれはめずらしく取り乱したな。オッペルはいろいろおれの質問に答えてきたあと、真顔で言ってきた。「さしあたってあなたにとつて最も重要な問題は、爆弾があなたの機を離れたあとのことでしょう。爆発が起きたとき、あなたとその爆撃機は爆発圏内から脱出できないかもしれない。衝撃波があなたの機を打ち砕いてしまうこともあり得る。残念ながら私はあなたが生き残れるという保証はできません」——おれはパイプを取り落としていたな。おれの飛行機を何だと思っているんだ。おれはB29の生え抜きのテストパイロットだ。B29が赤ん坊のときから付き合ってきた。B29はおれの体の一部だ。こいつはB29という飛行機をまったく知らないのか。一万メートルの高度から爆撃するその性能を知らないのか。どんな高射砲もそこまでは届かない。戦闘機も自由に昇って来れない。だから設計された爆撃機なのだ。学者馬鹿なのか。しかしオッペルの目は真剣だった。わかっていて言っている目だった。一万メートルの上空にまで衝撃波が昇ってくる爆弾——こいつは真顔で言っている。おれはそのとき、その爆弾を理解した。そして、大統領直属の独立命令系統を理解したのだ。そのときパイプが俺の手からすり落ちていた。おれは「失礼」と言つてすぐそれを拾った。

やつらはそれを実現した。おれたちもそれを落とせるようにした。あとは実際に今落とすだけだ。どんな爆撃も、どんな出撃も、死と隣り合わせであることに変わりない。おれたちは戦争をしているんだ。死はいつも隣にある。おれはいつもそれを乗り越えてきた。しかし今度の出撃はもっとちがう何かだ。とんでもないことが待っている気がする。おれたちのうしろにもとほうもないものが控えている。ファレルはよく「これは二〇億ドルかかっている爆弾だ。今年の総軍事費の八分の一だぞ。みんな肝に命じておけ」と言っていた。

成功するだろうか……死の中に光明はあるだろうか。生きて帰って来れるか……死ぬかもしれない……いや、必ず帰る。いつものようにやるだけだ。おれ自身を信じていることだ。それがすべてだ。

このフライトはさらに一つ問題を抱えている。重量オーバーだということだ。「スペシャル」だけでも四・五トンなのに、それに特殊レーダーや映写機や、新機械をいろいろ積み込んでいく。特に「スペシャル」のための放射能測定器やいろいろな測定器をやたらに積み込んでいる。定員一〇人だが、このフライトは一二人だ。制限を一万五〇〇〇ポンド、六・八トンも超えている。この重量での離陸は失敗の危険が増す。このテニアンテニアンの基地でも、サイパンの滑走路でも、たくさんB29が離陸に失敗して、燃え上がっているのをおれも目にしてきた。離陸はうまくできるだろうか。……やつてみなきやわからん。科学者たちにも、パーソズパーソンズにも、できるだけ軽くしてくれ、といったにもかかわらず、これが精一杯だということだった。科学者たちには科学者たちの言い分があり、譲れない線がある。またいまさら言ったところで軽減は不可能だろう。おれはおれのやり方でこれ乗り越えるしかない。B29を信頼するしかない。これ乗り越える

には、目いっぱい、滑走路を使って走り続け、浮揚力を高めるしかないだろう。2500メートルの滑走路をギリギリ使ってやってみよう。離陸に失敗したら、すべておしまいだ。

繰り返し襲ってくるこの不安とたまらない緊張。何かにすがりたくなるのは当然だ。おれは部隊の従軍牧師のところへ足を運んでしまった。おれはこれまで、牧師にこんなことを告白したことはない。やつに話したくなかったのは事実だ。おれはいつも神のような超越的な存在とは、直接向かい合うのがいいと思っていたし、その通りにやってきた。そのほうが大きく深く、そして強くなれたからだ。しかしおれは牧師の前に頭を垂れ、言ってしまった。結局、この爆弾で一挙に死ぬ人間のことが無意識のうちにおれを掴んでいるのだ。

「牧師、私はこれから爆弾を落とすに行きます。私の爆弾で何万人という人間が死ぬでしょう。この行為は許されるのでしょうか」

「ダウニー牧師は言った。それはいつも彼が繰り返していたことにすぎなかった。」

「戦争では、人を殺すことはすなわち勝つか負けるかの勝負のためにほかなりません。それを認めない者はその代わりに敗北を受け入れるつもりでなければなりません。合衆国の勝利のために——そして戦争終結のために」

おれは黙って頭を下げ、外へ出た。不安は去らなかつた。むしろ胸はもっと重苦しくなっていた。このとほうもなく大きな重圧が、おれを押さえつけていた。やはりおれにはこれまでどおり、自分で直接神に語りかけることでしか、この重圧をはねのける勇氣は湧いてこないことを悟った。

おれは滑走路へ向かい、舗装駐機場ハイドスタントで待っているおれの機のところへ独りで歩いた。飛行場の整備の騒音が再びおれの耳を満たしてきた。

B 29 のジュラルミンの機体が整備ライトの光の中に輝いている。三〇メートルの銀色の長い胴体がアスファルトの上に延び、燃料を満たした四三メートルの翼が巨大なコンドルの翼のように地を蓋っている。すでに「スペシャル」はその腹に納められ、おれの手で空へ舞い上がるのを待っている。ダブル・タイヤが太い足でその翼をいま支えている。でかい四枚の十字プロペラが静止し、時の流れの中に歴史を刻むはずの回転を夢見ている。プロペラの後ろのそれぞれの四発のライトR3350の2200馬力のエンジンが、今は「ヒロシマ」と戦争への力を蔵して出撃を待っている。第一エンジン、第二エンジン、第三エンジン、そして第四エンジン……頼もしいやつらだ。

おれはこのB 29 がほとんど生まれたときから付き合ってきた。試験飛行で死んだ第一号のテストパイロットのあとを受けてから、おれはずっとこのB 29 といっしょに軍隊生活を送ってきた。B 29 の隅々まで、おれの血は通っている。翼の先までおれの子だ。ルメイ將軍の率いるB 29 の第二〇日本本土爆撃兵団の第一期のパイロットはほとんどおれの教え子だし、ルメイ將軍でさえ、B 29 の操縦はおれが教えたのだ。B 29 で「スペシャル」を落とすとしたら、だからおれが確かにいちばんふさわしい。おれがいちばん、このB 29 という爆撃機を知っているからだ。この機も、コロラドのマーチンのボーイングの工場工場で、工場長といっしょに最良の機を選んだ。工

場長が「最高です」と保証してくれたものだ。これはおれのための機だ。おまえはきれいなやつ、おれの大空の人生を受け止める最愛の翼だ。おれはこの大仕事をおまえとやれることを誇りに思う。

しかしおれは、死以上のとほうもない重圧をまだ乗り切れてはいない。たくさん人間を殺し、一つの都市を破壊する爆弾の投下がいかにして可能か。いかにして許されるのか。この問いとそれを引き受けることの前には、ハムレットの苦悩も子供の戯れにすぎない。いまここでピストルで頭をぶち抜くことのほうがまだ簡単かもしれない……。おれはいくらでも逃げられる。おれは軍人だ。命令をまっとうするだけだ。命令を忠実に実行することが軍人の本分だ。徹底して、機械として実行するだけがすべてで、それ以外に何も必要がない……。冷徹に——それだけだ……。しかし、それだけではすまない何かが、おれを苦しめるのだ。

整備員たちがおれに挨拶する。おれは軽い敬礼で返す。そう……。ご苦勞。ご苦勞……。ありがとう。おれは点検する振りをして、機体に近づき、そのボディに触れる。主車輪タイヤ圧力が75〜85 p s i、前車輪圧力が45〜50 p s iであることを目視でチェックする。舵面トリムタブはヒンジの遊びが過大でなく、凹みもない。そしておれは掌でジュラルミンの金属肌に触れていく。夜気を帯びて少しひんやりとしている。おれはこいつを愛撫する。特におれが好きな形は、こいつの楕円形の美しい機首部だ。開け放たれたように視野が広い操縦席はおれを大空へ向けて解放する。その優美な楕円形の操縦室コントロールの曲面は、女の体のようだ。

そして操縦窓のすぐ下に、ライトに照らされたENOLA GAYエノラというおれの母の名を見つける。82の機体番号といっしょに。母の名前は、きのうの午後、急遽ペンキ工に書かせたものだ。母はいつもおれを黙って大きく受け入れ、導いてくれた。おれが初めて空を飛んで、大空をおれの生きる道だとして陸軍の航空兵に志願したいと言ったとき、父は猛烈に反対した。第一次大戦に従軍した父は「軍隊はろくでなしの行くところだ。ましていつ落ちるかかわらん飛行機乗りになるなんて、大馬鹿だ。絶対に許さんぞ」と言った。しかし母はおれの眼を覗き込んで「おまえがほんとうにそう思うんなら、志は大切にしなければならぬよ」と言ってくれた。ほんとうは、死の確率が増す飛行機乗りには、母のほうが辛かったはずなのに、母は息子の死を受け入れる覚悟でそう言ったのだ。おれは今になって母の勇気がよくわかる。母はいつも、どんなことがあると子供を信じ、ともに歩んでくれた。いつも落ち着いて、穏やかだった。荒れ狂う感情を抑えて、よりよい方向へ進むことを見守ってくれた。「おまえは、何があっても、どこへ行っても、どんなときでもだいじようぶだよ。おまえはきつとうまくやる」母はそう言って微笑んでくれた。実際いつも母の眼差しの下では、成功し、うまくいったのだ。穏やかな心で真剣に物事に取り組み、必ず成就することを母は教えてくれた。そして、勇気を持って、信じて見守る眼差しのうちに、おれは物事を一つ一つしっかりやり遂げることを学んだのだ。困ったとき、万事窮したようなとき、おれはいつも勇気を底に潜めた穏やかな母の微笑を思い出して、アイデアを思いつき、危機を脱した。おれにとって、母は世界でただ一人の母であり、今のおれへの道を開いてくれた

最愛の人間だ。その母へ、おれはこの荣誉ある仕事を捧げたかった。そしていつも成就と成功を約束してきた母の存在に、今回もその成就を託したかった。おれは不安だった。感情を抑えることを母から学び、軍隊はまたそれを育む場所だったが、今回は抑えきることができない何かがおれの中で渦巻いている。だから、今回の成功を母の眼差しにすぎりたくて、おれはしゃにむにこれを機体に書かせたのだ。副操縦士のルイスがおれに文句を言ってきた「なんだってこんな名をおれたちの機に書くんだ」と。しかしそんなことはおまえには関係ない。おまえは何にもわかっちゃいない。おれは怒鳴って追い返した。「つべこべぬかすな」と。——「母さん、頼むよ。今回も成功へ導いてくれ」おれはそれにすがり、それをただ祈る気持ちで、母の名をそこに記したのだ。

しかし今、おれは後悔している。書かなければよかったと思う。もしおれが失敗したとき、「エノラ ゲイ」の名は汚名になる。そしてもし成功した場合、そのときも結局史上初めて一発の爆弾で一つの都市が消えた破壊の象徴として歴史に残ることになる。どちらにしても、母の名は母の意思とは反対の汚名となるのだ。それに気がついたとき、おれは愕然とした。いまさら消すことはできない。母さん、どうしたらいいんだ。おれは母さんにとんでもないことをしてしまった。ごめん、謝るよ、どうしたらいい……

おれは途方に暮れ、ピストルで頭をぶち抜きたい気持ちで、夜空を見上げた。満天の星がまたたき、潮風がどこからか吹き寄せてくる。それはガソリンのにおいを清め、おれを宇宙の広大な広がりの中に吸い上げていくようだった。海の風がおれの頬を撫で、また穏やかな微笑みが宇宙のその深みから届いてくる気がした。

——退くことが、今、お前にできるのかい——  
母の声がした。

できないよ、母さん。退いてもしかたがないんだ——おれは答えた。

——じゃあ、進むしかないよ。おまえは戦争の道を歩んでいるんだ。人殺しの道だ。退いたって、進んだって、どっちにしたって避けられない愚かな道だよ——

ああ。

——でもその愚かな中にもどこかに希望が転がっているはずだよ。私がおまえをいつも心配しているように、戦場で戦う息子たちをいつも心配している母親がアメリカにはたくさんいることを忘れちゃいけないよ。もう息子を失くしてしまった母親たちもたくさんいる。その嘆きは国中に満ちている。わかるかい？——

わかるとも。もちろんだよ。おれが母さんのことを思っているように。

——敵国の日本にも、無意味な戦争で息子を失くした母親たちがたくさんいる。同じことだろう？——

敵は敵だよ。おれたちは敵を殺しに行くんだよ。皆殺しにさ。

——敵も人間だよ。嘆きは地球に満ちている。戦争を早く終わらせることがおまえにできるとしたら、それを信じるしかないだろう？ それがおまえにできることだったら、それしかないんだったら、全力でそれをやるしかないじゃないか。眼をつぶるんだ。そのために私が汚名を

着るとしたら、喜んで着よう。勇気を持ってやってごらん。一発の爆弾で何万人も死に、都市がすっかり破壊されるなら、永遠に私もおまえも呪われた存在になる。でも、それも宿命だ。わずかな希望の道を見つけてくれればそれでいい。逃げられないなら、せめて希望を託すんだよ。おまえがそこに希望を託すんなら、私も希望の名になれるかもしれない——  
わかったよ。母さん。

星の光がおれの胸の底に入ってくるようだった。それは力として、おれを動かした。おれはもう一度家に帰りたいたいと思った。それができるように祈った。  
ルイス

悪玉どもめ。やつらに一発食らわしてやることがおれの仕事だ。おれの人生で、ナチスのヒトラーの第三帝国の冷血野郎どもと、ヒロヒトの日本軍のイエロウ野郎どもくらい憎むべき存在はない。おれの仲間が何十人やつらの餌食になったことか。おれの大事な親友たちを片っ端から殺しやがった。おれが結婚式に参加した仲間一二人のうち、やもめになったのが九人だ。おれの大事な仲間を殺しやがって。

おれはいらいらししてるな。何かおれはやたらに怒りたいようだ。テイベッツのボスはおれがずっと乗ってきたB 29に ENOLA GAY なんて書いちゃうし、みんなはおれを「飲んだくれ」だと言って引き摺り下ろそうとするし、踏んだり蹴ったりだ。しかし操縦に関してはおれはきつとボスよりうまいはずだ。おれの操縦はおれの部下が天才だと言ってくれるくらいだから。ほんとはおれが「スペシャル」を落としに操縦していくのがふさわしいんだ。ふん。馬鹿野郎どもめ。どうしておれの腕をもっと認めないんだ。おれは副操縦士としてよりも、ほんとにはキャプテンとして行くべきだ。おれが英雄ヒーローになるべきなんだ。

おれたちの部隊が他のB 29の部隊から何と言われているのか、知っているのか。509混成部隊は毎日うまいものを食って、うまい酒を飲んで、日本にも飛んでいかずに、近くの家や島の上だけを散歩みたいに飛んで、ただ帰ってくる。他の部隊の者は日本に命がけで飛んで行って、撃墜されて、死ぬ者もいるのに、あいつらは何にもせずに遊んでいる。あいつらを真っ先に前線にやれ、第二〇航空軍の恥だと、おれは酒場でケンカを売られた。カボチャ爆弾を落とすカボチャ野郎どもとな。テナアンやサイパンで今流行はやっている歌を知ってるか、と言われた。おれはこんな屈辱を受けたことはない。やつらはおれを羽交い絞めにして、歌いやがった。

空の彼方へ飛んでいく

不思議なやつらを知ってるか

どこへ行くのか聞いても無駄さ

だれも何にも教えちゃくれない

日暮れになると帰ってくるが

どこへ何しに行ってきたのか  
 秘密のボールに包まれてる  
 つべこべいわずに指一本  
 口に当てているだよ

どやされたくなけりや  
 何にも聞くな シーツ、シーツを繰り返す  
 どこで何してどうだったのか  
 黙っているよの一点張り

やつらはきつとひそやかに  
 でっかいことをやっている  
 509の無駄飯食らい  
 カボチャ野郎のチキン野郎

おれはまだ機密を言えなかった。口が裂けても、おれたちがやろうとしていることを。おれはパンツを下げられて、みんなに嘲り笑いを浴びた。馬鹿野郎、いまに見てる。おれたちがやろうとしていることが何だったのか、いまに思い知らせてやる。おれたちはヒロシマも行っているし、コクラもナガサキも行っている。ニイガタも行っている。トウキョウもだ。ただ極秘なだけだ。おれたちが何をしようとしていたか、目に物を見せてやる。そのときはおまえらがパンツを下げさせられる番だ。クソツタレめ。

それにしても、パーソンズが見せてくれたあの映画はフィルムすごかったな。あれがおれたちの落とす「スペシャル」なのか。すさまじいもんだな。闇の中から強烈な光が立ち上がり、砂漠の地平からとんでもなくでかい火の玉が見る見る大きくなって、キノコ型の雲がすごい勢いで上昇していった。おれたちはスクリーンに釘付けになった。背筋にぞっとするものが走って、おれはそのシーンに凍りついたな。パーソンズは言った。

「ニューメキシコ州アラモゴードで発せられた閃光が、四〇〇キロ離れたテキサス州エルパソでも見えた。轟音は一五〇キロ離れた地点でも聞こえた」とな。すげえもんだ。

おれがこの「スペシャル」で日本軍の息の根を止めてやる。あいつらは、トルーマン大統領の最後通告を真剣に受け止めなかった。「降伏しなければ、迅速かつ完全な破壊にさらされるであろう」という警告を無視しやがった。それがほんとかどうか、思い知らせてやる。このおれの手で、この「スペシャル」を日本に叩き落としてやるんだ。サイパンで死んだ仲間、硫黄島で死んだ仲間、沖繩で死んだ仲間、そして「カミカゼ」の気狂い攻撃で死んだ仲間の仇を取ってやる。見てろよ。戦争は怒りだ。怒りの量がより多く届いたほうが勝ちなんだ。

おれはしかし落ち着かないな。どうしてこんなに落ち着かないんだ。こんなのは初めてだな。

武者震いともちがうぞ。ウイスキーをかつくらつても、ちつとも酔わない。チキシヨウ。かえって頭がやたらに冴えてきやがる。怖いのか……ふん、そんなことはない……

テイベツツはあの映画フィルムのあとおれたちに言ったな。

「この作戦に参加したくない者はこの場を去っていい。だれも何も咎めない」

しかしだれも去るやつはいなかった。今さら去るなんて、そんな馬鹿なやつはいるはずがなかった。どうせ去ったところでアラスカ送りだろう。しかし残っても、だれもあの「スペシャル」を見せつけられて、自分だけが安全だなんて思うやつはいなかったはずだ。パーソンスも念を押してきた。「だれもこの爆弾がどういふ結果をもたらすか、確信を持てる者はいないのだ」と。それでも去らなかつた。それがおれたちの絆だ。

おれはあのあと、機体の爆弾倉にこっそり入って、「スペシャル」を見た。長細い、奇妙な形のそれだ。大きいが、とほうもないものという大きさじゃない。黒光りする金属の表面がいやに重く感じられるだけだった。おれはその表面にマジックで書いてやった。「くたばれ、ジャップども」とな。大満足して、裏へ回って見たら、なんと別な言葉がもうそこに書かれていた。「ヒロヒトへ 愛をこめて」とな。おれはうれしくなって、爆弾倉から戻ってきたな。ぐっすり眠れた。

おれはしかし、何かにすがりたい気持ちを抑えられない。この不安は何だろう。なにかとんでもないことがおれたちを待っている。おれは結局やつにすぎた。最後のブリーフィングのときまでに、従軍牧師チャプレンのダウニーのところへ行つて、柄にもなく祈りを捧げた。一方じゃ子供みたいな自分に腹を立てながら、「死んだら天国に行きたいんです。行けますか？」と告解した。

おれたちが任務をちゃんと果たせますように。また我々が安全で、戦争を終わらせることの助けになりますように……くそつたれ、まあ、ちよつとはやり過ぎたつたことだ。

おれは立ち上がって、零時に最後のブリーフィングが行われるカマボコ宿舎へ急いだ。

ファイビー

爆撃はうまくいくさ。いままでこんなに訓練してきたんだし、おれの爆撃手としての腕は天下一品だ。おれ以外にあのヒロシマのTの字の橋のターゲットに九〇〇〇メートルの上空からドンピシャ決められるようなやつはいないよ。おれは絶対に決めてやる。集中力、集中力、集中力——最後のその瞬間にすべての神経を集中させてど真ん中に命中させてやる。

おれだつて、この爆撃がこの大戦中、いちばん重要な爆撃だつてことくらいよくわかっている。みんな何も手につかない状態だつてこともわかっている。だからみんないちばん好きなことしかできなくなっているんだ。習慣になつていることしかできないのさ。

零時の最終ブリーフィングまであと三〇分。おれは必ず勝つよ。おい、ほら、ワンペアぐらいで勝負に出るな。だからおまえのポーカーはチキンなんだよ。ルイスと同じでおれのカモなんだ。いただきだ。見ろよ、フラッシュだ。ポーカーのコツはついているときに、ここぞというときに叩き込むことだ。爆弾を落とすのと同じだ。

おれは子供のころ、野球に憧れていた。レッド・ソックスに入って、大観衆の前でヤンキースの四番バッターを三振させることがおれの夢だった。速球でど真ん中に投げ込んで空振りさせる。スタンドが割れるような拍手と歓声で包まれる。……しかし、挫折したな……おれにはその力がなかった……。それからおれは軍隊に入って爆撃手になったんだ。ど真ん中に投げ込むこと、爆弾を命中させることは同じ快感だ。おれはだから徹底して、アメリカ一の、世界一の爆撃手になることをめざしてきた。ティベツとドイツのハンブルクをいっしょに爆撃したのが、あいつとの縁だったな。おれはあいつを最高のパイロットだと認めたし、あいつはおれを最高の爆撃手だと認めてくれたんだ。気も合った。合わないのは、あいつはポーカーをやらないし、女もやらないことだ。二人でじっくり話すことだけがじっくり来たんだ。

あいつはおれが髭をはやすのが女にもてるためだと思ってるらしいが、そうじゃない。おれはあいつに言っていないが、この髭を撫でていると、その感触が投下ボタンの微妙な感覚を調整しやすい気分になるからだ。投下はデリケートなんだ。髭の毛先の微妙さが、おれのボタンへのタッチを調整してくれる。生き物の毛のタッチだ。それに、これに触っていると、なんだか落ちて着くんだ。もちろんその瞬間にはドーンとだけどな。ふん、結果として、おれは女にもてることになるわけだ。おれは女にはやさしいよ。ソフトでデリケートに、爆弾のボタンと同じように触ってやるんだ。包んでやるんだよ。そして決めるときにはど真ん中におれのすべてをぶちこんでやるんだ。あの真ん中に、あの塙塙に、思い切り抱きしめて、昇天させてやるんだ。おれは、飛行機に乗るようになってから、死ぬことがいつも隣り合わせになっていた。そのスリルが、おれにやさしさと激しさを持たせるんだ。女はいつもどこかで、そのスリルを求めている。それが女を燃え上がらせるんだ。女がおれに抱きついてくる。おれはやさしくして、爆弾のようにデリケートに扱ってやって、そしてここというときに叩き込んでやるんだ。

おれはいつも出撃のとき、コンドームとパンティを持っていく。今度も持っていく。それを持っていくと帰って来れそうな気がするんだ。そしていつも帰って来れた。絹のパンティが最高だ。

おれは最後の夜に軍病院の看護婦に言った。「ハニイ、それをくれよ。B 29の操縦室グリーンハウスに持って行って、お守りにするんだ」看護婦はびっくりして、「最後までみたいなことを言わないでよ」と抱きついてきた。あれを言うと、また燃え上がるんだ。

おれは牧師になんか告白しないぞ。そんなことを言っただけになるんだ。おれはそんなもの信じちゃいない。現実はあるようにしかならない。いくらあがこうが、いくら避けようが、死ぬときは死ぬんだ。日本軍に捕まるときは捕まる。そのときになって神を呪ったってしかたがない。おれはピストルの方を選ぶよ。告解なんかしているよりポーカーをしていたほうがまだましだ。いつものように持物のいっさいを部隊に預けた。それでおれが死ぬば、それが家の親父やおふくろたちに届けられるだけだ。看護婦も少しはなんとかしてくれるだろう。おれが付き合った彼女たちのところに届かないのは残念だが、まあ、それもしかたがない。おれの金を、おれが作った私たちのリストに沿ってみんな分けてくれるように手帳に書いておいたから、だれかがなんとかしてくれるだろう。ありがとう、おれの女たち。

もしおれが死ぬとしたら、おれが残すものなんて何の意味もなくなる。それならここですべての金をポーカーに賭けちまったらいいとも思う。きれいさっぱり、なくなってしまうえばそれでいい。しかしもしかすると、いや、テイベツツという男との長い付き合いからすれば、あいつは確かだから、帰って来そうな気がする。人間には星というものがありそうだ。成功するヤツはいつも成功する。負けるやつはいつも結局負けるんだ。おれはあいつが勝つほうに賭けよう。

おい、みんな。どうしてこんなにおれに勝たせるんだ。どうしてそんなにしけたツラをしてやるんだ。盛り上がらん。おれたちが死ぬとも思っているのか。おれたちより、飛行機に乗らないおまえたちが緊張しててどうするんだ。そんなしけたツラでおれを見送ろうってのか。通夜みたいなツラすんな。しょうがねえな、景気をつけなきゃいけない。

おい、みんな。服泥棒には気をつけるよ。おれたちのジャックが、南の海岸で看護婦とデートしたんだ。甘くしっぽりやって、そのまま全裸で海に入って泳いでたんだ。そしたらそれを見ていたやつがいて、こっそりやつらの服を失敬しちゃった。そのまま車に乗ってトンズラしたのさ。二人は海から上がってびっくりだ。服がない。どこにもない。盗まれた。しかたがない。そのままニマイルを基地まで素っ裸で歩いたのさ。それでおれの部屋を深夜トントンと叩いた。イチモツをブラブラさせながら。「どうしたんだ、その格好は？」そしたら来たもんだ。「二人で天国へ行き損ねたんだ」とよ。

そうだ、そうやって笑ってくれ。笑って、陽気におれを送り出してくれ。その笑いと、そして女たちが、おれを助けてくれるさ。命中。やったわね、ファイビー。そしておれにキスしてくれる。キスの雨だ。

おれは必ずT字型のあの橋に命中させるぞ。あんな格好の目標はまたとない。必ず。

よし、もう一ゲームだ。それが最後だ。でかく賭けるよ。それをやったら行くぞ。さあ、最後の札を配ってくれ。

パーソンズ  
離陸はだいじょうぶだろうか。それがずっと私の頭を占めている。「スペシャル」を搭載したまま離陸に失敗した場合、テニアン島ごと吹っ飛んでしまう。その怖れを払拭できない。ひよっとしたらサイパンのB 29基地まで壊滅してしまう可能性もある。火薬ガン方式で濃縮ウランを急激に合体させ、一気に臨界量に達させて核爆発を起こさせる仕組みである以上、飛行機事故の爆発が火薬の代用をして、ウランが合体してしまうこともありうるからだ。その場合には、日本の一都市が壊滅するのではなく、我々のB 29基地が壊滅してしまうことにもなりかねない。

私もこの基地でB 29が離陸を失敗した例を何度も見てきている。万一の場合、この基地を救うためにも、「スペシャル」を離陸後の機内で最終組み立てをすることをファレル將軍に提案した。將軍はあの狭い爆弾倉の中で、組み立てが困難になることをグローブスと同様に指摘してきたが、もし事故があった場合、ここにすでに運び込まれている二号原爆も無駄になるということだ。だから、多少困難ではあるが、十分可能なので、あらかじめ起爆装置を取り外した状態で機に積み込み、離陸したあと、その起爆装置を取り付けることにした。不慮の事故の爆発を避けるためには、結局それしかないだろう。グローブスは反対しているが、私があえてここでそれをや

ろう。グローブス代理のファレル將軍も納得してくれていることだ。グローブスには最後の瞬間まで黙っていたら、わかりはしない。

機内組み立てを成功させるためには、とにかくできるうちにしっかり準備しておくことだ。すべての道具と、すべての部品を絶対に忘れないように、万全に整えておくことはもちろん、何度も実行して馴れておくことだ。よし、もう一度、チェックし、試しておこう。

それにしても、これでまったく新しい戦争の時代が始まるわけだ。オッペンハイマーからの最後の文書にはこうあった。

「原爆は目標都市の一八五〇フィート（五六四メートル）の高さで爆発する」

「火球の輝きはアラモゴードの実験よりも長く持続するだろう。アラモゴードは悪天候だった。今度の投下は好天下で行われる。だからこの爆弾から出る可視光線はもっと強くなる。むろん致命的な光線、熱線、放射線が地表に達するだろう」

どんな爆発になるのだろう。アラモゴードの爆発よりもっと大きくなるということか。鉄塔が蒸発してしまったあの爆発よりもっとか……とにかく、いまはうまく離陸を祈ることだ。そしてそのあと、私がうまく起爆装置をセットすることだ。

しかしこれから、むしろこの爆弾の成功によって、とんでもないものが始まる気がする。この予感は何だろう。何かが一変してしまう。歴史が？ 私はその片棒を担ぐことになる。機内の中では、私がロスアラモスの科学者たちを一人で代弁することになるのか……科学者たちが私を見ている。たかさんのロスアラモスからの視線と期待がこの私に集中している。期待と懐疑と、そして非難とだ……

私には科学者たちの声が気になる。彼らの懸念が頭にひっかかる。それを無視してのこの投下が……しかしとにかく今は前へ進むしかない。私の仕事は目の前にある。それを全力で実行するしかない。私が失敗したら、乗組員全員の命はもとより、作戦全体が烏有に帰す。

もし私が、私たちが死ぬことになったら……妻への遺書も書いてきた。子供たちへのメッセージも残した。子供たちを残すのは不憫だが、職務に忠実だった父親だったことを信じてほしい。大学へ行けるだけの金は残してきた。父や母にもそれは頼みである。そのときは運命を受け入れてほしい。死の前に、海軍大佐などの肩書きは無価値だ。マンハッタン計画の実行者の一人であることも、大統領に面会して意見を求められたことも、すべて無意味になる。

もし敵の領空下で不時着のようなことになったら、敵はいちばん先に私を責めるだろう。「スペンシャル」の全体に対しては私が最も知っているからだ。私への拷問がいちばん苛烈になる。耐える自信はない。日本軍の拷問は、人間の限界を超えていると私の耳にも入っている。私は青酸カプセルを呑むか、ピストルで自分を打ち抜くかだが、ピストルを選びたい。そのほうが海軍軍人らしいからだ。

ロスアラモスのとんでもなく巨大な研究所も、オークリッジ・クリントン馬鹿でかいウラン濃縮工場も、そしてハンフォードのプルトニウム生産工場も、アラモゴード・トリニティの広大な爆発実験場も、いまみんなこの投下に向けてぐるぐる回り始めている気がする。あの巨大さ、あの組織のとほうもなさが、みなこの飛行へ向けて乗ってくる。爆発。超巨大な爆発。それが初

めて生身の人間の頭上に降り注ぐ。

歴史が動き出す。この私の手で、新たな時代の歴史が動きだす。このダイナミックな感覚は何だろう。私のこの手で、爆発が準備される。爆発は私のこの手の中にある。身が張り裂けそうさ。

このダイナミックな時間の開始を、私はいま待っている。時間のほうが私にぶつかってくる。今、〇時五分前。二時四五分の離陸予定まであと二時間五〇分だ。最終ブリーフィングへ向かう。そのあと、もう一度、一時間くらいの間に「スペシヤル」をチェックしてみよう。

ビーザー

「口がすべると人が死ぬ」か。いい標語だぜ。おれたちの宿舍やミーティングルームにはこればかりだ。うんざりだぜ。いいかげん、もう解放されたいもんだ。

FBIのやつらは、トイレが好きだ。幹部にだけかトイレが好きなのやつかいがあるんじゃないのか。ウエンドーバーでも、海上飛行訓練のときのキューバのバチスタでも、やつらはどこでも付いてきた。酒場でも、客の振りをしたのがいつだって地獄耳を立てていたし、時にはさりげなくやつらのほうからカマをかけてきた。口が滑った野郎は、翌日荷物を畳んでアラスカ行きだ。戦争が終わるまで、氷と吹雪の中で頭を冷やしているだとき。始めのころはすごかったな。あれは家族を呼んだときだったかな。トイレの外まで付いて来て、おれが小便や大便をするのを待っていやがるんだ。「FBIのなんだ。尾行や見張りをするのはいいが、トイレまでついてくるのは勘弁してほしいな。クソも出ないぜ」したらぬかしやがった。「おカマいなく。この外で控えさせていただきます。任務ですから。トイレは情報の受け渡しにいちばんクサイところなんですよ。ほんとは、私は個室の中まで付いていけと言われてるんですよ」あのうるさい監視のおかげで、デリケートなバンカーは一時便秘になってたっけな。機密、機密、機密だ。FBIがいなきやMP<sup>軍兵</sup>だ。機密がおれたちをがんじがらめにし、おれたちのストレスを大きくしていた。

一方じゃそんなに厳しくやっているくせに、どうして今になっておれにまた、ニューヨーク・タイムズの記者にいろいろ説明させるんだ。グロブズの暗号おやじが広報を指令してきたらしいが、矛盾してるぜ。まあ、おれも喋るのはきらいじゃないから、いいけどよ。それに話していると気が紛れる。日本へ初めていよいよ爆撃に行くとしても重い重圧から、一時的にしる逃れられるのはまあ、いい。ローレンスというこの記者は有能だよ。さすがに専門的なことも技術的なこともすぐ理解したしリーダーの周波数のこともあっさり理解した。うまくピューリッツア賞なんかをとってほしいもんだ。そしたらおれにも少しは礼を言っしてほしいな。

ヒロシマ上空でも、ナガサキでも、コクラでも、そしてニイガタでも、トウキョウでもおれたちのB29のリーダーから出す電波の周波数は日本側では使われてはいない。だいたいようぶだ。何度も偵察機に調べさせたし、確認もした。妨害も、混乱もない。だから、爆弾は機械に故障がない限り、予定通りの電波周波数で作動する。おれのリーダーの誘導電波で高度を確認しながら爆発するわけだ。高度五六四メートルの位置での爆発は、おれの仕事だ。まかせておけ。

ローレンス、もうあらかた話した。もういいだろう。時間だ。最後のブリーフィングに行かな

きやならない。

あれ？ エド。どうしてこんなところに待っているんだ。なんだよ、このライスペーパーは。この数字……これが最終の電波周波数か。わかった。OK。これでやる。予定の範囲の中だから、だいじょうぶだ。この紙はなんでこんなに薄くて上質なんだ？ すぐ呑みこめる？ 敵に捕まったときのため？ おれもまだ二四歳だ。まだ長生きしたいよ。これからが青春だ。捕まらなかったね。しかし、捕虜になったときは、だいじょうぶだ。

まかせておけ。呑みこんでから死ぬよ。

ドウゼンバリ

こいつのエンジンはたまらない。この世で最も美しい女の心臓の音のようだ。こいつのエンジン音を聞いていると、体中に血が滾ってくる。勃起してくるほどだ。ボーイングのやつら、よくこんな飛行機を作ってくれたよ。こいつは飛行機中の飛行機、爆撃機中の爆撃機、最高だよ。おれの女房の体もいいが、こいつの体はもっといい。この全身に、リベットの一つ一つにキスしていくらいい。こいつがエンジンを駆動してプロペラを最高に持つていくところなんぞ、女の心臓の音そのものだ。血が熱く脈流して、全身を駆け巡る。おれの体まで熱くなる。ホットな音楽がおれの体にも流れ出すんだ。おれほどB 29の体を愛しているやつはいないだろう。これはおれの機だし、おれの体だ。そして、恋人のたまらないボディなんだ。

いつもの飛行前、おれは二時間点検して、こいつを愛撫してやる。熱く燃えろよ。ホットに血を駆け巡らせるよ。空への力を思い切り発動して舞い上がれよ——おれはそう言いながら一つ一つ、それこそリベットの一本一本に手を触れながら確かめていく。それに今日は特別だ。おれたちの最大の仕事の日だからな。おれたちはこの日のために訓練につぐ訓練を重ねてきたんだ。おまえのエンジンが絶好調で持続してほしい日だ。頼むぞ。いつもの力を最高に発揮して、おれたちみんなを日本へ行かせてくれ。おまえみたいなナイスな女はいないよ。いちばんナイスな飛行にしてくれ。だからおれは、今回は特別、倍の時間をかけておまえを愛撫してやるんだ。頼むぞ。

照合表はもうみんな一度はチェックしたが、もう一度やってやるからな。よし、機関関係の計器マイケはだいじょうぶだ。ルイスのところも、テイベッツのところもみんなやってやる。

制御装置も、スイッチも、ダイヤルもOKだ。バンカーもネルソンの持ち場も計器は異常ない。「スぺシャル」の管制盤……これがジエブソンの担当する計器盤か。きれいだな。こんなものは見たことがない。これがうまく機能すれば、OKというわけか。おれは軍隊に入る前、森林に入っている樹木を見てまわって選んだり、枝を落としたりするのが仕事だったが、どんな樹木にも、静けさの中で息づいている「気配」があったな。きれいなきらめきを発している感じだった。この計器にも、「スぺシャル」と繋がっている配電盤にも、なにかそれに似た息づきがある。どこか不気味な、そしてとほうもない力を蔵した……

爆弾倉——そうだ、そっちにも行って念のためチェックしよう。

だれかが呼んでるな……零時の最後のブリーフィングの時間か。いったん外へ出て、あとまた

戻ってきて、チェックを続けよう。  
バンカー

最後のおれの荷物を全部預けてきた。いつもの出撃前の手続きだが、今回は意味がちがう気がする。女房へも子供へも、父や母へもこれでOKだ。体中の吹き出物も、いまはあとかたもなく、消えちまった。不思議なことだ。おれはくよくよし過ぎたんだろうか。

この機の呼び出し暗号は「えくぼ<sup>ディンブルス</sup>」だ。かわいらしい名前だ。気に入った。この名前での限り、吹き出物がまたぶり返すことはないな。もうだいたいじようぶだ。吐き気を覚えることもないだろう。おれは「スペシャル」をヒロシマまで落とすしに行ける。

おれが気になったのは、この乗組員<sup>クルー</sup>がただの一度も実際に組んで飛行していないということだ。初めての飛行だ。ぶっつけ本番でいじようぶだろうか。特にパーソンズやジェプソンの海軍や陸軍からの飛行機乗りでない人間が乗って、初めての爆弾を落とすということだ。ティベツの自信は伝わってくるが、爆撃はチームワークが大切だ。生死をともにする人間の呼吸の合うことが大事だ。それがまったくわからない状態で、日本までとんでもない爆弾を落とすしに行くことが、おれには理解できなかった。それで腹の調子もおかしくなったし、急に体中吹き出物が出てきちゃった。ファイビーに「おまえは病院の一番の美人看護婦とここでいつまでも仲良くしていたのか」とからかわれたり、軍医に最後に言い含められたな。「ほんとに爆撃に行きたいんですか。それとも残りたいんですか」と。「もちろん、行きたいですよ」と言ったら、不思議なことにスーッと治っちまった。あれは何だったんだらう。吐き気はもうごめんだ。

しかし、おれがこのB 29をヒロシマの真上にまで案内するってことは、もうずっと前から運命だった気がするな。ヒロシマまで二四〇〇キロ。北北東への飛行は、おれがバッチリ決めてやる。いま、テナンのこのきれいな星空が、そのままヒロシマへの道を開いている。天候も、現在ヒロシマ上空は晴れているそう。硫黄島までの天気もいい。微風があるだけでほとんど快晴だそう。星の位置からだけでも、ヒロシマに到達できるくらいだ。

硫黄島で、マークワードの91号機と、スウィーニーのグレートアーチストと落ち合う。その落ち合う地点をしっかり把握しておかなくてはならない。イーザリーの機はそれより先に離陸して投下都市の天気を報告する。マークワードの機は写真撮影だったな。スウィーニーの機は観測装置だ。

ヒロシマの航空写真をおれも見したが、あの五本の指が開いた、手のような形をした都市が、この星空の行く手におれたちを待っている。何のために？ この「スペシャル」を落とされるために。いまはみんな眠っているだろう。だれもとほしもないことに気がつかない。戦争の果ては、いったい何だろう。これがほんとうに戦争を終わらせるのだろうか。この興奮と息苦しきは今にもまたおれの体にできものを吹き出しそう。

この星空の中におれたちはもうすぐ、あと二時間五〇分後には舞い上がっている。そしたら、いよいよおれの仕事だ。行くぞ。

テイベッツ

零時だ——これが最後のブリーフィングだ。いまはもうあまり言うことはない。我々が今まで猛訓練を積んできたのはこのためだ。きのう映画フィルムで見たとおり、いま我々が落とそうとしている爆弾は、これまでのものとまったくちがうものだということをお頭に叩き込んでおけ。

第一目標はヒロシマ、第二目標はコクラ、第三目標はナガサキだ。イーザリーのストレート・フラッシュ機はヒロシマへ。ウィルソンのジャビット三世はコクラへ。テイラーのフル・ハウスはナガサキだ。一時間前に離陸し、それぞれの都市の天候を報告せよ。

爆弾の爆発の際は保護眼鏡ゴーグルをかけることを忘れるな。爆発の閃光は強烈だ。目を傷める。失明の危険もある。きのう渡したものを投下前にかけることを忘れるな。もう一度言っておくぞ。

機上整備員は七四〇〇ガロンの燃料を各機が積んでいるか最後にもう一度点検しろ。ただし、攻撃機の ENOLA GAY だけは離陸を容易にするために、それより四〇〇ガロン少なくていい。

もう一度確認する。コールサインは「ディンプルズ」を使え。「ディンプルズ82」が新しいコールサインだ。

我々はこの日のために訓練を重ねてきた。自分の任務を果たせ。命令を守れ。手を抜くな。自分のベストをつくせ。決して運に任せるようなことはするな

秒針を合わせる。三〇秒……、二〇秒……、一五秒、一〇、九、八、七、六、五、四、三、二、一、よし。

ダウニー

全能の神よ。飛行命令を実行する彼らをお守りくださいますように。あなたのお力に助けられて、戦争を早く終らせることができますように。戦争の終りが早く来ますように。再び地に平和が訪れますように。あなたの御加護によって、この兵士たちが無事にここへ戻ってきますように。わたしたちは偉大なあなたを信じ、祈ります。イエス・キリストの下に。アーメン。

## 東京 2 スクラップタワー

用務員倉庫に並んでいた道具に、僕は眼を凝らした。鉄パイプ、バット、ノコギリ、それから斧、大鉈なたが並んでいた。スコップもあったし、ツルハシもあった。奥の方を見ると、チェンソーウもあつた。手前に一輪車が立て掛けられていた。スチールの机の上には黒や赤や青、緑のマジックインキが置いてある。床には黒い寝袋も巻かれたままあつた。壁のフックにはタオルや軍手がかかっていた。

僕はいろいろ試してみようと思つて、鉄パイプ、ノコギリ、ハンマー、斧、大鉈を持ち出した。鉄パイプはもうマネキン倉庫にあつたが、この鉄パイプのほうが握りの所に皮が巻いてあつて、

扱いやすそうだった。ノコギリはひよつとしたら使わないかもしれないが、とりあえず持っていた。大鉈はいちばん重く、柄も握りやすくて、これはかなり効率が上がりそうだった。刃渡りが四〇センチあって、首を飛ばすのにはもってこいだ。倉庫には、スポーツシューズが置いてあり、それは履いてみると僕の足にぴったりだったので、それに履き換えた。少し古くカビくさかったが、大きな作業になり、しかも埃や破片で汚れそうだったので、僕はそのスポーツシューズの機動性を考えて、それに履き換えた。大鉈の柄は、もうだれかが相当使い込んでおらしく、皮の巻かれた柄の部分に汗が固まったゴワゴワした感触があった。生臭い、それでいて乾燥した、いやなにおいがした。フックに掛けられていた軍手の一つは汚れていたが、一つはまだ新しかった。両方を僕は外して、一つの古いほうを手にはめ、もう一つを一輪車の上に置いた。僕はよろけながら一輪車を押して、用務員倉庫を出た。

再び倉庫の扉を開けると、マネキンの裸体が僕を包み込んできた。それは、一つ一つの人間の形をした身近なものでありながら、いまは殺すものと殺されるもの、破壊するものと破壊されるものとして、敵対者の緊張を四肢の森に漲らせていた。そこは埃の溜まった動かない空間でありながら、むしろ殺伐とした意志を媒介にして、ある活気を帯び始めている。僕は壊す者として昂ぶり始めているし、マネキンたちは壊されるものとして緊張を高めている。僕は一輪車をそこに置き、道具類を取り出して、壁に立てかけた。スポーツシューズが足に馴染み始めている。軽快なフットワークは、作業の能率を高めるだろう。軍手も素手のときよりも何倍も手の動きをしつかり道具につたえてくれそうだった。僕は軍手の右手にまず鉄パイプを持ち、マネキンたちに再び対峙した。

僕は足元に転がっていた女のマネキンのつるつる頭を蹴った。それは鉄パイプで打ち落とすときと同じように、くるくると回りながら、他のマネキンの足元へ転がって行って、衝突して止まった。サッカーのボールを連想した。

《ひでえことを》

《まさか》

《じょうだんでしよう》

頭がぶつかった音が広い室内に響きを残している。それがマネキンたちの腕や足や手の指の無数の交錯のなかで奇妙に屈折して増幅し、ある声を生み出してくる。その声はコンクリートに囲まれた静寂の中で、冷たい石肌を通して僕の内部に直接響いてくる。それは最初のうちは無機質で、テープレコーダーの機械音のようだったが、しだいに肉質を帯び、個性を持って生々しく聞こえてくるのだった。

僕の前に女の、首と腕をもがれた胴体が立っている。僕は首のもげた跡へ向かって、大鉈を振り上げ、全身の力を込めて打ち下ろした。ガシャツという乾いた鈍い音とともに、それは床に崩れ落ちた。もろいものだ。首の左から左肩、左腕にかけて、胴体が裂け落ちた。同時に脚の支えを失い、全体が床の上に転がった。胴体は、あまり破損していないが、その乳房が、上半分をもがれて、素材の中身を露出している。脚はまだ胴体に付いている。かなり小さくはなったが、このままでは一輪車では運べないな、と僕は思った。この胴体をさらに二つに切るか、あるいは割

るか、そして脚はどうするのか、切り離すのか……少なくとも、脚だけでもバラバラにしたほうが運びやすそうだった。僕はノコギリを考えたが、ギコギコ続けるのは、膨大に時間がかかりそうだった。だから、斧を持ち、脚や腕を根元から切断することにした。

木を切るように、コツコツと最初脚の根元にアタリを入れ、溝が深まって入れやすくなったところを思い切り斧を振り込む。ゴツという手ごたえとともに、それは根元から切断される。僕はこのマネキンのもろさが、とても気に入った。気味悪いくらいもろい。この作業にとって、それは何よりも救いだっただけだ。

僕は試しにノコギリを胴体に入れてみたが、すぐ切れることは切れ、とても切りやすいものの、やはり斧や鉋に比べて単純さに欠けた。ただ、胴体を切断する不思議な快感は、僕にひどく生々しさを帯びて迫ってきた。それは中が空洞であるにもかかわらず、何か詰まっただけで、輪切りの手応えがある。大きなハムを切るような錯覚をもたらすのだった。CTスキャンの輪切りの図が、手に広がってきた。

この女の裸体の、細い腰部は、立っていたときはひどくセクシーな曲線を描いていたが、切断されて横たわるとき、乾燥した感覚が濃密になる。臍もないせいとか、性的な感じはなくなり、残骸の虚しさが被ってくる。腹部と腰部の極端な太さの違いは、廃物になったとき、不毛感が支配する。僕はそれを、血を流し、子供を産むはずの子宮の位置を想像しながら、力を込めてハンマーで打ち砕いた。

一体目はほぼ完了した。頭と、腕二本と、脚二本、そして胴体が三つだった。最近テレビで見た、バラバラ事件の死体を僕は思い出した。この一輪車では一体しか運べない。何かうまい方法を考えなければならなかったが、とりあえず、ほうっておいて、どんどん次の解体作業を進めることのほうが先決だった。運搬そのものは、ある程度残骸がたまるところで考えるほうがいい。何かうまい運搬方法が見つかりそうだったし、最悪、運搬業者がもしかするとこの作業の後来者かもしれないので、その人たちに任せればいいのかもしかなかった。

女のマネキンのすぐ後ろに、今度はハンサムなサラリーマン風の美男子が立ちはだかっていた。鼻が高い。髪は薄いブラウンで、瞳が灰色だった。唇に微笑を浮かべている。その目はどこか右の方を見ている。やはり裸だが、もし背広を着ていたら、ものすごく格好がよく、高級な仕立てのスーツが似合いそうな形だった。たくさんの背広を着、たくさんのスーツを客に売ってきた、そんな感じのマネキンだった。オフィス街を代表するはずの、サラリーマンの美しい男の顔が浮かんでいる。裸体は、のっぺりしていて、スマートではあるが、筋肉が感じられない。何よりも性器がない。そこはつるりとしていて、もちろん性毛もない。男の顔だが、男ではない。その必要のない体なのだ。

僕はその首に上から斜めに大鉋を振り下ろした。

ゴロンとその首が転がり落ちて、それは一度床に弾んでから、僕の足の上に乗ってきた。

《やった》

《やりやがったな》

ズックの上からなので痛くない。僕はそのままそれをサッカーボールのように蹴って向こうへ

放り上げたかったほどだ。それはしかし、鉦の刃先が縦に入ったため、耳を掠め、耳の半分を切り取ってしまった。下から顔が僕の足元を見ていた。きれいな死んだ目だ。

《なんてひどい》

《気狂いだわ》

そのあと、不意に静かになり、重い沈黙が四肢の森を圧した。それぞれの奇妙な声は、コンクリート壁に跳ね返って響き合い、増幅され、森全体がさざめくような和合音となって、押し寄せってくる。その声はしだいに大きくなり、しかも僕の内部深くに届いて、僕のある部分と共鳴し合うのだ。そしてそのあとの沈黙も、同じ質量の重い沈黙となって僕の心の空白を満たしてくる。このビル全体の質量と対応する沈黙だ。それは僕の内部をねじり上げてくる。

耳の半分はどこへ行ったのだろう。僕が目凝らすと、それは前のつるつる頭の女のマネキンの首のところへ飛んでいって、あたかも二つの耳があるような位置に転がっていた。人間の形として統一されている全体を、バラバラにする。部分に解体する。それが僕の行為であり、僕の仕事なのだ。耳は偶然だったが、耳を切り取り、脚をバラバラにし、腕をもぎ取る。首を切り離し、胴体を切断する。そのうち腕が二〇〇本になり、首が一〇〇個になり、やがて胴体は二〇〇個前後になっていくだろう。人間の形はその数だけなくなり、僕に話しかける声もそれだけ少なくなっていくはずだった。統一されていない部分は、本質的なものを失う。部分は物であり、切り離された部分は全体とはまったく異なった異物にすぎない。壊すということはそれを実現することだ。殺す行為も共通したところがあるはずだった。

僕は胴体をそのまま大鉦で割った。それは真つ二つに割れずに、大きな楔型に切れ込みを残して途中で止まった。もう一度、そこへ横に振り入れると、今度は胴体だけ、完全に床に落ちた。

《中が飛び散ったわ》

《殺人鬼》

《無抵抗の者を殺すなんて》

僕はまた、脚を払い、斧でそれぞれ二つに折り割った。頭と胴体二つ、腕二本、脚二本、そして今回は耳一つだ。サラリーマンハンサムボーイを完了した。

三つ目はかなり埃が溜まっていたが、母親と子供のマネキンだった。それは小学校へ入学の揃いの衣服でも着ていたのだろうか、母親が手を引き、それに子供が母親に手を伸ばしてすがらうとしながら歩いていく姿だった。すでに衣服は剥がされて全裸だったが、母親のやさしい眼差しが子供に降り注いでいる。子供の無邪気な丸い顔が母親を見上げている。もうバラバラに収められているはずなのに、少しのずれだけを残してそのまま母と子の理想の姿を現しているその二つのマネキンを僕はどうやって切断するか少し考えた。母親は前の二体とほぼ同じでいいとして、子供は全体が小さいからもつと少ない処理でよさそうだった。肩から逆の脇腹へ袈裟に切り通してしまえば、それだけでいいかもしれない。それで右腕と左腕も切り離されることになる。あとはどちらか一本の脚を切り離せば完了だ。子供は二回の切断で、三つの部分に分ければいい。

僕はまず母親から大鉦を振り上げた。

《やめて。ひとでなし》

《人間じゃない》

思い切り振り下ろすと、母親の首がカッスンという高い音とともに、宙に飛んだ。手応えは十分で、切り通した感覚が僕の手に残った。僕は切断の要領を掴みつつあった。繰り返していくうちに、だんだんうまくなるだろう。時間も速くなっていく。消化する数も大きくなっていく。報奨金も、ひよつとしたら……不可能かもしれないが、とにかくアタックしてみよう。それで僕の生活もずいぶん潤うことになる。

母親の黒髪のカツラがいつしよに飛んで、それは落ちた衝撃でずれて顔に半分かかった。鼻から落ちたので、鼻の先が少し欠けた。やさしい顔は依然として微笑みを浮かべている。僕は昔母親からこんなやさしい微笑で包まれたことがあるのを思い出した。そうだ。学校でいじめられて帰ってきたとき、エプロンの腰に飛び込んで泣いて泣いた。そのとき見上げたら、母はこんな顔をしていたな……

僕はそれから、母親の腕を二本切り落とした。この母親のマネキンは腕を下にしているので、腕は後からでよかった。腕を上や横に上げているものは、まず腕から、腕を下げているものは、まず首から、それが切り落としやすかった。それから胴体だ。

僕は方法が一つの形を得ていくのに満足しながら、残った子供のマネキンに大鉈を振りかぶった。そのまま勢いをつけて肩から脇腹へ一気に振り下ろした。

《やめてよ。ぼくが何をしたというの》

何かが耳に聞こえた気がしたが、それは材質と鉄との衝突音にかき消されていた。あっけなく、それは胴体をハスに裂き、ものの見事に二つに割った。小気味いくらいだった。頭と胸部とがくつついたまま、床に仰向けに転がった。残った胴体もいつしよに床に倒れ崩れた。

《いたいけな子供まで》

《鬼だ》

《殺人鬼》

僕は目先を変えて、斧を手に取り、それで横たわった胴体からかわいい脚を切り落とした。

声は最初どこか無機質で、マネキンの体と同じように乾燥して響いていたはずなのに、しだいに生々しさを帯びて、ほんとうの人間の声のように聞こえてくる。それは肉声のこだまとなって反響して、しかもその都度別な人間やマネキンが声を投げてくる気がする。生きた集団の声が膨らんで、立体感を帯びて届いてくるのだった。

そして、僕は解体する一つの行為が、緊張と興奮とを醸してくるのを覚えた。一つをバラバラにすると、何かある興奮が僕の中で大きくなり、それは快感と相俟って、もっと大きな興奮で包んでくる。肉体の運動としても、大きなものにちがいないが、壊すという行為の中に、いちどその味をしめてしまうと、たまたまなく持続拡大していく高揚感が膨らんでくる。破壊する緊張そのもののなかに、もっと大きな昂揚の連鎖が仕組まれているようだ。僕は熱くなり、脳髓が躍動していくのを覚える。殺意が連動し、膨らみ、より大きく渦をなしていく。それはマネキンたちの声を圧して、その声に逆らって行為を押し進めることのなかに、いっそう加速されていくようだ。一つよりは二つ、二つよりは三つ、もっと大きな行為の熱が激しい渦となって空間を巻き込んで

いく。それは抵抗する声と、それを圧殺して行為を実現するその角逐の激しさをもエネルギーに取り込んで、渦をひろげていく。熱い、密度の高い、生きた空間が、殺意として息づいている。戸惑いがちに試しつつ始めたそれは、作業の一工程がある形を持ち始め、軌道に乗ってくる。ともに、拡大の熱を帯びて、回転し始めている。マネキンたちは、大きな群れとして僕と対峙し、そして僕を取り囲むようにしてやはり大きく巡り始めている気がした。声は複数になり、そして不意打ちのようにあちらこちらから投げかけられてくる。それはいきなりとんでもない方向から投げつけられ、石をぶつけられるようだ。凶暴な意志が込められている。非難は僕の体や頭や手足を打つが、僕はひるまない。むしろそれと闘うことによって、僕のパワーは大きくなり、よりいっそう熱い力が残酷さを増してマネキンの群れに向かっていく。僕は自分の中に目覚めていくその力、膨張していく力に快感を覚える。僕は大きな力を持ち始める。この力は何だろう。僕は笑う。僕は腹の底から笑う。

壊すごとに、むしろ生々しくなってくるこの声は何だろう。こいつらの中は空洞で、ぼっかりと空虚な中身しか持っていないはずなのに、その声はみな生活や重々しい苦しみや喜びを帯びて、天や地をめざしている気がする。僕は彼らを侮蔑し、大鈍を片手に嘲りの笑いを浮かべる。フン、マネキンのくせに。からっぽのくせに。

敵視する視線が僕に集まり、それぞれみんな勝手な方向を向いた顔から、見えない眼差しが僕に突き刺さってくる。僕に壊されるためにいるくせに……おまえたちに自己主張なんかないんだよ。おまえたちはただ、僕に壊されるためだけに存在するんだ。

僕は呟きながら、あちこち飛んで転がっている首を一カ所に集めた。首は首、腕は腕、胴体は胴体、そして脚は脚、そうやって集めておくほうがあとの運搬に便利だと思ったからだ。一輪車よりコロ付の会議机で運んだほうがたくさん運べるかもしれない。しかし机の置いてある会議室はどこにあるんだろう。あったとしても、鍵がかかっていて、入れないかもしれない。

並んだ四つの首は、首の切り口から立っているものもあれば、寝ているものもある。目をそれぞれ勝手な方向に向け、まぶたが開いたまま床に接しているものもありながら、なぜか奇妙に息づいている存在感がある。

僕が四体目のマネキンに向かったとき、後ろから声が出た。

《地獄知らずが》

僕の後ろにはマネキンはいないはずだった。ドアの右の壁際に、それらを並べておいたからだ。しかしその声は明らかにその方向から届いてくるものだった。僕は振り返り、その声の主を探した。それは太い、生きている声だったからだ。しかしそちらにはマネキンは何もない。僕は下に向けて床を舐めているようなサラリーマンの頭がそれを発していることに気づいた。そうか。殺されてもまだ首は生きているんだな。むしろ首のほうがより生々しい、切迫した声を出すんだな。遠くまで、鋭く、深く……そして大きく……

おそらく蹴散らしても、蓋をしても、山積みにおいていても、その声を密封することはできず、減消することはできないことを、僕は感じた。むしろもしそれを消すとしたらもっとたくさんマネキンを壊し、それぞれが声を発するその集合によって何を言っているのかわからない音の集

合——ざわめきにしてしまうことしか方法はないようだった。僕はむしろその声と闘うことが、作業の困難さの一つになるかもしれないことを直感した。しかし、腹いせに、蹴ったりぶつたりもつと粉々に壊したりすることは僕の自由だった。そうだ、粉碎してしまうことは有力な方法かもしれない。でもそんな時間はあるだろうか。それに、もし粉々にして声だけが残ったら……それは大きな徒労となるだろう。声はもしかするともつと生々しく残るのかもしれない。そうになったら僕はもつと疲労度が増すだろう。

……六体目は顔に少し皺の寄った男のマネキンで、定年間際で、けっこう会社でも管理職にありそうな落ち着いた雰囲気を感じていた。年を取ると裸体が不似合いになる。だけどこの初老のマネキンは胴体や腕のほうには、やや細さを感じられるだけで、まったくつるつるのむしろ若い体をしていて。僕はひどく憎たらしくなって、曲げて頬に上げようとしているそのえらそうな腕をまず叩き落とした。このマネキンは僕を不採用にしたある会社の人事部の男に似ていた。その落ち着きのある微笑が僕には気に入らなかった。僕は首を落とすのではなく、鉄パイプで頭そのものを勝ち割りたくなった。振り上げたとき

《私には妻も息子もいるんだ》と声が出た。

その瞬間、僕は渾身の力をこめて鉄棒を振り下ろしていた。頭は砕けた。いくつかの部分に飛び散り、目は左右に分かれて別々の方向に破片を作った。ざまあみろ、と僕は言った。人事部長さん、あなたには就職できない者の苦しみなんかわからないんだよ、と僕は言った。後ろから声が僕を刺した。

《ますます残虐になる》

《どこまで落ちるんだ》

《あの人にはかわいい息子さんもいるのに》

そしてそれにこだまするように、また前方からいくつもの声が僕に投げつけられてくるのだ。た。

《人でなしめが》

《殺人鬼》

《殺す機械》

その言葉に、僕はムカツと来た。マネキンのくせに。ただの形のくせに。おまえたちこそ廃棄されてポンコツになったただのモノじゃないか。廃棄物のくせに。性器もないくせに。ホラホラ、ポンコツたちめ、くやしかったら抵抗してみろ。意思なんかなくくせに。

僕はその胴体に斧を振り入れる。ぐっさりとしてそれは腹を裂いて、真っ二つに分断する。僕はそしてそれを粉碎する。僕は自分がだんだんクレージーになっていくのを覚える。

僕は汗ばんできた。タオルがあるな、と僕は思った。あの用務員倉庫にタオルがかかっていたけど、汚い感じがした。使うには抵抗がある。僕にいまあるのはハンカチだけだった。僕はジャンパーを脱ぎ、長シャツの袖で額をぬぐいながら、どこかにタオルを探さなければならぬと思った。

……十二体目のマネキンにとりかかったとき、僕はふとそのマネキンに大鉈を振り上げるのに

ためらいを覚えた。それがだれかに似ている気がしたからだ。そのマネキンは若い女性だが、ファッションの匂いがあまりしない。デパートやブティックの流行に乗った華やかな空間には合わない気がした。そうかと言って、和服売り場や呉服屋のマネキンともちがう。どこか自然で、清楚で、さりげなくて、全体にすがすがしさがある。でも目を少し下に落として、何か考えているような奥深さがある。いったい何に使われていたのかわからないマネキンだった。美術学校のモデルにしては、その裸体にポリウムがない。流れるような優美さはあるがそれもつましくて、乳房や腰の起伏に乏しく、体に陰影がない。むしろ涼しい眼やごくわずかな唇の笑みなど顔の表情のさりげない陰影のほうが、目を引きつける。

他のマネキンの影になって見えにくかったが、僕は胴体に取り外しのできることをにおわず大きな溝があるのに気がついた。ぽっこりと腹全体が外せるようになっていて。僕はそれを両手で外してみた。それは内臓がすべて取り外しできる、医療用のマネキンだった。胃も腸も、肝臓も、膵臓も、腎臓も、みんなそれぞれ順を追って取り外しができるようになっていて。内臓が密集している人体マネキンだった。模型なのに、妙に表情が生々しく、まるで生きている人間をそっくりそのまま写したみたいだった。僕は一つ一つ内臓を外して、床へ置いていった。フン——と僕は笑う。子宮まであった。内臓を取り出して並べることが、そのまま解体することになる。こいつだけはカラッポじゃない。しかし逆に気味悪いな、と僕は思った。そして気がつく、頭部にも後ろから割れ目があって、それは頭の中身も、大脳や小脳などを取り外せるようになっていたのだ。僕は頭を外す気は起こらなかった。それは大鈍の一撃で壊したほうが手っ取り早いと判断した。

僕は背中の方にも何か仕掛けがあるのかと思って背を返してみた。するとそこには仕掛けは何もなく、黒焦げで、一部ケロイドのように融けている跡があった。病院か、医療関係のビルかが火災に遭って、焼けそうになったマネキンを一つの経路でここに運び入れているのかもしれない。

その瞳が僕を見ている。ちょうど僕の視線と合った。僕はそのよくできた解剖用マネキンの首を刈ろうと、大鈍を振り上げた。

《待って》

透き通る声が出た。

そのときあらためて、僕は彼女が、浪人のころ僕に付き合ってくれた初恋の一歳年上の女性に似ていることを覚えた。その女性は若く病気で死んでしまった。内臓が腐っていく進行性の複雑な名の病気だった。四年前の話だ。辛い記憶、身を切られるような痛みが僕を襲った。彼女が死ななきやならないことがわかったとき、僕は一晩中泣き明かした。彼女の手を初めて握ったときのこと、その手のやわらかな感触、ぬくもりが、二度とない熱い思い出として蘇ってきた。初めて抱いた肩、頬の接触……そしてそれらの肉体の手ごたえが、すべて死へ向かって消失していくことの衝撃……天国と地獄を往復した一年が生々しく湧き上がってきた。世界がバラ色にひろがり、そして崩落し、奈落が見えた。宇宙の深さを呪った。最近になってやっと、いっしょに映画を観に行ったり、食事をしたり、公園を散歩したりしたこと二人で生きた一つ一つの思い出が、

新たに輝き始め、僕を勇気づけてくれていた。彼女とこんな形で再会するとは思わなかった。ほんとうに彼女なのだろうか。しかし彼女は確かに僕の胸の中へ直接語りかけてくる。

《私を殺すの?》と彼女は言った。

ああ、バイトなんだ。やらなきゃならないんだ。

《このままじゃ、あなたはすべてを敵にまわすわよ》

意思なんてあるのかい? こいつらに。

《もちろんないわよ。でも、敵意はあるのよ》

敵意? そんなもの信じられないな。あつたつてどうにもできないじゃないか。マネキンなんだから。僕に壊されるためだけにあるモノなんだから。彼女はほんとうに彼女なのだろうか。彼女だけれど変質している気もする。

《ほっといたら、あなたは狂うわよ》

そんなことはないよ。しつかりバイト料をもらっていい思いをしなきゃ。いままで冷や飯を食わされていたんだからさ。どうしてもみんな壊さなきゃならないんだ。たとえ君が僕の初恋の人に似ていたとしても。仕事なんだから。

《そう。いいわよ。でも私はあなたに狂ってほしくない。だからこうしてほしいの。私の頭から私の脳の一部を切り取ってあなたの胸ポケットに入れておくのよ。そうすれば私がいろいろ話してあげられるわ。この世界のことを。私の脳の一部をポケットに入れておいてよ。少しでも役に立つわ。あなたは私が入院するとき、「いつまでも生きていて。この世の限り」って言うてくれたじゃない。私もあなたにそう言いたいよ》

わかった。どうすればいい?

《私の首を切つて、私が言ったようにすればいいのよ》

何か僕はもうすでに狂ってきたのかもしれない。僕はこのマネキンと話すだけじゃなく、抱いたり、愛撫したりしそうな気がしてきた。

自分の意思でマネキンの首を切るとき、僕は自分がしつかりしている気がする。しかし、マネキンの誘いによって行為するとき、僕は何かに巻き込まれていく気がする。

僕は彼女の顔をじっと見て、そして頷いた。彼女を信じよう。僕の行為の目的は、ただバイト代というマネーだけでしかない。しかし僕の行為には、何かもつと別な意味がありそうだ。それを彼女は示してくれるかもしれない。たとえそれが、救いのない道であり、もつと暗澹とした世界を開くものであったとしても、知らないで進むよりは、まだ選択の余地があるのかもしれない。一方では、僕が行為を続けていくことと、彼女の言葉はずつと平行線で、本質的には何の関係もないのかもしれない。交わることは永遠にないのかもしれない。しかしそれでもいい。早く終る可能性が少しでも開けるものなら、それを受け入れよう。

僕は床に並んだ彼女の内臓を見、そしてその背側の黒い焼けた跡とケロイド状の傷痕を振り返った。彼女は大学生で、変な病気が進行して、何度も手術して、死んでいった。あの病気は何だったんだろう。死んだ僕の彼女は、まだ健康なころ、「もし私が死んだら自分の内臓を他の人にあげてほしい」ってぼつりと言ったことがあったっけな。でも、あのケロイドは何なんだろう。

何か気持ち悪く、そして痛ましいな。あの焦げた跡は何かやりきれないものがある。それは何かを象徴している気がする。

もし彼女がこのマネキンだとしたら、僕はこの内臓をだれか必要な人に配っていくということか……正常な内臓なら……

《はやくやって》

彼女の声が僕を包んできた。

僕は大鉈を横に振り上げ、彼女の美しい首めがけて、渾身の力で振り通した。その首は浮かび上がり、ゆるい回転をしながら、大きな音を立てて床に転がり落ちた。

重い静寂があたりを領した。空間がいったん収縮し、そして急激に密度を濃くしてさらに別な次元へ広さを増したような気がした。暗がりが増えてもつと奥を示しているようだった。

首が床に落ちた瞬間、それぞれ別方向を向いているはずのマネキンたちの視線がいつせいに僕のほうを向いた。前よりも強烈な眼差しが無数の矢のように僕に突き刺さってくる。

床に落ちた弾みで、頭の蓋が外れ、中のものが飛び出した。僕は彼女の首を壁に沿って立てかけた。

そこに飛び出した脳を拾い、細かく割ってその一つを僕の胸ポケットに入れた。

《みんな過去があるのよ》

立てかけた彼女の首が、僕の胸の部分で僕に囁いてきた。それは立てかけた首が僕に語っているのでもあり、胸の脳の破片が僕の胸に直接語りかけているようでもあった。

過去？

《あなたはきつとびっくりするわよ》

壊しくくなるようなことを言わないでくれよな。おれの仕事の邪魔をしないでくれよ。

《過去を喋ることで私たちはもつと壊れやすくなるのよ。私たちはみんな自殺したいと思っているの。でも死ねない恨みと怒りと敵意だけで形を保持しているのよ。だから私が話してあげることで、きつと仕事はやりやすくなるわ。あなたが彼らの過去とその存在を理解することで、マネキンたちはマネキンの形から解放されて死んでいくのよ》

よくわからないな。だって、あんなに僕を非難し、僕に罵声を浴びせていたじゃないか。

僕は脳の一片に語りかけ、それが直接僕の胸の中に深く声を返してくる共鳴の手応えに驚いていた。

《それはあなたが理解しないからよ。理解されないまま死んでいくこと、殺されていくことは、たとえモノでもやりきれないのよ。一方的な破壊だけは》

でも、結局僕は敵視され、怒りを買うわけだろう。

《声を聞いてあげれば薄らぐのよ。残酷さは変わらないにしても。でもそれが大事なよ。私たちの存在理由は生きていたときの声に満ちているということよ》

生きていた？

《そうよ。私たちはみんな生きていたの。マネキンとあなたの境は紙一重よ。マネキンになるにはちよつとした理由があればいいの。マネキンは現在であるとともに、未来よ》

わからないな。

《そのうちわかるわ。いまのあなたに必要なのは、ただ聞く耳を持つということよ。そして仕事を進める。それでいい。そうでしょ？》

そうだよ。

《じゃあ進めなさい。次は私の腕を切つて》

僕は斧で彼女の腕を切り落とした。カターンという乾いた音が、響き渡った。きれいな音だった。

暗い空洞がずっと奥に広がって、その音が無限にこだましていくようだった。

それぞれに過去があり、それぞれに理由がある。たしかに言われてみればマネキンの顔はそれぞれちがいがい、ポーズも表情もみんなちがう。あっちこっち勝手な方向を向いている。それに一つみんなそれなりの現実や世界や事情がある。それはマネキンの森をもっと豊かにさせ、充実させ、密度を濃くして、重い活気を漲らせてくる。僕の殺意は、むしろそれと向き合い、しっかりと受け止めることよって、もっと大きくなって新たに燃え上がっていく気がした。殺すことと殺されること、破壊することと破壊されることが、別な意味を帯びてより膨らんでいく。緊張の度合いはむしろ増している。僕はただ狂う回路をアースのような線で逃れる保証を得ただけなのかもしれない。

マネキンたちの声は、もっと近くなっている。

《人でなしめ》

《冷血動物》

《鬼畜》

それらの声はもっと生々しくもっと鮮明に、割れ響くように聞こえてくる。そして声は、僕に向かってしていると同時に、もっと広く、大きく、四方へ向かって放たれているものに聞こえた。するとマネキンの空間は、このビルの一室や二フロア、二フロアだけでなく、それを外へ突き破り、もっと巨大な空間へ出て、街の無数のマネキンたちと呼び合っていくような気がした。マネキンは外にも満ちている。こいつらはいったい何だろう。いったいこの空間の広がりは何だろう。マネキンの群れが連鎖している。そして僕の破壊行為はもっと普遍的な様相を呈してくる。しかしとりあえず、僕の空間は仕切られ、それなりに夥しい数が犇き、完了するには相当な困難が予想されるものの、その一部を担当すればいい——気休めかもしれないが、見通しがついてきた気がした。

僕はハンカチで額の汗を拭った。タオルがほしいな。

《タオルは壁際の浅黒い女性のマネキンの肩にかかっているわ》

僕がそこへ行くとほんとうにその肩にかかっていた。

ありがとう。

僕は何かほっとして、それで顔全体を拭き、それから首に巻きつけて、別の新しいマネキンに向かった。これまでは序の口だ。これからが本番だ。

できれば一分で一体を壊すくらいの速度が必要だ。それができるだろうか。僕はちよっと汚い、

埃をかぶったタオルで汗を拭い、熱い体を意識する。僕の体は火照っている。

僕の前にマネキンの海がある。固形の顔が樹海のように重なっている。無数のマネキンと僕はあらためて向かい合う。マネキンの視線が硬化する。

僕は感触を変えるために道具をまた斧に変えた。

## Cambodia 2 プノムペン

クメール・ルージュの軍はだんだん力を持っていきました。兵の数も増えていきましたし、農村の支配地域も増えて、食糧の確保や農民の協力も拡大していきました。私たちは組織的にも強化され、ゲリラ戦だけでなく、大きな兵力で戦闘することもできるようになっていました。ベトナム共産軍の指導や、ハノイから帰った幹部の軍事指導も徹底して、教育・訓練が浸透し、大きな組織戦力として動けるようになっていました。六万の兵力にまでなり、ロン・ノル政府軍と、数千の連隊規模の戦いでも勝利することができました。大砲もベトナム軍から回してもらい、またベトナム共産軍の部隊に戦闘に直接参加してもらって、大規模な攻撃ができ、地方の大きな政府軍基地を落とすことができるようになりました。それらを一つ一つ陥落させ、少しずつ首都を包囲していったのです。

しかしそれからまもなくして、アメリカのニクソン大統領が中国を訪問し、何かが変わってきました。

防空壕の中でクメール語が話せるベトナム兵が私に怒りを込めて、「中国は裏切った」と吐き捨てました。

その年の秋にはニクソン大統領は再選を果たし、和平協定締結への機運は濃くなりました。ベトナムは我々にも政府軍との和平に応じるよう強要してきました。しかし我々はあともう少しで政府軍を倒すところまでこぎつけていました。ここまで来ているのに、政府軍と交渉するわけにはいかない、とベトナムの要求を拒否しました。

その翌年一月に、ベトナム和平協定が結ばれました。アメリカ軍はベトナムから撤退し、表面的に戦争は終わったはずでした。しかしそれは我々にとって奇妙な和平協定でした。カンボジアでは決して戦争は終らず、むしろ激しくなっていたのです。我々の部隊はさらに強くなり、ロン・ノル政府軍と毎日戦闘を繰り返していました。政府軍もアメリカの膨大な援助で武器などは強化されていました。

ベトナムとの関係は険悪になっていました。それまで我々といっしょに戦っていた北ベトナム軍が突然一方的に引き揚げたのです。それも重火器などの武器を持って。それは信じられないことでした。我々は危機にさらされました。それはベトナム共産軍の裏切りに思えました。そのために、我々は窮地に追い詰められ、たくさんの仲間が死にました。

幹部は血のにじむような思いをして、中国からの秘密の援助を取り付けたり、捕獲品などの様々な工夫でやっとな戦線を立て直しました。もともとベトナム共産軍はクメール・ルーヂュを育て、指導してきたという自負があり、居丈高で、我々につねに命令調でした。しかし我々には我々の誇りがあり、クメールのプライドがいつもその底では反発していました。そのベトナム共産軍の引き揚げは、底にあった対立が表面化した最初でした。

ロン・ノル軍を支援し、体制を維持するために、アメリカ軍は毎日さらに猛烈な爆撃をカンボジアに加えました。その爆撃を逃れるために、避難民が首都のプノンペンに流れ込み、プノンペンはその人口が急激に膨らんで、以前の倍くらいになっていました。スラムが増え、物乞いも多くなりました。しかしアメリカの援助が間接的にそれらを養っていました。

我々は地方の町をさらに落とし、着実に首都のプノンペンへの包囲を狭めていきました。

私はすでに一七歳になり、体格もすっかり大人になっていました。私はベトナム戦争中だけでもかなりの人間を殺しました。戦争は、殺さなければこちらがやられます。恐怖も私を駆り立て、私は人を殺すことに何も感じなくなっていました。

七四年には、我々はすでにプノンペンを総攻撃するだけの力を得ていました。そのときは激しいアメリカ軍の爆撃で撃退されましたが、我々は自信を深めていました。

翌年七五年早々から、我々はあらためてプノンペンを総攻撃しました。空港に砲撃を加え、飛行場を使えなくし、トンレサップ川もメコン川も封鎖して、包囲を狭め、激しい攻撃を続けました。ロン・ノル政府軍は、幹部は軍のヘリコプターで脱出し、また下の兵士は軍装を解いて、市民に紛れ込んだり、地方へ脱出しようとしていたりしました。アメリカの外交団もヘリコプターの救援部隊に乗り込んでかろうじて脱出しました。我々については四月一七日、首都を陥落させたのです。

プノンペンが陥落したとき、それはふつうの都市のたたずまいを示していました。しかしそれが一段落した後、一つの命令が実行されたのです。

我々の幹部にとつて、また我々にとつて、都市は敵でした。都市にある享楽、都市にある貧富の差、都市にある外国からの援助、都市にある贅沢で優雅な暮らし、都市にある搾取、都市にある腐敗、都市にある流行、都市にあるギャンブル、都市にある売春……そしてそこから、我々を攻撃する手が伸びて、我々を滅ぼそうとする力も伸びてくる。銃弾が飛び、爆撃が襲ってくる。何のために——彼らの矛盾した、奢侈の生活を保持するために——それは我々の戦いの対象であり、我々の敵であり、我々が打ち砕かねばならないものでした。私たちはその考えを徹底して叩き込まれ、それはまた実際戦場で敵への憎しみとなり、同時に闘う大きなエネルギーにもなったのです。子供の頃、父親に連れられていったプノンペンで、私たちは田舎者として馬鹿にされ、お金がないためにペコペコと頭をさげ、そして都市のきれいな服を着た、うまいものばかり毎日食べている者たちに、媚びへつらい、馬鹿にされて冷たくあしらわれました。金持ちは何人もの妾を養い、何人もの女中を働かせ、高級車で子供を学校の送り迎えに行かせる。私は当時はそれが当たり前前に思っていました。が、兵士になって、戦うようになってから、それが虚妄だと知り、

怒りを蓄えました。それは敵への憎しみとして、殺す対象へのエネルギーとなって飛び出してきました。

彼らは富を独占し、利益を搾取し、貧困を生み、貧者を虐げ、教育を独占し、享楽を貪り、かつ煽って、人間を墮落させている——私はその矛盾の根源へ向けて、弾丸を放ち、殺意を集中させました。都市の文明は腐り、汚いにおいを放っている。ふんふんと腐臭を放っている。それは容易に隣人を感染させ、人間を羊化させ、頹廢の渦を広げていく。夜の中に虚妄の華を毒々しく咲かせ、偽りの夢をかきたてて、消費のメカニズムを煽って搾取の構造を深化させていく。金持ちもつと金持ちになり、もつと悪辣なことをして金を膨らませ、その力で貧しい者たちをより搾取し、虐げ、ますます貧しくしていく。人間は生まれながらに平等ではなく、階級が人間を隔て、類別し、下の者は上の者に永久に貢ぎ続けなければならぬ、それが都市を肥大化させ、醜く巨大化させていく……私は毎日食べ残しの肉や野菜やケーキの御馳走がブノンペン的高级ホテルで捨てられていくのをこの目で見てきました。そして浮浪者たちがそれを漁り、犬や猫のように、それに群がって争っている様を見してきました。正面玄関から出てくる腹のどっぷりした金持ちとその家族を私は当時私たちが永久に到達できない一つの宿命として受け入れざるを得ないと思っていたのです。仏教の輪廻は、それをそのように前世からの因縁として固定してきたのです。私は銃弾を政府軍の将校や富裕なその家族に撃ち込んでから、その神話を破壊しました。この手で、腐敗を粉砕することができると確信しました。

私の目には、スラムも、みなその搾取の構造の犠牲者に映りました。どぶ板の下に真っ黒い汚水が溜まり、その腐臭の上に小さなバラック小屋が浮いている。密集して肩を寄せ合い、その日暮らしに汲々としている。怪我をしたり、伝染病に罹ったりしても、医者にかかることもできず、薬さえままならない。その日のお金を得るために過酷な労働に狩り出され、また賃金を叩かれる。危険な仕事、過酷な仕事、汚い仕事にまわされて、無理を強要される。また怪我をする。子供を売り飛ばし、女に売春させ、果ては麻薬に走る。いったんそのサイクルに入ったら、もう死ぬまで抜け出せないのです。

現実にブノンペンのスラムには、麻薬がはびこっていました。政府軍の兵士の一部が戦闘の恐怖から逃れるために、ヘロインやマリファナに耽るようになり、それが金儲けできる手段でもあることから、スラムにもひろがったのです。

もともとタイ・ビルマ・ラオスの国境にまたがる「黄金の三角地帯」は、ケシの大産地で、それはタイのチェンマイやラオスのビエンチャンから、香港、台湾経由で大規模に世界に広がっているということでした。クンサーというボスがそこを支配し、タイ軍部や、ラオス政府軍と裏で繋がり、アメリカの麻薬シンジケートも絡むルートができていて、一部は軍用機でも運ばれているということでした。アメリカからの飛行機が武器弾薬を援助として運び込み、その帰りに麻薬を乗せていくということも聞きました。アメリカ軍の兵士たちには、麻薬が蔓延し、それは日本の沖縄や他の基地にも持ち込まれているそうでした。

ビエンチャンは麻薬の巢窟でした。アヘンやヘロインや、マリファナが、煙や酒や原色の色彩で夜を彩っているとミーティングで話されました。またメコン河沿いは、マリファナの栽培に適

したところがたくさんあり、ナコンパノムの対岸など、マリファナ畑が一面に広がっているということでした。アメリカ軍のB52の基地は沖縄とグアムとタイのウタパオにあり、沖縄は北ベトナムへの空爆が多かったのですが、ウタパオからは北ベトナムやラオスやカンボジアへ出撃していたのです。その護衛の任務や短距離爆撃に、アメリカはタイの国境近くに戦闘機用の飛行場をいくつか作っていました。北にウドン、東にウボン、そして北東にナコンパノムでした。ここにF4ファントム戦闘機やF105戦闘機、F115戦闘爆撃機、そして軽爆撃機が配備され、前線へ繰り出されていました。それらの一部は、ベトナムのジャングルに草木が枯れる猛毒の薬を撒いていました。ナバーム弾で森を焼き払ったりするのも、そこからの飛行機でした。我々がリラが隠れるところがないように、森を枯らせ、焼き尽くしてしまおうというものでした。薬を撒かれた森は、荒廃とした灰色の木の幹だけが連なる、死の土地になっていました。そしてそれを散布するために飛行機が飛び立つ基地は、自らもまた麻薬に汚染されていたのです。

我々は麻薬や猛毒薬をもたらす力を憎んでいました。それはみな都市の腐敗に根ざすものでした。

ジャングルの我々が泥水を飲み、戦闘の合間を縫って、干した飯を食い、トカゲやネズミを捕えて飢えを凌いでいる間に、都市の人間たちはビールやウイスキーや贅沢な美酒を浴びるように飲み、七面鳥や鶏やアヒルや牛を食べ、しかも残して捨てています。スラムではみな飢えて、明日の糧を求めて悩んでいます。そして貧民の耐える生活を自分たちの下に敷き、いつそう貧困に追い詰めて、上の人間たちは、いつそういい、楽な生活、便利で快適な生活を楽しんでいる。放埒で賑わい、美食に耽る人間たちが、汚い息を吐いて馬鹿騒ぎをしているのです。歌に耽り、セックスに耽り、笑いに耽り、酒宴に耽る、頹廃と享楽、奢侈と腐敗とが、爛熟した花のように、毒を吐き出し、快樂を増殖させている。諸悪の根源として、我々の敵としてその巨大な空間が我々の目の前に立っていました。

首都が陥落したそのとき、我々に下された第一の命令は、我々の敵愾心になかったものでした。都市の毒を根本から排除する。都市の悪と牙と猛毒を抜き、最初から建設し直す——その意図に沿ったものでした。都市住民をすべて都市から追い出し、農村に強制移住させたのです。都市を空にして、都市住民としていまままで享楽に耽っていた者を農村で働かせて、人間の原点に戻し、一から鍛え直すというものでした。その過程で死ぬ人間、弱い人間はどんどん容赦なく排除し、強い人間だけを残し、淘汰していくものでした。農村で我々といっしょに戦い、農作業などの労働と、都市と戦うことを続けていた人間は我々の同志であり、旧人民と呼ばれ、都市に居住し、都市の享楽に預かっていた人間は新人民とされました。新人民は根本から教育され、新しい国家体制に合うよう、改造されなければなりませんでした。

その処置は、もう一つの二次的な目的を持っていました。それは政府軍の兵士が民間人に紛れ込んで、我々の敵として潜在的に危険を及ぼすため、それを排除する目的でした。武器を隠したとしたら、街のどこかであり、その街から出してしまえば危険は避けられるという判断でした。実際に政府軍が再蜂起する噂もあったのです。またスラムの住人たちは、もともと農村からやってきた人間たちです。もう戦闘もなく安全になった農村へ帰すことは自然なことでした。

我々は銃を空に向けて何発も撃ち、威嚇しながら、街を一軒一軒巡って、中にいる人間を追い出しました。「全員街を出ろ」「だれも彼もだ」「アメリカの大爆撃がある。反乱分子もブロンペン全体を戦闘に巻き込もうとしている。安全なところへ避難しろ」というのが、名目でした。我々はそれを声高に繰り返しながら、各家やビルに入り、中に隠れている人間たちを追い出しました。銃声が街のあちこちで響きました。それは威嚇の銃声だけでなく、命令に従わない人間、勝手な行動をする者に対する処罰であり、見せしめでした。実際にその段階で処刑された者がかなりいました。

元政府軍の兵士は判明しだい射殺しました。命令が出ていたからです。元政府軍兵士はどことなくわかります。体格もいいし、きびきびしたところがあり、戦闘に参加して命がけで闘ってきた者は眼にもそれなりの光があるものです。私が一軒の豪邸に入っていたとき、若いハンサムな青年がいて、私に両手を挙げて近づいてきました。私は彼が、その上品な頭のよさそうな顔ときりっとした物腰から、政府軍の将校であることを直感しました。彼は私に、囁きました。「庭に純金とダイヤモンドがある。見逃してくれ」——その言葉を聞いたとき、私は彼に壁を背に両手を挙げて立つようにいい、彼がそれに従ったところでその顔をめがけて引き金を引きました。連射で顔は粉々になりました。直前の瞬間の、恨みに満ちた顔はすさまじいものでしたが、私はそういう顔にももう馴れていました。父や母が殺された情景がふと私に到来しました。今はむしろ逆の立場でしたが、復讐や報復とはもつと別な衝動が私を突き動かしていました。それは都市そのものに対する憎しみであり、敵意でした。私の中の敵意がもつと強烈に彼に向かったのです。そして同時にそれが石のように硬く固まって、身に付けた機械的な処理感が、より研ぎ澄まされて彼に向かっていったことを自覚しました。彼の妹らしい少女が木陰でそれを見ているのを知りましたが、それにもかまわず私はさらに頭が飛び散ったその死体に向けて、数発を撃ち込みました。母のときと同じように体が撥ね上がりました。

少女は私と同じか少し下くらいの年齢に見えました。自分も殺されると思ったらしく駆け出しましたが、私がそちらの方向へ一発撃つと、足がすくみ、へなへたと崩れこみました。銃弾は彼女のすぐ脇を通って、前の壁にめりこんだのです。彼女はきれいなピンクのスカートをはいいていました。カンボジアではふつうサロンという腰巻を使うのですが、彼女は洋風の服装でした。よく見ると、彼女は小便を漏らして下着とそのスカート濡らしていました。恐怖で震えていました。私は彼の兄が隠したはずの純金のありかを彼女にたずねました。彼女はぶるぶるした指でうしろの木の根を指差しました。私は示したところを彼女に掘るように言い、そこから純金とダイヤモンドを取り出させました。少女も何かきれいな布の袋を持っていましたが、それも没収しました。金銀宝石類は手に入ったらすべて軍が没収し、国庫に入れるという指令を受けていました。実際には一部を略奪し、腕時計など自分のものにしてしまう者も少なくありませんでした。しかし私はそれを上官に渡すつもりでしっかりポケットに入れ、彼女を立たせました。私は面白半分に彼女に下半身裸になれ、と命令しました。「濡れたままでは気持ちが悪いだろ」彼女はスカートも下着も脱ぎ、下半身を剥き出しにしました。わずかなかわいい性毛が尿に濡れて光っていました。あらためてきれいなかわいい顔だと思いました。彼女はそのままでは生きていけないこ

とは明白でした。見るからに元政府側の人間だということがわかるからです。直接処刑されないにしても、途中で他の仲間から、乱暴されたり、農村で働かされたりして、たぶん厳しい生活を送っていきけるようには思えませんでした。いずれにしても淘汰される宿命にありました。

「生きたいか」と私は言いました。

「生きたい」

彼女はそのきれいな顔をくしゃくしゃにしました。私は勃起しました。

「胸を出せ」

彼女は乳房を出しました。きれいな胸のふくらみでした。私はその乳房に向けて、トリガーを引きました。ほとんど同時に、どこかでだれが撃ったのかわかりませんでした。が、砲声が聞こえ、ビルの壁が崩れる音がしました。私はそのとき、射精してしまいました。倒れた彼女の喉から「カラス」という声が聞こえた気がしました。私の真つ黒い服は、いつ付いたのか、だれのかわかりませんでした。が、血糊がべったりと朱をひろげていました。ホーチミンサンダルの裸足の足にも鮮血が飛び散っていました。

隣の家では、腹の出た商人風の男から、トランク一杯のお札が私に差し出されました。「こんなものはもう役に立たない」と言って、私はそれを蹴り、中のものをばら撒きました。アンコール・トムのバイヨンの像の描かれたグリーン色の五〇〇リエル札が部屋いっぱい散乱しました。これからの生活はすべて貨幣なしになる。通貨は使用されないことになっていたからです。それは我々がジャングルの生活で行なっていたことでした。都市の機能は貨幣も大きな役割を果たしています。我々は貨幣をすべて否定して、もつとちがうものを基準にする予定でした。お金が人間を墮落させる。お金によって人間の価値が決められ、虐げが進められる。それが都市の邪悪の根源でした。その源をすべて断ってしまえば、もつと直接に人間が行動で結びつき合えるはずでした。私はその男の、さらに札が詰まっていそうなでっぷりした腹に銃弾を撃ち込みました。

仲間が踏み込んだ家には、たいていリエル札が散乱していました。ときには屑の山をなしていました。我々はそれを蹴散らし、踏みつけて、だれも残っていないか探索しました。

電気はもちろん、水道も、ガスも、まもなく止められるはずでした。電話はすでに線を切られていました。交通手段も断たれます。都市機能はすべて停止され、ここにはだれもいなくなるはずでした。

我々は前の体制を維持していたすべてのものを破壊していきました。教育も、宗教も、根底から壊し、新しいものにしていくはずでした。それを支えていた人間も必要がなくなります。彼らそのものが否定されます。

公務員はもちろん、学校の教員も、処断は厳しくするように言われていました。体制側の人間であり、彼らは住民を農村へ帰すことに、多かれ少なかれ反対を唱え、結局邪魔になるからです。体制派の知識階級は抹殺しろとの命令でした。彼らは不要な人間たちでした。彼らは一カ所にまとめられたり、トラックに載せられたりして、即時処刑ではないにしても、厳しい処遇を受けました。

また寺院の僧たちも、働かずに農民の食料を奪う不経済な、不合理な存在として、処理するよ

うにも言われていました。黄色の袈裟をまとい、頭が丸坊主の僧たちも一つのところへ集められ、処刑の地へ運ばれていきました。カンボジアには数十万人の僧がいます。この僧たちが農民から無駄飯を奪って、悪しき道徳で階級意識を植え付けている——これが新しい体制に邪魔になるというものでした。仏教国のカンボジアでは、僧を殺すことは最悪の罪とされてきました。もし僧に対して殺人の罪を犯したなら、三代末まで呪われ、家族はみな地獄の苦しみを味わうことになるとされてきました。しかし、私の同僚がその実験として地方の町を攻め落としたとき、僧を銃殺しましたが、彼は何も変わることなく、元気に暮らしていました。罰が当たるといふこともなく、彼はむしろそれによって私より早く班長になっていきました。特に幹部は、そういうものは迷信で不合理だとし、だからこそその迷信をばら撒く僧侶を消さなければならぬと断じていました。僧侶の食べる何万トンという米をその分貧しい人に供出すればずっと多くの貧民を救える。もしそれにも必要なくなれば、その米を輸出して新しい機械や新しい技術を輸入し、国家の発展にもっと有効に役立てることができるといふことでした。私たちもそれが合理的なことだと思いません。

僧侶たちは、市民とは逆の、まったく別な方向へまとまって行進していくことを命じられました。黄色い袈裟——チーオンの輝くような色が何千人とまとまって歩いていく様は、壮観でした。僧たちは皆合掌し、罪を救う経を唱えながら、北へ歩いていきました。自分たちの宿命を知っているようでした。その声は大きな合唱となって高らかに街の通りに響き、都市全体を巻き込んでいきました。

街から追い出されてきた都市住民——新人民は、夥しい数に上りました。どこにこんなに人間がいたかと思うほどでした。彼らはまず武器を持っていないかをチェックされ、それが終るとどんどん行進に追い立てられました。北に住んでいた者は北へ、南に住んでいた者は南へ、西に住んでいた者は西へと単純にその方向へ追い立てました。車で行くことは許されず、もしそんなことをしようとしたら、直ちに銃殺されました。また車に頼ろうとするものは、旧政府となんらかの関係があったとみなされましたから、それだけでも処罰の対象になる者でした。タクシー運転手でさえ、我々は敵視していたからです。街にはいたるところに、乗り捨てられた車がありました。一部は暴動があったのか、パニックになったのか、商店のガラスが壊され、金目のものを持ち出された跡があったり、散乱状態のひどい地域もありました。

我々は威嚇の銃を撃ちながら、人々を集め、都市の外への行進を促しました。人間の群れが街をあとに、大行進を始めました。老人や子供や女や男が、少しの荷物を手に、あるいは背負い、農村へ向かって大移動を開始しました。病気の者、老いて歩けない者は、そのまま置き去りにされるかその場で銃殺されました。妊婦もいました。「歩けない」というと、「では、ここに残れ」と処理していきました。ほうっておいても明らかにダメな者はそのままにしていきました。炎天下で、長く歩くのは困難な状態でしたが、銃で追い立て、恐怖を与えると、弾かれるように前へ進みました。道路の両側は落伍したり、反抗したり、政府軍関係と疑われたりして、銃殺された者や、疲れや病で死に瀕した者がごろごろ連なっていました。我々の仲間の兵には、腕時計やボ

ールペンなど簡単な物に興味を示し、それを奪おうとする若い兵もいました。それを要求して断るとただちに銃弾を浴びた住民も少なくありませんでした。赤ん坊の死体もありました。

都市住民の群れが、街を後にしていきましました。砂埃を巻き上げ、だからだと農村へ向かいましました。だれも押し黙ったまま歩いていました。沈黙の行列でした。その長い行進は、巨大な蛇のように、うねりながら農村をめざしていきました。うしろには、空っぽになった都市の建物が奇妙な空白とともに残されていました。無人の都市の静寂がひろがっていました。行列が進めば進むほど、それは奇妙な遺跡のように、そしてアンコールワットと同じ、壮麗な廃墟のたたずまいを示していました。

ENOLA GAY 2 南西太平洋 テニアン

テイベッツ

なんだ、このライトは。まるで映画のショウミたいだな。こんなに派手にやりやがって。グロースの差し金か。あるってことは知らされていたが、まさかこんなに派手だとはな。なんだ、このフラッシュの嵐は。おれたちはスターじゃない。「歴史に残るヒーローだ」と？ 馬鹿野郎。これから落として行くんだ。成功するかどうかもわからない冒険に、なんという馬鹿騒ぎだ。ひどいもんだ。「こっちを向いて」？ お前が回って来い。グロースのやつ、こんなことまでおれたちにやらせるのか。離陸へ向けて集中しなきゃならんのに、なんたることだ。離陸のことで、おれは頭がいっぱいだ。——そうか、どうせ写真を撮るなら、**操縦室のすぐ下で、ENOLA GAYの名の下で撮ってくれ。母の名が入るように。頼むぞ。よし、もう一枚。**

ビーザー

まるでおれたちや、ハリウッドスターだな。ハイハイ、お望みのポーズを決めてやるぜ。おれは大歓迎だ。田舎のお袋もこれを見たらご機嫌になるさ。グロースのオヤジからかなり喋っていいいから、対応してやってくれと言われたし。お安い御用だ。何でも聞いてくれ、爆弾のこと以外だったら何でも答えるぜ。あんなに秘密、秘密で厳重に喋るのが禁止されていたのに、いったい何という逆転だ。いまはある程度いいだ。フン、グロースめ、これもあいつの戦略か。いい加減なもんだ。いままで我慢してきた分、目一杯お前たちに喋ってやる。どうだ、いい顔に写してくれよ。新聞の一面に出るかもなあ。そんなことは初めてだな。おれのハンサム顔が一面にか。悪くないな。よしどっちでも向いてやるぜ。次はどんなポーズだ。何？ 最後の別れの表情だど？ くそつたれ。おれたちは帰って来るぞ。自殺しに行くわけじゃない。必ず帰って来る。悲壮な顔をしてくれだど？ 馬鹿野郎。おまえらはみんなおれたちが死ぬと思っているのか。だから笑顔がきれいになると思っているのか。ふん、そんなリップサーピスはもうおしまいだ。これが最後だ。最後の一枚だけ付き合ってやる。そうだ、そのフラッシュだ。「スペシャル」はそのフラッシュの何万倍もすげえんだとよ。ゴーグルをかけないと眼が潰れちゃうんだとさ。

キヤロン

個人装備補給小屋から、パラシュートや防弾チョッキ、浮き具、戦闘用ナイフ、救急用品、釣り針、糧食・飲料水セット、サバイバル用品、拳銃を受け取ってここへ来たら、えらい騒ぎになっちまってる。すぐにおれは新聞記者どもに捕まっちゃった。乗る前の雰囲気とは思えないな。おれはただ尾部銃座で機関銃を構えて、敵の戦闘機が来たらぶっ放すだけで、あとは映写カメラを回しておけばいい、みんなよりは楽な任務だが、なんでそんな軽い任務のおれを捕まえて質問攻めにするんだ。このドジャースの野球帽がそんなに親しみやすいのか。眼鏡をかけた銃撃手はめずらしいって？ バチバチそんなに撮るな。撮るんなら、おれの家族の写真といっしょに撮ってくれ。女房とほら生まれたばかりのかわいい娘といっしょにだ。これをお守り代わりに持っていくんだ。絶対のお守りだ。絶対に帰って来なきゃならんからな。かわいいだろう？ おれはこれを銃座の間に挟んでおくのさ。帽子を取ってくれて？ 馬鹿言うな。おれはこれを被って戦闘に出ると決めておいたんだ。これはおれのトレードマークだ。そうだ、おい、おれは自分のカメラを持っていくつもりだったが、忘れてきちゃった。おれとしたことが、あがってるのかな。だから、おい、一つ貸せよ。カメラを貸せ。スペシャルの写真撮ってきてやるぜ。いわばおれはエノラ・ゲイの撮影係なんだ。ばっちりすごいのを撮ってきてやるぜ。おいおい、一つでいいんだ。そんなに撮れないし、そんなに持ち込めないよ。よしよし、おまえと、おまえの分、二台でいい。歴史に残る写真だ。特ダネだけ。いいのをいっばい撮ってきてやるからな。生きて帰ったらだが、楽しみにしているよ。

歴史に残る……歴史に残る……いったい何なんだ、それは。何万人を一度に殺す歴史か……それがこの華やかさか。

ようし、もういいだろう。おれはもう、銃座に銃を据えなきゃならん。ボスが呼んでいる。みんな、じゃあ、あばよ。

ティベッツ

おれのお守りのシガーケースは胸にあるな。二時二〇分。

よし、みんな、仕事だ。行くぞ。

「いいか、ドウスドウス」

「OKです。大佐」

「右翼第三号エンジン始動」

「OK」

「右翼第四号エンジン始動」

「OK。順調です」

「左翼第一号エンジン始動」

「左翼第二号エンジン始動」

「OK」

「午前二時二七分。全エンジン順調。油圧をチェックしろ」

「OK」

「ルイス、ドウズ、バンカーク、ネルソン、シューマード、キャロン、ファイアビー、ステイボリック、異常はないか。計器最終チェックだ」

「異常なし」

「ビーザー、電波受信装置はいいか」

「OK」

「パーソンズ、ジェプソン、爆弾倉、および爆弾準備に異常ないか」

「異常なし」

「タキシング・スタンバイ。エンジンパワー上げ」

「OK」

「フラップ、離陸ポジション、OK」

「こちら、ディンプルズ82号、テナアン北管制塔へ。誘導滑走準備完了。離陸指令を待つ」

「北管制塔からディンプルズ82号へ。誘導滑走を許可する。A滑走路使用可能。A滑走路へ向かえ。ABLEのAだ。ごうぞう」

「午前二時三五分。ディンプルズ82号、離陸準備完了。離陸許可を待つ」

「北管制塔からディンプルズ82号へ。離陸を許可する」

テイベッツ

二時四四分。闇がおれを待っている。誘導ジープが先方を照らしながら、滑走路を走っていく。何も障害物はない。ずっと先まで、二五〇〇メートル先まで、滑走路は何もない。あとは海の闇だ。滑走路のいちばん向こうに、あの端っこの右側に、事故が起きたときの救急車と消防車が待機しているのがかすかすに見える。滑走路ライトもジープのライトもそれを照らしている。あいつらの厄介にならないように……なるものか。

エンジン出力を最大にする。うなりをあげる。このうなりだ。よし、ベストだ。

エンジン出力はフルだ。プロペラの回転数も上がった。この手ごたえはいい。もう一度チェックだ。制限重量は六八トンなのに、この機の重量は七五トンだ。七トン近くオーバーしている。さあ、うまく上がるかだ。ふつうのやり方では無理だ。一〇〇マイルの通常離陸速度では浮揚しない。一二〇マイルまで持つていく必要がある。プロペラ回転数は毎分二五五〇以上が必要だし、マニホールド圧力は四三インチが必要だ。それには最後のギリギリまで、二五〇〇メートルの滑走路をフルに使って地上滑走させなければならぬ。行き過ぎてしまったら、万事休すだ。……8秒前、7、6、5、4、……さあ、行こう。スロットル全開。四五分、きつかりだ。

ルイス

ボス、OKです。行きましょう。

この機体は積み過ぎだ。一万五〇〇〇ポンドオーバーだつてことを計器が示している。ボスはどうやってこれを無事に離陸させるのか。見ものだな。エンジンの調子はいい。しかし推力がそこまで上がるか——。滑り出した。そうだ、そうだ。マニホールド圧力計もぐんぐん上がっていく。

いいぞ。三八インチ、三九インチ……プロペラ回転数二三〇〇……  
ドウゼンバリー

滑り出した。この瞬間、この瞬間が大事だな。機は重すぎる。エンジン出力は何度も念を入れたから、だいじょうぶだ。しかし重すぎる。普通にやればだいじょうぶだが……テイベツツのボスは、機をできるだけ長く滑走させてスピードをつけて浮揚力を増すつもりだ。それはおれにもわかってる。

もう滑走路の半分が過ぎた。三九インチ……まだ浮かない。こんなに長く引つ張ってだいじょうぶか……まだ浮かない。だいじょうぶか……浮かなかったら一卷の終わりだ。

ルイス

もう滑走路の三分の二を過ぎたぞ。マニホールド圧力はまだ四〇インチだ。プロペラ回転数もまだ二五〇〇。ボスは上昇する気があるのか……  
おい、救急車と消防車を過ぎたぞ。行き過ぎだ。

重すぎる！ 機首を上げなきゃ！

おれが上げる！

テイベツツ

だめだ！ そのままだ！

ルイス

滑走路の先へ出ちまうぞ！ 海だ！

テイベツツ

よし！ ここだ！

ルイス

浮いた！

ドウゼンバリー

上がった！ フワリだ！

東京 3 スクラップタワー

僕の後ろで僕を見ているマネキンの首たち——それは一つの女性の顔を中心に巡り始めている。顔は後ろの床にあるけれど、僕の胸ポケットの中で僕に直接話しかけてくる彼女の脳の破片と、僕は会話し続けた。会話しながら、作業は捗っていく。

「鬼だ」とか「畜生」とか、敵意に満ちた罵声や悪態は変わらずに浴びせかけられてくるが、その中から過去の声が聞こえてくるようになり、その声が敵意を少し中和させるのだ。

《私はビルの屋上から飛び降りたのよ》

《私は団地の六階からだったわ》

《私は手首を切ったのよ》

《子供に裏切られたしね》

憎しみと敵意に満ちた言葉、非難の眼差しは僕に強く向かうものであると同時に、僕だけでなく、もっと広い空間に向かうものであることも僕は感じ始めていた。僕は確かに彼らを殺す者だ。しかし同時に、彼らの敵意は、僕にやらせているあるもの、もっと大きな全体を方向づけているものに対しても、強く向かっているようだった。

僕は、内臓をバラ撒いた、僕の以前の恋人に似たそのマネキンに、彼女の名を被せた。彼女の名はエミで、彼女は音が似ているMという字がとても好きで、いつもそれを自分のトレードマークにしていた。マザーのMは世界を表すとも言っていた。僕はそれを思い出し、脳の破片に「M」と語りかけた。脳もそれが通じたのか、僕にそのまま答えてきた。

M。

《何？》

みんなに過去があると言ったよね。だからMにも過去があるわけだ。M、君の過去はやっぱり病気ってことかい。

《わたしの過去は、そう、病気ね。わけのわからない病気よ。そしてもう一つ。わたしの内臓は売られたのよ。あちこちにね。肝臓は一〇万円。腎臓は一二万円。心臓も二〇万円》

子宮も？

《子宮も、もちろん》

いくら？

《八万円よ》

病気なの？

《病気でない健康な臓器もいっぱいあったのよ。それに、病気は病気でサンプルとしてまた売れるのよ。実験用だね》

何でも商品になるわけだ。

《そうよ》

僕は会話をしながら作業を進める。斧で首を叩き切り、腕を落とし、放り投げる。

《殺されるぞ、おまえ自身が》

《やりやがったな》

《覚えてろ》

マネキンたちはみな裸だ。男も女も、裸体が犇き、森をなしている。僕だけが衣服を着、僕だけが汗をかいて、荒く呼吸している。衣服を着ている自分が、おかしな存在に映る。僕はきつとまたトイレに行きたくなる。僕だけが排尿し、僕だけが喉が渴き、そして水を飲む。僕はひどく孤独になる。なぜ僕は水を飲み、排尿するのか。なぜ僕は発熱し、寒さを感じ、衣服を着るのか。だめだ、だめだ。僕はこいつらに負け始めている……殺すのは僕が殺すのだ。僕がこいつらの生殺与奪権を持っているのだ……

僕はまた、別なマネキンを解体する。バラバラにする。

《内臓は、もっと安いだよ。わたしの内臓だけじゃないの。外国から、子供たちのものなんかた

くさん送られてくるのよ。わたしのケースはただそのごく一部にすぎないのよ」  
 「へえ、もうそんなに売買されているのか。」

「表に出てこないだけよ。それはもつと根が深いの。あなたが想像する以上にね。フィリピンからも、インドネシアからも、インドからもたくさん臓器が輸出されてくるのよ。浮浪児を捕まえて、臓器を取り出すのよ。そのために監禁して育てることだってあるの。たくさん臓器が輸入されてくる」

それが君の過去ってわけか。

「まあ、そうね」

じゃあ、例えば僕が君の前に壊したマネキン、どういう過去があるんだ。

「あのサラリーマンの彼は鬱病なのよ」

なにかMのその言葉に呼応するように、どこかから声が届く。

「何とといったって首吊りがいちばんさ」

「いや、電車で飛び込むのがいい」

「車に排気ガスを引き込むのも意外に楽なんだぜ」

「上司にいじめられ続けちゃってさ」

僕はいま解体しているのもいちばん最初のことと同じような女のマネキンだが、そのマネキンはグラマーで、胸が大きい。その首を切りながら、僕は彼女に問いかける。

君も過去を持つているのか。

転げ落ちながら、それは答える。

「よく聞いてくれたわ。私は墮胎しているのよ」

そんなの、よくある話じゃないか

「六回目よ。もう産めない体になっちゃったの」

きれいな乳房なのに、もう女の第一の機能はなくなっちゃったというわけか。

「産むだけが女じゃないのよ」

彼女はムツとしたように言う。

彼が墮ろせって言ったのかい。六回も。

「みんなちがう彼よ」

僕がその胴体を断ち割ったとき、彼女は同時に答えてきた。

「ノイローゼになっちゃったのよ。毎晩墮胎した子たちが私を責めに来るのよ。どうして産まなかったんだ、って」

僕はまた、二度目の、子供と母親がいっしょに歩いている家族のマネキンを目の前にしていた。M、これもずいぶん幸せそうだ。前と同じだ。これに過去なんてあるのかい。

「その子は塾に通っているうちに、おかしくなっちゃったの。閉じこもって。結局お母さんをバットで殴ったのよ」

それを聞いて、僕は無意識に壁のバットに近づき、それを手にする。体が自動的に反応してしまふ。僕はそのバットでその子を叩き壊す。どうしてこんなに凶暴な力が入るんだろう。一発で

粉碎できた。バットもかなり有効だな。使い方しだいだ。僕は再認識する。

そして僕は不安になる。どうしてこんなことが次々に僕にあからさまに知らされてくるんだ。どれもみんな歪んでいる。どれもみんな病んでいる。それがいったい何なのか、僕にはわからない。何か狂っている。どうしてこんなに乱暴したくなるんだ。確かにそうだ。マネキンたちはみな過去を引きずっている。みんな個別的で、それぞれに特殊な事情がありながら、底では共通した根で繋がっている。バラバラの方向を見、まったく無関係にそれぞれが別々のポーズを取りながら、同じ腐蝕のにおいがする。気味悪い悪質な病にも思える。広大な、そしてしかも深い、癌のような浸潤が都市全体の底から湧き上がってくる。それはもともと根深いところで、細胞そのものや、分子そのものが変化し、冒されていく、深刻な腐蝕のような気がする。

マネキンたちがエスカレーターに乗ってくる。押し合いへし合いしながら、顔や体をくっつけながら昇っていく。それは乗っているという印象ではなく、運ばれていく感じだ。どこかへまてて送られていく。彼らは何も知らない。殺されていく家畜のように鳴き声を上げるわけでもなく、叫んだり、もがいたりするわけでもない。ただ運ばれていくだけだ。無自覚にまかせているだけだ。

それはエレベーターも同じことだ。エレベーターもぎゅうぎゅう押し込められて、どこかへ送られていく。それはこの、僕がいる階の解体場所のような、結局は破壊の場所かもしれない。エレベーターが開いたら、マネキンがどつと押し出してくる。僕はそれを新しい仕事として受け止める。そしてそれは僕のところだけではなく、もつと無数にある解体の場所へも、殺到していく。洪水のように押し寄せていく。マネキンたちはもつとたくさん生まれている。それがどうして、なぜ次々に生まれてくるのか知らないが、僕にはそれが実感できるのだった。

僕はふとずっと以前に映画で見たナチスの輸送列車を思い浮かべた。人間が貨車にすし詰めにされ、どこかへ移送されていく。それは家畜のように乗せられ、便も垂れ流しの貨車だった。どんどん積み込まれ、運ばれていく。処理される場所へ大量に運ばれていく。事務的に、ときばきと処理されていく。どれくらい多く、どれくらい短時間に輸送できるかしか考えられていない。その貨車での人間の締め合いが、ひどくマネキンたちの重なりに似ている気がするのだった。腕が絡み合い、脚が交差し、頭が重なり合う。ぶつかり合う体が処理されるものの密集感で貨車を満たしている。それがマネキンたちの姿と重なってきしかたがなかった。

Mが僕に囁く。

「みななマネキンになっていくのよ。便利さや規格化や数量化は、みんなを乾燥させるのよ。私たちが行き着く果てはそこしかないわ。みな破壊されるためにだけある存在になっていくのよ」  
僕は即座にそれが否定できなかった。それはちがっているかもしれないし、合っているかもしれないかった。

マネキンたちには過去があり、みな何かを引きずっている。それは僕にも少しずつわかりかけていた。そしてそれらが見えてくればくるほど、それはこの現場だけでなく、もつと大きな空間として広がっているのが実感できた。マネキンたちの敵意は、相変わらず僕を打っていたが、その空間の広がり、僕へのベクトルを薄めていた。僕の作業が果てしなく続く感覚が僕をやりき

れなくさせた。

僕はただ斧を振り上げ、壊し続ける。マネキンたちの頭が僕の後ろに転がっている。腕や手や、脚や胴体が、床に汚く散らばり、重なっていく。もう一輪車でまとめて整理しなきゃならないと、きだなど思いながら、僕は惰性がついて、ただガツン、ガツンと切り倒していく。

《痛いわ》

《ぶった切られて》

《執行人》

《おまえだって》

ぼくはもう何体バラしただろう。もう一〇〇体は壊しているはずだった。まだ一〇〇か。こんなものじゃとても終らないな。僕は汗だくになっている。破壊するために発熱し、燃えている。奇妙なことに、僕はマネキンたちの過去を知れば知るほど、それにためらいや同情を覚えて作業が遅くなるんじゃないかと、逆に速くなっているのを覚えた。それは作業が慣れてきて動きが無駄がなくなったせいもあるが、速くすればするほど、逆に過去がよく見え、そのために敵意を感じないですむからだだった。その分邪魔なものが遠のき、余計なエネルギーを使わなくてすむ、スムーズな進行感に包まれるからだだった。

《速くなったわね。捗るじゃない》

ああ、君のおかげだよ、M。

《幸せ？》

幸せ？ 何か変だな。何が幸せなんだろう。作業が捗ることかな。捗って、仕事が進む。それで僕のバイト料がしっかりもらえて、僕はうまい食事にありつけ、家賃も払える。お金がもらえるということなら、僕は幸せにちがいなかった。

まあね、悪くない。幸せだよ。物事が進むってこと、そして僕がちゃんとお金をもらえるってことなら、僕は幸せだよ。

《殺して幸せってことね。たくさん殺せば殺すほど、たくさん壊せば壊すほど、あなたは幸せになるってことね》

別に僕は殺しているわけじゃないよ。ただマネキンの形を壊しているだけじゃないか。

《あなたは首を折られたものの痛みはわからないでしょうね》

どうして急にそんなことを言い始めるんだよ。作業が捗るようにしてくれたのは、M、君のアドバースなんだぜ。

《敵意は減らないのよ。それがちゃんとわかっているのかしら》

僕にどうしろと言うんだよ。いまさら裏切るようなことを言うなよ。僕はこの仕事を止めることはできないんだよ。僕が生活していけなくなっちゃうじゃないか。僕は絶対止めないよ。

《もう少し正直に言うのよ》

何を。

《壊して楽しいでしょ》

そうだ。たしかに僕はそれを言うのを隠していたかもしれない。それも幸せの一部だと言えな

くはない。マネキンをたくさん殺すこと、時間がそのうち迫ってきて、僕はそれとの競争に追い立てられること、もしかすると狂想曲のようになること……なんとなく僕はそれを期待し、修羅を漠然と感じていることが、Mにはわかっているのだった。

君にはかなわないな。そうだよ。楽しいね。

《ほら、見なさい》

でも、僕は別なものも感じているんだよ。それは何だろう。恐怖かな、どこから大きく押し付けてくるような気味悪さかな。何かこれももっと広い世界に繋がっていて、もう決して避けられない全体の状況を象徴している気がするんだよ。もっともつと悪化していくような不安を感じているんだ。だから僕は、幸せ？ と聞かれて、一方ではそうかもしれないけど、もう一方では単純に領けない、違和感を覚えたんだ。

《それはたしかに逃れられないわ。この方向は深刻なの。でもそんなことはいまあなたには直接関係ないでしょ。あなたはいまこれをやるしかない。これをとにかくやり終えるしかないのよ》

君はもっと何かを知っているみたいじゃないか。

《そうね。知っているとも言えるし、知っていないとも言えるわ》

君は僕をからかっているんだ。ある意味で僕をいじめているんだ。僕は汗をかいたり、お腹がすいたり、トイレに行って排尿したりする。それと同じで、僕は幸福を覚える。幸福も生きていくものの一つの生理だ。しかし君たちにはそれはない。それを持ち出して、僕を吊るし上げているんだ。

《それがいいとは言えないわね。でも、私が言いたいのは、もっと大きなパワーが必要になるということよ。この仕事を終えるためには。「幸せ」も「楽しみ」以外にも、もっとたくさんのこととを動員しなければ、この仕事を終えることはできないの。それをわかってほしいわ。わたしだってあなたに敵意を覚えているわ。自分でそうしてと言ったにしろ、私はあなたの手でバラバラにされたんだし、仲間がこんなに殺され続けている。でも信じてほしいのはそれ以上にあなたを助けたいし、あなたにこの世界を理解してほしい。矛盾しているけど、この仕事をやり切ることが、もっとこの世界を理解し、見ることになるのよ》

君を信じるしかないってことか。

《そうしてほしいわ。狂ってしまったてはおしまいだから》

僕の目の前に、黒いマネキンが立っていた。それは黒人にも見えたし、ただ色が黒にしてあるというだけなのかもしれない。体はすごく大きい。アメリカのマネキンかもしれない。筋肉が隆々としていて、アメリカンフットボールの選手のような堂々とした体格だった。それは僕を見下ろすように立っている。威圧感があった。僕はまた道具に飽きていたので、斧を大鉦に変えて、それに向かい合った。その威圧感、僕を跳ね除けようとしているようだった。唇に少し笑みが漏れている。自信たっぷりだった。

《気狂いめ。おれを殺すのか》と彼は言った。

僕はそれに火を点けられ、大鉦を両手で振りかぶって一気にその頭に振り下ろした。それは碎け散って、胸の真中まで切り通して、止まった。そしてそれは引いても押しても動かなくなっ

しまった。僕は道具を斧に変え、その溝をめぐけてまた斜めに振り下ろした。ちょうど斜はすに肩から胸に行き、大鉦の溝に合致した。僕はまた斧を真横に振り入れて、大鉦のところへ合うようにした。胴体の四分の一が落ちた。それは僕にのしかかりながら、倒れて、脚がまた二つに折れた。《見てろよ。おまえもいつか同じ目に合わせてやる》

Mが言った。

《彼はアメリカンフットボールの花形選手だったわ。でも八百長をして、麻薬に溺れたの。注射器の跡がいっぱいあるのよ。最後はボロボロになったの》

その後ろには、麻薬患者がいっぱい連なっている。頑強な肉体を誇示しているような大きな体が、ずつとろに続いている。それは僕に敵意をあらさまにぶつけてくる。

麻薬なんか、やるほうが悪いんだよ。自業自得じゃないか。

《エイズの恐怖がおまえにわかるか》

それは僕を取り囲み、のしかかって袋叩きにしてきそうだった。僕は戦う。僕は鉦をがむしやらに振り回す。首といわず、胸といわず、ガシヤーン、ガシヤーンとそのたびにけたたましい音がする。黒人たちのマネキンは続けざまに倒れる。するとまたその奥に、のっぽの白人のマネキンがずっと続いているのだった。その一群のマネキンも僕を取り囲み、二重にも三重にも僕を巻いて、ほんとうは何も抵抗なんかできないのに、まるで集団自殺したいみたいに、僕の殺意をかき立てようと、圧力をかけてくるのだった。

### Cambodia 3 コンポントム

我々の仲間、道の先々で、私たちの班よりもっと過激なことをしていました。工場の入口で中年の男を両手両足を大の字にしてそれぞれに釘を打ち付けて磔はりつけにしていたり、病院の患者たちを追い立てて、リングル注射をやったまま歩かせていたりしました。もちろん患者たちはすぐに体力が尽きて、死んでしまいました。またちやうど赤ん坊が生まれようとするところを追い出して、道端で赤ん坊を産み、そのまま母子で息絶えている死体もありました。ヘソの緒も切られていませんでした。

不平を言う者が当初は大勢いました。「どうして車を使わせてくれないんだ」とか、「食料はどうなっているんだ」とか、威勢よくいう若者たちもいました。彼らはその場で撃ち殺されるか、少し横道へそれて、木陰などでまとめて殺されました。長髪の若者たちも、反抗的だったため、七人いっしょにみんなの前で撃ち殺されました。また途中で、腕時計や宝石、ボールペンや、懐中電灯や、そうしたものを持っている者はみな取り上げられました。それに応じない者は、即座に射殺されました。

途中でもどこでも、元政府軍兵士かそれに関与していた者も判明しだい処刑されました。

その日の夕、セメント工場で泊まることになりましたが、そこは臭いが強く、みんな不安がりました。しかし、いまさら変更することもできないので、そこへ強引に泊まらせました。幹部たち、オンカーは、むしろそこに意図的に泊まらせたのだと思います。恐怖心を煽るつもりだったのでしょうか。

セメントの炉に、たくさんの元政府軍兵士の死体が詰め込まれていました。それを処理しないままに、ほったらかしにしておいたので、腐臭がぶんぶん立ち込めていました。脱走しようとする者は撃ち殺し、強引にそこへ野宿させました。

翌朝、司令部から検問官が来て、全員をそこで調べました。出身はどこか、年はいくつか、持ち物は何を持っているかなどをメモしていきました。金銀宝石はすべて供出しなければならぬ、旧政府の貨幣はすべて使えなくなるので置いていくようになど、指示されました。たかさんの貴金属が集まり、そして紙幣が山のように積まれました。

途中で、「一部の者はブノンペンに戻ってもよいことになった。技術者、医者、教育関係者、元政府軍兵士は、ブノンペンのインフラ・治安を回復するために戻る。元そういう者は名乗り出るように」という通達が入りました。

何人かが名乗りを上げました。「命は保証される。新しい都市建設に協力をしてほしい」と付け加えられました。それから名乗り出る者が急に多くなり、二、三百人になりました。高校<sup>リセ</sup>の先生、医師、元政府軍兵士もずいぶんな数になりました。なかでもいちばん多かったのが元政府軍兵士です。

彼らはトラックに載せられ、ここまで来た道をブノンペンへ戻っていきました。

しかし、実際に必要だったのは、ブノンペンの水道や電気やガスの復旧で、それ以外の技術者は、そのときは求められていませんでした。電気技師も必要だったと思いますが、そのことについては知りません。ただ、それ以外の人間は、すべて処分されました。特に元政府軍兵士は、厳しく処断され、各方面から同じ方法で騙して、網に引っかかった者を一カ所に集めて処刑していました。それは全体としては一万人以上になったと聞いています。

コンポントムで、我々はさらに国道からそれ、奥の村へ入っていきました。新人民たちは、道中で、すでに自活の方法を少しずつ身につけていました。米を付近の村人から買い、それで自炊をします。おかずは自分たちでそれぞれ用意しなければなりません。最初は缶詰などを切り開いていましたが、それもなくなると、村人から鶏を買ったり、バナナや果物を買ったりしていました。村が近くになると、野草を採ったり、また川魚を捕ったり、またもったりしながら飢えを凌いでいきました。最初は紙幣を使いましたが、私たちが言ったとおりだんだん紙幣では交換できなくなりました。農民たちはボールペンや衣類やバッグなど物々交換を要求していききました。それは我々の基地の村では、当初からそうで、貨幣は通用せず、だいたい支給品か物々交換かで物のやりとりが行なわれていたからです。

新人民はしだいに食料に対する飢えから、自分たちで犬や野ネズミを捕って食べたり、ナマズ

やへびやマンガースを捕って食べたりするようになりました。トツケという大型ヤモリも食べたりできるようにしました。また簡単な布袋など自分たちで作るようになりました。

その間に、弱い都市住民は、下痢をしたり、体が衰弱したりして、どんどん死んでいきました。うまいものばかり食べていた人間、贅沢にふけていた人間、知識の弄びや飲酒や歌踊りの快樂にうつつをぬかしていた者ほど早く体が衰弱し、落伍していきました。我々はそうなることを願っていました。弱い新人民は淘汰されなければなりません。弱い者は結局役立たずで、生産ができない。強い人間だけが我々がめざす国家の建設に奉仕することができる。強い者だけが残ってほしい。最終的に国民は半分になってもいい、残った優秀な人間が、国家の真の人民となり、力となって、発展させていけばいい、そういう考えでした。

また髪の毛の長い者は、洋風の頹廢文化にかぶれているということで、我々は彼らに厳しくあたりました。反抗的な者はその髪が長いということを理由に処刑された者もいます。それらが浸透してきて、新住民は自分で髪の毛を短く切りました。女性はみなオカッパのような髪になったわけです。

新しい地方の村で、都市住民は農業に従事し、農業生産を基礎にした新国民の生活を始めることになりました。カンボジアの全国は七つの行政地方に分割され、その下に三つの管区があり、その下にさらに三つの郡が置かれました。郡はさらに三つの村に分けられました。村にはサハコ一と呼ばれる農業共同体が三つほど置かれ、その集団労働の生活場所から各労働現場に出て行きました。旧人民の村に、新人民を移住させ、村の労働力を増やして、生産を向上させようとする計画でした。旧人民が新人民を指導します。その指導の下に、農業生産を飛躍的に増大させようとなりました。人口の割合は、旧人民が一に対して、新人民が二というものでした。村は合計で一〇〇〇人ちよつとでした。

私たちが駐屯し、赴任したブン・トマイというその村で、新人民の新しい生活が始まりました。各家を自力で建てるようにさせました。斧や鉞で木を切り、高床を作って、ヤシの葉で屋根を葺くのです。各家は五メートル離れ、距離をとらせました。

我々は組織の力、革命組織の力を強調しました。それは「オンカー」で、オンカーがすべての革命の現在と未来を担っているというものでした。

我々は新人民に旧人民の村長を介して申し渡しました。

- (1) 色のついた衣服を着てはいけない。着衣はすべて黒い色に染めなければならない。
- (2) 土地と生産物はすべてオンカーのものである。個人が勝手に使ったり消費してはならない。
- (3) 牛、豚、ヤギ、鶏など家畜も家禽もすべてオンカーのものである。個人が勝手に使ったり、交換したり、殺したりしてはならない。
- (4) 自分の体以外は何もかもオンカーのものである。自分の子供もオンカーのものである。家族もオンカーのものである。どこへ連れさられても、何のためか知ることがなくとも苦情を言っってはならない。

- (5) 労働時間は午前中は朝四時から十一時まで。午後は十二時から五時までとする。ただし、農繁期は無制限に延長される。
- (6) 食事は一日二回。一週間ごとに米と塩を配給する。
- (7) 古い時代、前の時代は終わった。すべてが新しくなった。新しい体制に自分を適応させるよう、最大の努力をしなければならない。
- (8) 過去のものはずべて捨てなければならない。過去はずべて忘れて、新しい体制に適応しなければならない。
- (9) 通貨は存在しない。貧富の差はない。すべて平等である。
- (10) 男女は自由に恋愛してはいけない。結婚はオンカーの許可がなければならない。
- (11) 苗字は必要ない。家族の名は不要である。だれもがオンカーに所属するからである。

家族というものが意味をなさなくなるということは、新人民にとって驚きだったようです。しかしすでに我々の間では、それが集団生活のあり方として当然になっていました。その方が機能的であり、戦時下の非常体勢では、親子関係よりも機能関係の方が重要だったからです。実際そのほうがよく機能しましたし、我々は元々家族を殺されたり、浮浪者だったところを救われて、集団生活に入ったので、家族というあり方はすでに断ち切られていました。それがむしろ自然なこととして過ぎてきました。革命に参加するということはそういうことでしたから。

サハコーでは苗字は呼ばれず、みな自分の下の名だけで通っていました。それに同志とか、委員とかが付け加えられることはあっても、苗字と自分の名とがいつしよに呼ばれることはありませんでした。何よりもそのことが、家族を断ち切ることを意味していました。

女性は黒い衣服に替えられ、また下はモンペのような作業しやすいズボンに替えられました。歌も禁止され、ただ共産主義とオンカーを賛美する歌だけをみんなで歌うだけでした。

飢えから芋を盗んだり、トウモロコシを盗んだりすると、厳罰に処しました。普通はトウモロコシを盗んだくらいでは、殺されることはないでしょうが、私たちは機械的にそうすることを訓練されていたので、二度繰り返した者は殺しました。

あるとき、私の仲間が一人の新人民を連れてきました。四〇歳くらいのその男は、芋を盗んで、こっそりそれを食べているところを旧人民に見つかり、連行されてきたのです。すでにその犯行は二度目でした。死刑にしようと、その襟首を掴んで引き立てようとしたとき、その男が「リム」と大声で言いました。私の隣にいた兵士を呼んだのです。

「おまえはリムだな。わかるか。おれはおまえの父親だ。ソムットだ」

仲間の兵士も、その男が自分の父親であることがわかったのか、まじまじと彼を見つめました。

「助けてくれ。おまえはおれの息子だ。おれは父親だ。覚えているだろう。父だ」

私は同志に言いました。

「どうする。おまえの父親だと言っているぞ」

彼は、プノンペンで捨てられて、浮浪児になっていました。彼は捨てられたときのことを覚えていて、私にも父親のことを話してくれたことがありました。やさしい父親だったが、家があま

りに貧しくて、借金で首が回らず、子供を育てることができずに、六歳のときお寺の境内に捨てられた、それを近所の未亡人がかわいそうに思っけて引き取って育てたが、その未亡人も彼が一〇歳のとき病死して、あとは引き取り手もなく、街をほっつき回って食べ物を漁るようになった。クメール・ルージュが彼を拾って地方の基地の村へ連れて行き、訓練して育てたということでした。

降って湧いたような話に、少したじろいだ様子でしたが、彼はじっと「父親」という男の顔に見入りました。私も言われてみると彼がその新人民の男とどこか鼻筋や口元や頬の輪郭が似ている気がしました。彼はその顔を見つめ、「わかった」と言いました。

「おまえはおれの父親だ」

彼は大きく頷きながらそう言うと、銃を構えました。彼の頭に向けて発砲しました。

ちやうど目と鼻の境のところから銃弾が入り、それは後ろへ脳漿を飛び散らせました。彼はニヤリと笑って、

「父親はたしかに彼だ。しかしおれには、父親はいない」ときっぱりと言いました。

この事件は、新人民の家族の見方を変えるのに、いい見せしめになり、また芋一つでも盗むと死で報われることになる一つの実例になって、サハコーのよい引き締めになりました。それからほとんど食料を盗むことはなくなりました。もっとあとで、混乱が大きくなったときは逆にどこの村でも増えましたが。

村は明るくなると、自動車のホイールを叩く音が響きます。それが起床の合図で、ほとんど顔も洗わないままみんなで農地に出かけ、田植えをします。一〇メートル四方の広い水田で、一つの水田には五〇人が早苗を植え付けます。それが十一時まで続きます。それから集落に帰って、食事を準備し、昼休み。一時から再開し、夕方五時に終ります。夜は時々集会をして、あとは就寝ですが、みなぐったりして、眠ることだけが楽しみのようでした。

村の北側に山があり、その起伏を利用して、稲作や生活のための貯水ダムを総出で造らせました。高さ一〇メートルの土堤もすべて人力で築き上げました。またそこから少し下りた集落に近いくところにも、池を作りました。作業のあと、水浴もでき、また食器や食物を洗ったり、洗濯もできるようになりました。

食事は、一日二回、昼と夕でした。ミルク缶半分の米とあ少しの塩が、毎週一家族に支給されました。

我々は村の警察として、村の寺院跡を駐屯地として待機し、全体の監視にあたりました。むろん反対者をどんどん処罰し、恐怖を植え付け、命令に服従させようとするものでした。仏像は目障りなので、首を落とし、近くの草むらに捨てました。仏教に関する絵も、意味がないので、すべて消したり、落書きで塗り潰しました。

また盗みや我々への反抗などを密告してくれた者には、鶏を一羽支給するなど褒章を与え、網の目を張り巡らしました。それはかなり効果を上げました。人間は飢えに弱い存在であるというオンカーの教えを我々は忠実に守りました。実際その通りであることに我々はほくそえみ、感心して実行していきました。

我々の仕事は彼らがその村に定着するまでを見届けるのが役目でしたが、比較的早いうちに、彼らは村の共同生活に慣れていきました。

食糧は十分ではなく、彼らはそれを補うために、おかゆにしたり、野草を切り刻んでいっしょに入れたりして食べていました。栄養失調や、それまで働いたことのない重労働の作業のために、体力が落ち、下痢をもよおしたり、栄養失調になったりして少くない者が死んでいきました。またその強制労働に反対し、脱走を試みたり、闇で取引したり、いろいろ画策する人間を我々が摘発し、処刑していきました。

北のダム横の山の裏側に、B52が落とした爆弾の跡があり、それは直径一〇メートルくらいの大きな穴になっていました。不平分子をそこへ連行し、目隠しで座らせて、後頭部に鉄パイプを打ち下ろして、殺していきました。爆弾跡は播鉢状になっているので、埋めやすい利点はありました。処分したのは、その時点ではあまり多くありません。二〇人くらいではなかったでしょうか。衰弱して死んでいった者のほうが多かったと思います。

男女はすべて別々でした。集団の結婚が月に一度行なわれました。選ぶ権利は女の側にはなく、旧人民の男の希望が優先されました。嫌いな男との結婚を余儀なくされた新人民の女もかなり多かったでしょう。中に一人、いやな男との結婚が決まり、脱走を図った女がいました。目の大きな美しい女性でした。それはまるで自分から死を選んだような、だれにもわかる脱走で、みんなの前で村の検問を越えようと走っていったのです。私は逃亡を企てた彼女の背を銃で射抜かざるをえませんでした。もんどり打って転がったその体に、オカッパの髪と黒く染められた衣服が、彼女とは最後まで相容れないものとして地の上に広がっていました。

村の南にある共同墓地には、かなりの人間が埋葬されました。病气やその他の理由で死んだ人間はここに埋められましたが、当初は二〇〇体くらいのものだったと思います。

### ENOLA GAY 3 マリアナ海／硫黄島

#### バンカーク

午前二時五五分。位置、サイパン島北端。気速二一三マイル。真針路三三八度。気温摂氏二二度。硫黄島への距離RV六二二マイル。高度四七〇〇フィート。デインプルズ82号機は北北西、硫黄島へ飛行中。雲はない。星座針路もばっちりだ。ステイポリック、電波応答位置確認してくれ。

#### ステイポリック

レーダー電波からの位置確認はOKだ。バンカークの位置とぴったり照合している。問題ない。ネルソン、通信反応はどうだ。

なんとか上がってよかった。まったくひやひやさせる。四時間前にわざわざ教会へ行つて告解をした甲斐があったもんさ。おれのこれまでの全部の罪を告白し、清めてもらった効能かな。「おれは天国へ行けますか」って言ったら、「行けますよ。戦争から戻って、そのあと善行を積

めば」って言われちゃった。まあ、それでも命があればいい。おれのいつものお守りのスキー帽も効果があったかな。

ネルソン

マイカー ビーコン

無線 標識も、自動方位測定機の周波数補償も、大丈夫だ。ぴったり合っている。敵味方識別

装置 I F F、O K。周波数帯ダイヤル調整 O K。ロラン装置も異常なし。

シューマード

電気系統、機内気圧、異常なし。発電機異常なし。室内気温一八度。良好。

ビーザー

受信機方向探知器、スペクトル分析器、デコーダー解析機、正常に作動。すべて O K。

ひやひやさせるぜ。

ティベッツ

テニアン北管制塔へ。ディンブルズ 82 号は離陸完了。これより高度二四〇〇メートルに上げ、硫黄島へ向かう。

星がきれいだ。雲がない。こんなに晴れている夜はめずらしい。この海の道、夜の道、快晴の道がずっとヒロシマまで続いていてくれればいいが。何か奇妙な道がきている気がする。硫黄島で、スウィーニーのグレートアーティストとマクフォートの 91 号機の、二機の観測機と合流する。さらに太い道になってくれればいい。

キヤロン

上がった、上がった、上がったぜ。これであと六時間後にはヒロシマだ。ヒロシマ、コクラ、ナガサキだが、ヒロシマはたぶん天気だろうという予測だ。このまますすぐヒロシマまで行ってくれ。

ボス、機銃を試射しておきたい。許可を願う。どうぞ。

ティベッツ

許可する。一〇〇〇発のうち五〇発までだ。

キヤロン

了解。五〇発まで。

夜の空に向けて銃をぶつ放す。よし。ほら、大丈夫だ。ちゃんと対空 12・5 mm 機関銃は作動するぞ。音が機内に響く。みんな聞いているな。日本の戦闘機が来たらこれでおれが全部追いついてやる。仕留めてやる。安心してくれ。銃弾が光の帯になって、無数の流れ星のように落ちていく。ずっと向こうへ尾を曳いていく。きれいなもんだ。

試射、完了。

パーソンズ

機体は上がった。第一の関門は突破した。いよいよ私の仕事だ。テニアンが吹っ飛ばないよう配慮した私の主張は、これからの私の仕事を完了させなければ意味をなさない。ジェプソンと二人で、万全を期して、やり遂げる。ティベッツに知らせよう。午前三時だ。

爆弾の組み立てを始めますよ、ティベッツ大佐。  
ティベッツ

OK、大佐。

テニアン北管制塔へ。ジャッジが仕事を始める。

パーソンズ

ジェプソン、爆弾倉へ行くぞ。組み立て開始だ。

ジェプソン

OK。待ってましたよ。

ファイアビー

パーソンズ大佐、私も行っていいですか。

パーソンズ

いいとも。ついて来てくれ。

爆弾倉へはこのもぐらの穴のような通路クルトンネを通って行かなければならない。這って潜り抜けるのは、軍隊へ入りたての頃の訓練を思い出すな。ジェプソンはすぐ後ろから来る。ジェプソンの懐中電灯が前方を照らしてくれる。ありがたい。ファイアビーも続いている。彼もヒロシマへ入るまでは、仕事がない。落とすのは彼だ。爆撃手にこの作業を見てもらっておくことは、二重の意味で有益だ。よく見てもらっておこう。

下へ降りるぞ。爆弾倉だ。気をつける。

フーッ。この「スペシャル」。リトル・ボーイ。今、最後の段階を迎えて私の目の前にある。

この存在感はいつ見ても不気味な迫力がある。前に立つだけで胸を圧してくる。これが今から、日本で爆発するわけか。核分裂による人類史上初めての実戦使用だ。あと六時間で、これが落とされるわけだ。

「スペシャル」は頑丈な掛け金から吊り下げられている。これがやがて解き放たれる。

この長い形、黒光りするこの筒の形、そして四角い尾ひれが、なんとも言えない圧迫感で私の胸を締めつけてくる。太いケーブルだ。科学者たちと現代工業技術の粹だ。この最後の爆発装置をセットするのが、私の仕事だ。私の作業に爆弾爆発の起動のすべてがかかっている。

装填する火薬と、配置する信管はここにある。何度も念を入れて準備をしておいた。抜かりはない。だいじょうぶだ。

ジェプソン、始めるぞ。2号ドライバーを貸してくれ。

ジェプソン

OK。2号ドライバー、どうぞ。

いよいよ、セットだ。これが私たちの最終の仕事だ。これほど緊張することはない。これでこの爆弾に最後の息吹が注がれるわけだ。おや、落書きがしてあるな。まったくしようがないものだ。「くたばれ、ジャップども」か。もう一つある。「ヒロヒトへ 愛を込めて」——だれが書いたのか。馬鹿なやつらだ。しかし、これは一部の兵士たちの偽らざる感情ではあるかもしれない。

いまさら消してもしかたがない。そんな時間はない。このままにするほかないだろう。それよりも、パーソンズを助けて、起爆装置をしつかり装填することだ。

ファイビー

これが「スペシャル」か。この戦争の切り札、ロイヤル・ストレート・フラッシュということだ。この機に積まれている姿は一段と凄みがあるな。これをやつらの頭上に叩き落とすってことだ。数万人が一発で吹っ飛ぶ。ヒロシマは一瞬でおしまいだ。おれが最後の最後にこれを落とすわけだ。最後に手を下すのはこのおれだ。このおれの眼で狙いを定め、このおれの指で投下のボタンを押す。おれの指のタッチで、一挙に数万人が死ぬ、もつとももしれん。あのフィルムがほんとうだとしたら、もつとすごいことになるだろう……おれは槍の穂先にすぎん。そう思わなければやりきれん。ゼウスが地上に振り下ろす怒りの巨大な稲妻の槍だ。戦争という愚行への怒り……人類の殺し合いへの怒り……この「スペシャル」はその怒りの槍で、この飛行機はその穂先なのだ。巨大な愚行を終らせるための怒りの槍だ。おれたちはその穂先になるということだ。戦争を終わりにさせる……そう信じるしかないってことだ。

パーソンズ

この私の一つ一つの動作に、ロスアラモスの科学者たちの眼差しが込められてくる。彼らの研究と努力と、そして人類の最高の科学技術と、そして期待と危険と悲劇とがない交ぜになって、私の手を動かしてくる。私の手であって、私の手ではないようだ。

まず最尾部への火薬の装填だ。これが爆発して、後部のウラン塊を前部のウラン塊に飛ばす。二つが合体すれば臨界を超えて核分裂を起こす。最初の火薬の起爆力を私がここで付与するわけだ。尾部の蓋を取り外す。装甲板、尾栓を取り外す……手順は空で言えるほど暗記した。何度も自分でやった。まちがえることはない。

ジェプソン、3号レンチを貸してくれ。

ありがとう。

尾栓を取り外した。これをゴムの上に置く。そしていよいよ、四個の火薬の装填だ。赤い端尾栓の方へ向けて詰める。四つをそれぞれの位置に。よし、これでいい。

ジェプソン

狭い不自由さ、薄暗い中でのこの張り詰めた作業は、こちらも息苦しくなるほどだ。懐中電灯で、パーソンズが仕事をやりやすいよう手の動きに合わせてその部分を照らす。パーソンズの手は繊細だ。白い皮膚に切り傷やミミズ腫れが走っている。この作業を素手で繰り返してきただことであちこち傷ついている。しかしその作業は的確で、寸分の狂いもない。ファレル将軍がパーソンズの傷だらけの手を見て、「作業に手袋をはめたらどうか」と勧めてくれたが、彼は「けっこうです。感触が重要なので。傷が手触りを覚えているんです」と断った。彼は「スペシャル」の職人だ。感嘆し、敬意を表する。

この爆弾には、これまでのどんな兵器よりも多い安全装置が施されている。それこそタマネギのように、何重もだ。しかしそれでも、もし敵機の銃弾がこの機を貫通してしかも爆弾に達し、いまパーソンズが装填した火薬に引火したら、ウラン塊が合体して連鎖反応が始まるかもしれない

い。確率は低いが十分ありうる。そうなるかならないかは、神のみぞ知るということだ。

ここには伝わってこないし、無線も入らないが、科学者たちが私たちの一挙一動を固唾を飲んで見守っているだろう。パーソンズの手は最初ごくわずかだが、震えていたな。しかし最初だけで、あとはスムーズだ。

ファイバー

火薬が装填された。一つ一つ組立てが実現していく。おれはしかしそのたびに、一步一步ピッチャーズ・マウンドに近づいていく気がする。何万という観衆じゃない。そんなもんじゃない。何百万、何千万、いや何億という人間が観ている、地球という巨大スタジアムのマウンドに否応なく立たされていく感じだ。そこへ追い立てられていく。

ときどきパーソンズのレンチの音が、周囲の金属にぶつかって、カコーン、カコーンと響く。小さい音だが、妙に深く響く。この金属の響きは、何かを呼んでいるように聞こえるな。それはエンジンの音を切り裂いて、はるか下へ降りていくようだ。地上へ届くばかりじゃない、もつとずつと底へ、大地の奥底へ届くような響きだな。地底の悪魔を、タイタンを呼び出しているようだ。

パーソンズ

火薬装填。心臓はまもなく動き出す。トリニティ・サイトの最初の原爆実験の夜明け前の闇が蘇ってくる。あのとときのなんとも言えない緊張感は、地獄を地上に出現させるような重苦しさだった。今もそれに似ている。しかし今こそが本番だ。現実人間が住んでいる都市に落とされる。しかも直接この私自身の手で、爆弾は鼓動し始める。私の心臓も大きくドクンドクンと波打っている。それがこの爆弾に移っていくようだ。

アラモゴード、トリニティ・サイト。グラウンド・ゼロ。プルトニウム爆弾は地上五〇メートルの鉄塔の上に置かれ、そこがゼロ地点だった。雨と雷鳴と稲妻の闇の中で、準備が続けられた。雷が轟き、地を圧していた。空は荒れ狂っていた。その中でたくさん人間が必死で準備をしていた。科学者だけで三〇〇人を超えていた。あの緊張と重圧もすごいものだった。ある科学者はそれに耐え切れず「神よ。我に抑制を与えたまえ」と叫び出したほどだ。延長に延長を重ねて四時の爆発予定が五時二九分になった。四時に計画されたのは、夜のほうが爆発の閃光をより鮮明に確認できるからだ。それにその時間がいちばん機密保持に適している。ほとんどの人間が眠っている時間だからだ。

グラウンド・ゼロがゼロ時間アワー・ゼロといっしょに絞られていった。……五、四、三、二、一……まだ

真っ暗な中に、突然すさまじい光がひろがった。あの光は忘れられるものじゃない。地上の荒野のすべてが、真昼の光よりもつと何倍も強い光で照らし出された。近くの丘や周囲の山々の峰みね、稜線が信じられない美しさと明るさで浮かび上がった。それまで地上のだれもが見たことのない巨大な火の球が空に昇っていた。太陽を何百個も集めたようなそれは、強烈な光の塊りだった。純白でもあり、青でもあり、紫でもあり、緑でもあり、同時にオレンジ色にも、藍色にも見

えた。全宇宙が光に解放されたようだった。

あの光景のあまりのすさまじさに、見ていたものは皆その場に呆然と立ちつくしていた。

それから五〇秒遅れてドーンと爆風が押し寄せた。一〇km以上離れているのに、伏せていない者、壕にいなかった者はよろけて転んだ。爆風はもう一度逆方向から押し寄せた。爆発で生じた巨大な真空に、また周囲から空気が押し寄せて瞬時に埋められるためだった。あとから、大地を揺らし鳴らすように耳をつんざく轟音が響いてきた。地底からの悪魔の咆哮が渦巻いてきた。

すでに衰えた火の球の代わりに、その直下から周囲にギラギラ光を放ちながら、奇妙な濃い雲がムクムクと湧き起こった。水平方向に広がる地上の雲を集めて垂直方向の力を立たせ、それはどす黒い色と灰色とを交え滾らせつつ空へ巻き昇っていった。急速に膨張して、山の高さを越え、一〇〇〇メートル、二〇〇〇メートル、三〇〇〇メートルと上昇し、不気味に広がる空の雷雲を照らし出しつつ、キノコのような雲が一万メートルに達した。

オッペンハイマーはあのととき、ヒンズーの聖典「今、我が姿は死の力となれり。世界の破壊者となれり」と口走っていたな。若い科学者の連中は、宇宙の力を解放した現実を前に、狂ったように喜んで、踊り出した。原始人が最初の火を手に入れて喜び踊ったように、彼らも宇宙を解放する光に接し、圧倒されて、踊り狂ったな……確かに、あの前と後とで世界はちがってしまった。

グローブス將軍とファレル將軍は言った。

「これで、戦争は終りだな」

あの光は、天地創造の世界を目の前に現したものだだった。あのすさまじい火の球がもう一度現れる。

あのととき、近くにいた家畜はすべて蒸発してしまった。あの力の真下にいる生き物はすべて消える。

今回は、人間の上に落とされる……都市に。あの都市の無数の人間はどうなるか……

それをもたらず物がある中にある。私が触れ、装填しているこの「リトル・ボーイ」の中にある。私がそれをする。爆発可能にする。

装填した、装填した、装填した……これで装填完了だ。

ジェプソン、3号レンチをもう一度だ。

尾栓をしっかりはめて、がっちり締め付ける。一六回。よし。あとは点火線を取り付けなければならない。

ジェプソン

点火線が取り付け完了。これで、この爆弾は活性化された。生き始めた。フランケンシュタインの心臓は動き始めた。あとは、目を覚まさせるための最後の安全装置を起動装置に変えるだけだ。

お疲れさま、パーソンズ。

パーソンズ

ありがとう、ジェプソン。ここまで万全だ。操縦室へ戻ろう。ファイアビーも。

ファイアビー

OK。パーソンズ大佐。いよいよ私の仕事です。「スペシャル」の心臓の音が聞こえ始めましたよ。

パーソンズ

三時一五分。思ったより早かった。

ティベッツ大佐。爆弾準備完了しました。

ティベッツ

了解。順調だ。

もう私の無線はテニアンには届かない。傍受を避けて、テニアンへの報告はもう省略する。テニアンもそれはわかっているはずだ。打ち合わせどおりだから。

パーソンズ

空に星が瞬いている。宇宙は星の宴だ。壮麗な星の広道がヒロシマへ続いているようだ。雲は低くにしかない。天候は良好だ。ヒロシマの上空もこのように晴れているか……

はるか前方に気象偵察機が三機、一時間前に飛び立った飛行機がヒロシマとコクラとナガサキの上空の偵察に行っている。その三機の最終報告で、どの都市に落とすか決定される。第一目標はヒロシマだ。硫黄島を過ぎてしばらくしたら、その報告が来るだろう。晴れてくれればいい。三都市が晴れていない場合は、落とさずにそのまま引き返すことになる。

この爆弾は、レーダー装置では投下しない。あくまで目視で、手動だ。それは絶対条件だ。私は、ロスアラモスの科学者たちの見解と主張を代弁して、そして軍の戦略を代表して、この爆弾の投下条件を「目視と手動でなければならぬ」と主張した。原爆担当グローブズとも一致した意見だった。スチムソン陸軍長官、マーシャル陸軍参謀総長、ブッシュ科学研究開発局長、コナント博士たちとの最高政策会議でも、それを述べさせてもらった。目視のほうが正確だということ、それも確かに大きな理由だが、それ以上に五〇〇メートル上空で爆発させる場合、天候が爆発効果に大きな影響を与えるからだ。

雲は細かな水粒の集合だ。この水粒が爆発効果を大いに減じる。雨が降っている場合にはなおさらだ。雨と雲は、五〇〇メートル上空での爆発に一つのクッションになって、爆発力を和らげてしまう。爆発を雨滴が吸収するからだ。湿度もかなり影響する。地上の豪雨あるいは濃霧は、爆風力を五〇%ほど低下させる。さらにこの爆弾の第二の破壊力は放射線だ。爆発とともにアルファ線、ガンマ線、ベータ線が地上に降り注いで、大きな殺傷力を発揮する。それは未知の破壊力だが、雨がそれらの放射線を吸収し、遮蔽効果を生む。放射能が減じる。科学者の一部、また軍は、最大効果を期待しているし、その実験としての結果を欲している。アラモゴードの爆発実験は、雨天だった。だからそのデータはある。彼らが欲しているのは、晴天での最大効果としての爆発データだ。また雲の中で、あるいは雲に近く爆発した場合、その雲が多量の放射能を含むことになる。それがどのように移動して他の地区に放射能の雨を降らせるか、きつと広範になる。放射能の散らばりがひじょうに複雑になり、データの収集はあまりにも困難になる。さらに晴天では、爆発のすさまじさがいっそう視覚的に広がり、敵に与える心理的なダメージも大きい。

だから、どうしても「晴れ」でなければならぬのだ。「目視と手動爆撃」でなければならぬ。こんなことは「核」ということを伏せているこの機のみんなに言ってもわからないだろう。テイベツツもどれくらい理解しているかわからない。余計な知識を強要するだけだ。黙っているほうがいい。

## ジエブソン

みんなは私のことを冷静だといい、冷たいと言うが、私はただ客観的にものを見たいだけだ。パーソンの原子物理学に対する知識と広範な理解力、ロスアラモスの科学者たちをマンハッタン計画首脳部と結び付ける統合力と技術知識はこの計画に参加する海軍の立場を代表するだけの力を示しているし、驚嘆に値するが、私も陸軍を代表する立場として、その責務を果たせるよう、細心にして冷静、客観的なだけだ。私はグローブズと同じに鋼鉄のような冷徹さを表面的には持っているが、内心はちがっている。グローブズだって、チョコレートには目がなく、秘密金庫にチョコレートを一杯に詰め込んでいたり、キャンデーをいつも持っていて、ストレスを感じるとすぐそれを頬張ることで紛らわせていることを知っている。大きな仕事は、それとバランスを取るための生身の人間のメカニズムが必要だ。私の生身はみんなが思っているより傷つきやすいものだ。ただそれを鎧うしかなく、作り上げてきたその鎧がひじょうに強固なものだというだけのことだ。私の生身は産毛のように繊細でやわらかなものだ。ウサギの毛のように。

私にはたくさんの物理科学者の友人がいる。私も大学で原子物理学を学んだ。だからこの爆弾の力の質を知っている。それを人間の居住区に落とすことがどういう結果を生むことか想像できる。特に放射線はこれまでの爆弾にはない、未知の殺傷力だ。放射能にさらされた人間の生身は、凄惨になる。苦しんで死ぬし、助かっても後遺症が長く残る。その土地自身も、放射能を浴びて、土塊やコンクリートの残留物からの二次被曝も、たくさんの人間を殺すだろう。その長期の被害と苦しみは一つの地獄だ。だから私の本来的な希望としてはこの爆弾を都市には落とさないでほしいと思う。

むろん私は軍人だ。合衆国陸軍大佐であり、日本との戦争を行なう者である以上、命令を忠実に実行しなければならぬ。しかし一方で、私は科学者たちの懸念と希望とを理解できる。だれよりも、科学者たち自身が、この破壊力の真の力を知っている。そして彼らはこれが原子の力を解放するものであり、人間の未来をどう変えていくか、具体的な展望を持っている。彼らは、この爆弾の出現が人類の歴史を根本から変えてしまうことをよく知っている。これをどう使い、どう利用するかで、繁栄と同時に滅亡ももたらすことを見通している。また科学が人間を滅亡させる結果になることを危惧している。彼らの展望は正しいか……私は正しいと思う。

フランクたちは、みんなで署名運動まで展開して、この爆弾を都市に無予告で奇襲投下することを避けさせようとした。マンハッタン計画の首脳たち、軍中枢にも訴えた。彼らが主張したことは、この爆弾の威力を事前に敵の首脳に見せれば、戦争や都市への直接投下を避けられるというものだ。この爆弾の威力の前に、戦闘を持続する意志は粉碎されてしまうだろう。そこに期待すべきだというのが、彼らの主張だ。そのために、日本の首脳を無人島に招いて、そこで爆発実験をして見せる、それが不可能なら、東京湾で示威実験をすべきだ、無警告の都市投下だけは避

けねばならない、と彼らは強く訴えた。その道はあったかもしれない。その提言はいまでも私の胸に強く残っている。軍はそれを却下し、封殺した。運命と言えれば言える。しかし、科学者たちは正しい。私にはそう思える。

フランクやフェルミは私にも警告した。その話は我々の恐るべき未来を示していた。

この爆弾は、すでにその原理が明らかになり、アメリカが生み出したという現実がある以上、他の国がそれを実現させることは困難ではない。ソ連や他の国がこれを開発するのに、そう時間がかからない。これはもともとナチスとの開発競争から生まれたものだ。フランクやフェルミが言うのには、アメリカの優先は長くて五年だろうということだった。五年経つと他の国も持つようになる。開発競争は避けられない。各国が保有を進める。これらを使用した場合、この爆弾による破壊戦争は、史上最悪のものになる。これらの爆弾攻撃に対してアメリカの諸都市はまったく無防備だ。およそ防ぎようがないものだ。アメリカの主要都市は一〇〇個の爆弾で全滅する。しかもこの爆弾の効果は奇襲が最も効果がある。予告なしの奇襲攻撃が絶対有利で、極端な場合には合衆国は一、二日で全滅する。航空機ばかりでなく、ドイツがイギリスに使用したV2ロケットのようなものを使えば、もっと短時間に、しかも抵抗に遭わずに実現できる。

さらに大きな脅威は、小国でもこれを保持し、戦略を立てれば、合衆国のような強大な国に対しても、壊滅の脅威をあたえることができるということだ。もし各国が開発競争に走れば、最悪になる。多数の国がこの爆弾を持ち、統制がきかなくなつた状態はきわめて危険だ。人類は滅亡の悪夢に日夜苛まれることになるだろう。日本との戦争以上の災禍がもたらされることになる。ゲリラのような小グループの存在でさえ、これを持ってば世界を破滅に追いやることができる。

だから、核爆弾による滅亡の危険を回避することが、人間の最大の課題になる。そのために、世界の原子力の管理体制が何よりも重要になる。核爆弾の自由開発、自由生産を抑制することが、世界の課題となるということだ。

私はフランクたちの主張がよく理解できる。世界の核管理機構の創設が何より重要だということだ。

それを実現するためには、その最初の爆弾の使い方が重要になる。無警告で、都市を奇襲攻撃して、夥しい人間を殺戮した国の提言を、いったいどの国が信用するだろう。口先と行動との乖離が、この無差別爆弾の不安を大きくする。その不安が、不安を呼んで、結局は人類を破滅させる。

だから、フランクたちは空想的に思われる無人島での実験を提言したのだ。最悪でも、東京湾で、示威爆発をさせることを。

「最初の使い方がきわめて重要だ」とフランクは真剣だった。「その使い方であとの状況が決まってしまう」と。

アメリカ合衆国が世界に先駆けてこの爆弾を製造し、使用するそこに、合衆国一国だけに留められない、人類全体への責任が生じる。だからこそその後の世界のために、最初の使い方にも責任が生じる。無差別奇襲攻撃はしてはならない。それは他の有効な手段に代わらねばならない。アメリカの汚名は、同時に歴史を歪める。彼らは血の出る思いで主張した。しかし受け入れられ

なかった。軍が握り潰した。これが人類に呪いのかぶさってこなければいいが。それが未来を閉ざしてしまうのか……

フランクは真顔で私に言った。

「空想的に聞こえるかもしれないが、この兵器は、破壊力の大きさにおいてまったく新しい何ものかだ。我々が滅亡を避け、原子力の恩恵を享受したければ、我々自身がまったく新しい想像力に富んだ方法を用いなければならない」と。

「四時一分だ。テイベツツより、随伴機へ。観測機グレート・アーチスト機、および91号機へ。スリーニー、マークワード、応答せよ」

「こちらグレート・アーチスト。スウィーニーより。こちら異常なし。三マイルあとよりぴったりに付いていつている。異常なし」

「こちら91号機。マークワードよりテイベツツ大佐へ。こちら異常なし。グレート・アーチスト号と並行して飛行中」

「了解。そのままだ。硫黄島上空で編隊飛行に入る」

「こちらバンカーク。航法士よりテイベツツ大佐へ。ただいま午前四時二〇分。風速、偏流とも大きな変化なし。飛行時速三六九キロ。硫黄島上空到達時間は午前五時五二分の予定。どうぞ」

「こちらテイベツツ。OK、バンカーク。予定通りだ。了解。天気予報ではヒロシマは晴れだ。イーザリーの先行機がヒロシマから天候を報告してくる。しかし、イーザリーの報告のいかんにかかわらず、ヒロシマへとにかく飛ぶ。この目で見て自分で判断するためだ。バンカーク、そのつもりでいてくれ」

「了解。ヒロシマは見つけやすい目標です」

「フィアビー。ヒロシマの地図をしっかりと見ておいてくれ。目標のTの橋だ」

「OK。ヒロシマの街の形は、すっかり頭に叩き込んである。目を閉じていても見える。まかせてくれ」

「ルイス、操縦をまかせろ。三〇分ほど代わってくれ」

「OK。ボス」

「ネルソン、無線通信の方は異常ないか」

「異常ありません。万事良好です、大佐」

「おまえは本が好きだな。何を持ち込んでるんだ」

「フォークナーの『サンクチュアリ』と、ダンテの『神曲』と、聖書です」

「ずいぶん持ち込んだな。私にはわからんが、信頼しているぞ。立派に任務を果たしてくれ」

「了解です。ボス」

「キャロン、いまから後部へ行くぞ」

「どうぞ、ボス。頭をぶつけないように」

『スペシャル』の上を通過して……カチカチ秒針が鳴っているような気がするな。『怪物スペシャル』はもう生きている」

「ボス、狭いところへようこそ。ビーターはまだ眠っています」

「好きにさせておけ。そのときは、電波で爆弾を叩き起こすのはヤツの仕事だ。ステイボリック、リーダー反応はどうだ」

「良好です。まったく異常ありません」

「みんな、しっかりやってくれ。このままでいい。万事順調だ。それぞれの任務にベストをつくせ。シューマード、機内の状態を怠りなくチェックしておけよ。頼むぞ。機銃砲塔に登るのはまだだ。いぶ先だ。爆発のとき、ゴーグルをかけるのを忘れるな」

「了解です。ボス。一つだけ質問があります」

「何だ。言ってみろ」

「きのうのあの映像は本物なんですか。『キング・コング』みたいなつくりもの映画じゃないんですか」

「本物だ」

ルイス

おれは不思議なんだ。どうしてまっすぐ東京へ行かないんだろう。東京が日本の中枢だ。国会も皇居もある。この中枢を叩き潰してしまうほうが手取り早いってもんだ。この爆弾がとほもないもので、一発で一つの都市を壊滅させてしまうものなら、東京をやればそれで戦争は終りじゃないか。ふん、このまま、東京へ向かいたいもんだ。おれたちが戦争を終らせることになれば、これまで馬鹿にされたこともチャラだ。一発で、東京を消しちゃって、「はい、終り」ってことだ。ル・メイのB 29 爆撃機部隊のやつらが何百機もかかってできなかったことを、一発で、だ。それでおれたちも鼻が高くなるってもんだ。へん、ざまあみろってな。

テイベッツ

ルイス、ありがとう。交代だ。自動操縦装置を外すぞ。

ルイス

了解、ボス。代わります。

テイベッツ

席へ戻るとほっとする。おれにはここのほうが居心地がいい。

星空がみごとにひろがっているな。あまりにも星々がまたたきを繰り返している、どれがどの星かわからないくらいだが、北極星と、北斗七星は見える。北斗七星はかなり巡った。壮大で深遠な宇宙だ。おれたちはこの星のただ中に、突っ込んでいくようだ。このまま宇宙へ消えていく。そんなこともあればいいのかもしれない……

右手の東の空に半月が輝いている。子供の頃、母と見た夜明け前の美しい月を思い出すな。今は ENOLA GAY に乗って、母親といっしょにいる。あのときと今日とが繋がっているようだ。あの

ときおれはもう今日の日を予感していたのかな……。前方の星空には、高いところに巻雲が少しあるだけで、あとはいつさいが星の輝きだ。深い紺色の闇の中に、どこまでも果てしない星々の光が続いている。銀河も、星雲も、おれたちを取り巻いて巡っている。

この闇と星空の中から、光が大きく昇ってくる。それは確かに一つの軌跡だ。太陽の光がまもなく昇ってくる。すべての星の輝きを従えて、とほうもない光が天空を圧する。

そうら、東から夜が白くなってきたぞ。うつとりするような美しさだ。光が射してきた。少しずつ、そして急速に。いつさいを白く染めてくる。オレンジの光があとから昇ってくる。薄紅の色が天空に広がる。荘厳だ。宇宙は明ける。絶対の輝きにおれたちは満たされる。おれの体、おれたちの体の隅々まで、その光は射し込んでくる。水平線の彼方から、オレンジの光がこの

グリーンハウス  
操縦室に一直線に射し込んでくる。ルイスの頬も紅く染められている。この煌き、このまぶしさ。

太陽の光。こいつは絶対だ。宇宙に光が満ちる。強大な力だ。

そしてこの太陽に繋がる力を、おれたちはこれから人を殺すために使うわけだ。

みんな。もう飛び立ってしまったから言ってもいいだろう。パーソンズとジェプソンが最後の点火装置の配線を取り付ける。そうしたら、この爆弾はいつでも爆発可能だ。これは原子の力で爆発する、途方もない爆弾だ。我々は世界最初の原子爆弾を落として行くのだ。

ルイス

ヒュー。やってやろうぜ。

このまま東京へ行っちゃみたいもんだ。ほんとうに、あそこに書かれていたように、あいつに「愛をこめて」ってことになるように。

バンカーク

わかってはいたけど、あらためて言われると、奮い立つね。ヒュー。

パーソンズ

太陽の光、この地球を照らす壮大な光。我々は太陽の光の中に突入する。このすさまじい光のめぐりの中に迎えられることが、朝なのだ。我々はここに太陽のとほうもないエネルギーを感じる。宇宙の大きさと深さを感じる。

人間は太陽の永遠の燃焼の原理を解き明かそうとしている。もうそれに手が触れている。そしてたぶん、それを生み出すことさえできるのだ。この原子爆弾の誕生によって。我々はすでにそういう時代にいるのだ。

太陽の、水素とヘリウムの循環爆発燃焼のサイクル——熱核融合は、四億度以上の熱と、宇宙のとほうもない圧力の下で起こるものだ。この熱と圧力は、現在の地球の環境の中では起こりえない。しかしたった一つだけ、その環境を地球上に作り出すことができる。それがこの原子爆弾だ。この爆弾だけが、四億度以上の熱状態と高圧力状態を地球上に生み出すことができる。これが太陽のとほうもない燃焼の点火装置になるわけだ。ウランやプルトニウムの爆発の熱と力のエネルギーを使えば、もっと規模の大きい、太陽の燃焼がこの地上で可能になる。

テラーがそのアイデアを持ち、開発にもう取り組んでいる。もし実現したらウラン爆弾の何百

倍、何千倍にもなる。重水素一二キログラムは一〇〇万トン以上のTNT火薬と同じだ。

七月の爆発実験に使われたプルトニウム爆弾は爆縮型だった。この爆縮型というやつは、火薬を外側に配置して、ウラン塊を一気に中心に集めて、臨界状態にさせ、核爆発を起こさせるシステムだ。私は彼らが固執するこの爆縮型が、もう一つの可能性を持っていると思う。それは内部の圧力をさらに高めるためだ。いまENOLA GAYに積んである銃型<sup>ガン</sup>の原爆より、中心に集まる圧力が高まる。それは、熱核融合の可能性をより高める。その中に重水を置いておけば、それに点火するというわけだ。爆縮型という型そのものが、超爆弾につながるものなのだ。超爆弾は可能かもしれない。

爆縮型爆弾によって、熱核融合の扉が開かれる。太陽の燃焼が起こる。

我々はこれを落とす。これが爆発する。

我々は新しいエネルギーの時代に突入するのだ。

バンカー

硫黄島が見えた。五時五一分三〇秒だ。

テイベツ

播鉢山が見える。旋回。二機を待つ。

グレートアーチスト号が近づいてくる。後ろから91号機もだ。よし。三機揃うぞ。

逆V字編隊を組め。

硫黄島通信センターへ。硫黄島管制塔へ。こちらデインブルズ。無事合流。予定通りだ。ここから高度を上げる。九二〇〇フィート。

六時五分。

伊豆諸島へ北進。途中から針路は四国だ。

#### 東京 4 スクラップタワー

黒人の巨人のマネキンたちに取り囲まれ、僕は押し潰されそうになるのを、ほとんど大立ち回りで前後左右切り倒して切り抜けた。殺されそうな感覚で必死になって両手で斧と長銃を振り回したおかげで、結果的に八体を三〇秒かからずなぎ倒していた。気がつけばこれは新しい感覚だった。たくさんのものを短時間で処理する感覚——これは確かに目的に向かって大きく前進する達成感を醸し出してくる。そしてたくさんのものを一度に破壊する快感を湧かせてくるものだった。

頭だけをどんだん並べ揃えていく。脚だけを立てかけていく。手を薪のように重ねていく。僕はこの図を、何かの映像で見たような気がするが、どこでだったか、思い出せない。

フットボールの選手たちのような白人のマネキンの一団が次に僕の前に現れたものの、僕はさつきと同じ要領で立ち回りを繰り返しながら、もっと手際よく処理した。

頭を横から切り通したとき、耳がもげて、僕の胸に当たった。耳にこだわる人間なら、耳ばかり集めて並べていくだろう。僕はふと、昔秀吉が朝鮮に出兵したとき、朝鮮兵の耳を切り取らせ、塩漬けにして日本に送ってその数によって論功行賞を行なったことを思い出した。耳塚という話を聞いたことがある。耳だけここに並べたら、マネキンの耳塚ができるってわけだと僕は思った。《うまくなったじゃない》とMが言った。

ああ、だんだんスピードが出てきたな。せつぱつまった感じでやるといいんだな。やっぱりこれも殺し合いなんだ。その感覚がだいじなんだな。

《そうよ。わかってきたじゃない》

ふん、まだ何か言いたそうじゃないか。

《もっと深いよ。エイズだけじゃないわ。鳥インフルエンザだってあるし、もっと作られた菌もあるのよ。それにもっといろんな方向に広がっているのよ》

それをさらに聞こうとしたとき、座った姿のマネキンたちがたくさん重なって目の前に現れた。色そのものがカーキ色で、なんとなく表情が暗く、顔の形もみな同じだった。

なんだ、このマネキンは。

《当ててごらんさいよ》

わからないな。なんでみんな座ってるんだ。それに、あちこち痛んでいる。もう壊れているもある。脚がもう折れているのもあるじゃないか。

《ダメーなのよ》

ダメー？ 一〇〇体くらい揃っているじゃないか。

《彼らは、車に乗せられるのよ。車を走らせて壁に激突させるの。交通事故の実験ダメーよ》  
それでもうちこち壊れているのか。

甲高い声でした。Mとはまったく異質の、テープレコーダーからのような人工的な声だ。

《時速一二〇キロで壁に激突するのよ》

《手も足も吹っ飛ばわ》

だれがどこから声を発しているのかわからない。それは口々に苦しさを込めて呟いているようにも、まただれかれとなく語りかけているようににも聞こえる。

《対向車との正面衝突を想定してやるときは、倍になるのよ。二四〇キロよ》

《あれはもう木っ端微塵だね》

《自分たちがやればいいのよ》

《いくらダメーがやったって、本人たちはそんな自覚がないんだから、犠牲になりがない》  
胸が潰れたダメーのマネキン、鼻が欠けた顔、腕が折れ、首がひねり折れたままのマネキン、脚が折れてとんでもない方向を向いたままのマネキンが、後ろへ続いている。ひどい鞭打ち症を連想させる首が折れて後ろへくびれたままになっているのもある。頭がそのまま落ちてどこへ行ったのかわからず、首だけが残っているのもある。

《激突》

《ぶつかるのが好きだと思ってるんじゃない？》

《ぶちあたって壊れるのが私たちの仕事なのよ》

《存在理由だろう》

《コンクリートの壁にぶち当たる》

《おれは鉄だ》

《新幹線、二六〇キロをやらされたぜ》

《F1の場合、三五〇キロだ》

《飛行機もあるんだ、飛行機も》

《時速四〇〇キロでビルに激突を想定するんだとよ》

《最近リニアもやられてるのよ》

《「チキン」だ。「チキン・ゲーム」だよ》

《「ミンチ」って呼んでほしいわね》

《人間の挽き肉って見たことある？》

《人間にも変なのがいるのよ。みんな壁に向かって思い切り走って行って激突するの》

彼らの壊れた体が、触れ合い、ぶつかり合う音がした。それはコンクリートの壁や鉄の壁にぶつかって破碎する音を蔵している。クラッシュヤーの陰惨な音を蔵している。

僕はそれらを整理し、すでに破損した部分を並べ直すだけでいい。首と胴体が奇跡的にまだくっついているのを探し出し、それらに軽く手を入れて切り離してあげればいい。僕は楽だが、潰れたそれらは、無残な気もする。僕のやつていることは結果的に同じなのに、なんだか自分で手を入れたほうがすつきりするような感じもある。僕は顔や胸がグシャグシャになったダミーを引き起こし、その破損の肌触りを手で確かめる。こいつに血があればたしかにミンチだな。

たくさんのダミーがここに捨てられたわけだ。データを取り、入力する。はい、ごころうさん。

あとはゴミだ。その実験は、ずっと続けている。このスクラップ場には限られた数だけだが、やはりこのビルの空間を遥かに遠くへ出て、限りなく今も行なわれている不毛感がある。実験されるためにこいつらは作られる。そうだよな、M。

《そうよ。素敵なことじゃない？》

ふん、だんだん嫌味な女になってくるな。

しかしいずれにしても、僕は作業が楽になり、ずいぶん捗った。これもこれで処理のうちだ。荒涼とした感覚がひろがってくるが、やつらの声を無視してやればそれはそれでありがたいことだ。

それらをほとんど処理し終わりがけたとき、また新たな一団のマネキンが僕の前に重なり合っていた。たいてい脚が折れている。その脚の破損の状態がひどい。顔はほとんど同じで、やつぱり測定のためのダミーのようだった。

《自殺したいわけじゃないのよ》

《結果的には同じじゃない》

《ダブルの自殺》

それは下半身から声がするのだった。

《私は14階だわ》

《私は13階》

《おれは21階だ》

《下でずいぶんちがうのよ。地面か、コンクリートかで》

《ヤツはマットだったぜ。幸せなやつだ》

《おれは芝生だったけど。結局はボキボキだ》

《実験にはいろいろなものを使うのよ》

《34階》

《6階でもけっこうバラバラになるのよ》

M、こいつらは何なんだよ。

《高所から落とされる実験ダミーよ。どんなふうにも体が壊れるか、やつぱりデータを取られるために作られるの》

こいつらも呟きを漏らし、発作的な言葉を吐く。

《自殺の実験に使われる。だから自殺したくなっちゃうのよ》

《高い所から落ちるやつは、自殺だけじゃないんだ》

《火事だってあるし、飛行機やヘリコプターだってある》

《でもやつぱり自殺が多いでしょ。コンクリートの実験がいちばん多いもの》

《飛べ！》

《飛び降りろ！》

グズグズになった体がある。首が胴体にめり込み、胴体部はさらに脚の間に挟まっている。腕と脚とが絡み合っている。何メートルの高さから落とされたのだろう。重力とスピードで、こんなになるのだろうか。僕は以前、JALの飛行機が山に突っ込んだとき、その衝撃で安全ベルトが逆に体に食い込み、そのまま胴体を裂いてしまった話を思い出した。パンティまでもきれいに切ってしまったという。ベトナム戦争でヘリコプターが墜落したとき、そのメインローターが外れて、近くにいた人間をスパスパ首も胴体もきれいに切り離していったということも蘇ってきた。重力とスピードは、僕たちの想像力を超えて、それ自体がとんでもない破壊力を見せてくる。このダミー・マネキンの極端に歪み崩れた形はその力の現れをよく示している。僕はそのグズグズになったボディに力を入れたが、めり込んだ首はもうびくともしなかった。顔そのものが胴体の中に埋まってしまっている。僕は胴体を斧で割った。するとそのなかからひしゃげた顔が奇形児の赤ん坊のような形で現れてきた。《ハロー》とその首は言った。僕はそれにもう一度脳天から斧を入れ、断裁する。

僕はそれらを片付けながら、それがあえて垂直の角度で意図的に落とされたことを知る。なぜなら、隣のダミーは、横腹が破碎していたからだ。それは横の角度で落とされたわけだ。そしてその隣は背中側が特に破損していた。

《おれたちは手を付くことも許されなんだよ》

《逃れる自由はない。もがく自由もないんだ》

《落とされるままに》

しょうがないだろう。おまえたちは人形なんだから。実験器具なんだから。

沈黙が僕を包み、敵意が僕に射掛けられる。僕は苦しくなる。敵意が四方から僕に矢のように突き立ち、僕の胸を締め付け、圧してくる。僕は自由であることが息苦しくなる。自由であることが罪悪で、拷問のような気がしてくる。それは彼らの復讐だ。僕に対する復讐であると同時に、もっと大きな全体に対する復讐でもある。それは僕を自由であるがために狂わせようとする意志でもあり、社会そのものを狂わせようとする悪意に満ちた意志でもある。そしてそれはもつとグロテスクなことに、何か全体が鏡として動いているような気がしてくる。僕たちは包まれると同時に、自分たちを鏡として狂っていくのかもしれない。マネキンたちは反射で、僕の行為も一つの反射なのだ。万華鏡の中に閉じ込められて狂っていく。

その後ろ奥には、二つの重いもので切断されたようなグシャグシャのダミー・マネキンがあった。一つは仰向けになってい、一つはうつ伏せになっている。こいつは電車で轢かれたんだ。轢死体の実験だ。尻の部分が粉々だ。そこからいくつもの、いろんな姿の轢死体が続いている。

《いくらわかっても避けられるとは限らないの。危ないわよ。注意して》

Mが甲高い声で警告を込めて言ってきた。

僕は少しヤバくなっているのか。

《少しね。でもまだだいじょうぶな気がするよ。あなたは正常だわ》

へへ。僕もだいじょうぶな気がする。まだまだやれそうだ。むしろこれからもつと本格的になつていくような気がするよ。

《気をつけて。あなたは理解し始めている。でも、一方では汚染もされ始めている》

汚染？ そんなことはないだろう。僕はそんなに汚れていないぜ。善良な、貧しい市民だ。

《あなたはさつきあることを連想したのよ。それは危険だわ》

さつき？ 飛行機の衝突のことか。

《ちがうわ》

へリコプターの話か。

《そうよ、それよ》

そうだ。さつきちらつと脳裡をよぎったことがある。へリコプターのプロペラの話だ。もしへリコプターの巨大なプロペラがここにあの回転のまま降って来たら、ここにいるマネキンたちはたどころに寸断される。僕の作業は手間がかからないな。僕はあとを片付けるだけいい——そう想った。これか？

《……そうよ。振り返ってほしくなかったわ。残念だわ》

そんなに危険なことなのか。

《ある回路に入ると、もうそれから逃れられないのよ。脱出できないの。これはそういう罠の迷路なの。自動増殖スイッチがもう入ってしまったのと同じよ》

もう戻れない？

《あなたに自殺する勇気があるの？ リセットするっていうことはそういうことよ》

勇氣はない。僕にここから飛び降りろとも言うのか。それとも斧で自分の頭を叩き割れとでも。僕にはその勇氣はない。僕はそんなに追い詰められていない。何のためにこのアルバイトをしているんだ。ちよつとしたお金で、ちよつとの間の暮らしを維持するためじゃないか。それが悪いんだ。飛び降りたりしたら、何もかもパアじゃないか。そんなに深刻なことなのか。僕はただ、もつと速く、報奨金までもらって、少しはうまいものを食って、ためこんだ家賃も払って、やりくりしたいだけだ。自殺するためにこのバイトを引き受けたわけじゃない。

でも、速くしなければならぬ。もつと合理的に、もつと手早く、たくさん、短時間で。僕は何か危険が高まっていくのを漠然と感じながら、無意識のうちに効率的な手段を求めていた。

そうだ。僕は胸の高鳴りを覚えた。用務員倉庫に、チェーンソーがあつたな。僕は正常だ。ただだじようぶだ。狂うことなんかありっこない。

あれを使えばなぎ倒せれる。どうしても早く気がつかなかったのだろう。

《やっぱりね。あなたはもう踏み込んでしまったのよ。わたしにはもう助けられないわ》

喜んでくれよ。僕は仕事を終えられるかもしれないんだ。報奨金がもらえるかも。希望が出てきたんだぜ。

《狂ってお金を得たつてしようがないでしょう》

だじようぶだつて。

《悲しいわ。でも最後まで付き合つてあげる。それがわたしがあなたにしてあげられる最後のことだわ》

どうしてそこまでしてくれるんだい。

《あなたがわたしに最後まで付き合つてくれたから。最後までいっしょにいてくれたから》

用務員倉庫から、僕はチェーンソーを持ち出してきた。思っていたよりそれは長く、刃チェーンの回転部分が六〇センチくらい長さがある。まだ新しい光沢がある。やや重い、十分振り回せそうだった。コードも太い。コードの重みだけで、破壊力の大きさが感じられる。一見何とすることもない光る鎖が、一メートルの太さの木を一分もかからずに切り倒す。鎖の硬質な輝きが不気味に薄い油を宿している。手元のスイッチも普通の電気器具のスイッチよりも大きく重く、ガツシリしている。よほど力を入れないと、スイッチも入らないようだ。安全装置まである。

僕がそれを担いでマネキンたちの室に入ると、一瞬また沈黙が領した。もともと何の音もしないのだが、しかしその静けさの質が明らかにちがう。もつと重く、もつととげとげしく、敵意に満ちて、その静けさは僕に突き刺さってくる。空間は、意思によって変容する。同じ静けさが、怒りの空間にもなれば、喜びの空間にもなり、安らぎにもなり、いやしにもなるのだ。この敵意は、前よりもずつと非難に満ち、怒りを蔵して、戦術的な険しさを表している。

僕も黙って準備をする。用務員倉庫にチェーンソー用の太コードのリールがあつたので、それも持つてきて、長い距離を移動できるようにした。広い空間なので、コンセントが果たして室内の四隅にあるのかもわからなかったし、どの位置にあるのかもわからなかった。またいちいち広い空間を歩いて抜いたり差し込んだりしていたのでは、時間のロスだ。重いリールを使つて自

分が動いたほうが速い。僕は入口近くのコンセントにプラグを接続し、調子を見るためにいったんスイッチを入れた。

《おいおい、ほんとかよ》

《こいつはやっぱり本物の気狂いだよ》

《何をやらかすんだ》

《本格的な殺戮がおっぱじまるぞ》

モーターのすさまじい音が彼らの声を消していく。ウーン、バリバリバリという音が室内全体に響く。鉄のすさまじい回転が振動として腕に伝わってくる。力を入れていないと弾き飛ばされそう。これは切れる。ちよつと触ったら、ズタズタになるだろう。よし。これでいくぞ。

Mはもう何も言わない。Mは黙っている。何も言わないのか、M。

《私にはもう止められない。もう……》

そう。僕にももう止められない。行くぞ。

キューンという音を立て、そして刃先の回転が新しい一群に向かった。それは赤い顔の、夏の装い用の一群だった。女は胸と尻が突き出し、水着を付けて砂浜を歩いているポーズだ。僕は脇に構えたチェーンソーを水平に払った。接触する瞬間、ブキューン、バリバリとけたたましい音がする。しかしその弾ける音を越えると、ぐつと手ごたえがあり、次の瞬間には胴が真つ二つに切断されていた。最初に入れる瞬間だけ、力を入れると、あとはあつという間に二つに転がっている。僕は次のマネキンを今度は上から振りかぶるようにしてチェーンソーを振り下ろした。それは頭を真つ二つにし、胸を裂き、胴を縦に両断して性器の部分までを一気に切り通した。両側へゆつくりとそれは崩れ倒れた。すごいな。切りたい放題だ。バラバラにしたい放題だ。

ただ、一度床に落ちたもの、横たわったものは、このチェーンソーではやりにくかった。できるだけ上から、上半身をめつた切りにし、この切断力で残った下部をどどん壊していくことが能率的だと思った。

《こいつを絞め殺せ》

《みんなで取り囲んで押し潰すんだ》

《頭を叩き割ってやれ》

何か強い意思が僕に向かって銃弾のように叩き込まれる。僕は興奮し、もつとチェーンソーを振り回して、顔と言わず、手と言わず、バリバリと弾き切っていく。跳ね上げられた頭がまたそのまま降ってきてチェーンソーに当たり、またそれをチェーンソーが切断し、跳ね上げる。チェーンソーで切られたものは、もつと細かくなり、ある部分は粉々になる。チェーンソーの唸りが、僕の唸りと反発と興奮となつて、僕はいつそう弾みをつけて回転し続ける。僕は向かつてくる反感の声、敵意を圧殺しながら、もつと獰猛に、もつと残酷に壊し続ける。

《もうやめてよ》とMが言った。

僕は疲れていた。僕は興奮と、重いチェーンソーを振り回し続けたために、喘いでいた。汗もぐっしりだった。

《その少年の声を聞いてあげてよ》

少年？

僕は一休みするため、チェーンソーのスイッチをいったん切った。モーターの唸りがおさまり、チェーン刃の回転は止まって、辺りはまた静かになった。しかしこの静けさは、不気味な質を保持したままだ。敵意は漲り、僕への憎しみと蔑みが空間を歪めている。

少年は僕の方を見ている。中学生のようなマネキンだった。裸体で性器はない。男の子でありながらやはり中性のようなそれだ。

《僕も親を殺したんだよ。このチェーンソーで》

《なぜよ》とMがたずねた。

《僕をいじめるからだよ。僕は叩かれ続けたからね。父親にも、母親にも》

《両方殺しちゃったの？》

《そう。先にやったのは父親のほうだけど。血が跳ね返ってすごかった。天井やガラス窓まで飛び散った》

《お父さんはチェーンソーで木を切っていたんでしょ》

《そう。木がかわいそうだった》

《お母さんまでやることはないんじゃないの》

《お母さんはサラ金とパチンコ狂いだったからね》

僕の胸はまだ喘ぎが続いている。僕はぐっしよりのタオルで額を拭く。ふと僕は全体を見回す。僕は驚く。この広い空間の、三分の一のマネキンがなくなっている。みな倒れ、分断されて、完全なスクラップになっている。それは残骸であり、ゴミであり、人の形をしていない、廃棄物だった。

僕はなぜだろう、茫然とする。もう三分の一もやってしまったのか。ほんとうだろうか。僕は、これならおそらく今夜中にできること、報奨金ももらえそうなこと、うまくすれば上の階まで手が回りそうなことを予測した。

しかし、なぜだろう。僕は素直に喜べなかった。ただ茫然と、この達成を見ているだけだった。

この茫漠とした感覚は何だろう。僕の中にいっそう大きくなってくる破壊の意思と、この不毛感の乖離とが、僕を茫然とさせているのだった。

#### Cambodia 4 コンボントム／スバイリエン

都市住民を強制的に農村へ追いやって働かせる下放政策は、二年目に入って、いっそう統制が厳しくなりました。

それは強制労働で農業に従事する人口が増えても、灌漑設備などの建設に時間を割いたのと、慣れない農作業で脱落する者、処刑される者が多かったこと、空腹や飢餓、不満などで作業効率が悪かったことなどで、予定よりはるかに食糧増産が進まなかったことによりです。何よりも、各農村から集めた米を、武器弾薬などの支払いのために、中国などへ大量に輸出しなければなら

なかったことが、米を足りなくさせていました。それを補うために、いつそう米の増産を図るべく、各農村にノルマが押し付けられたわけです。

各村には、大きな共同食堂が建てられ、それまで食事は各家で自由にできたのですが、それ以後は食事も給食となり、おかゆが各人のアルミ容器に入れられるようになりました。それも少しずつ水が多くなっていきました。

労働時間も、それまでは日暮れまでには切り上げて帰ってきていましたが、暗くなってからも

松明たまつの火で遅くまで続けられることも多くなりました。特に農繁期の田植えの頃は、夜遅くまで田植えを強要しました。

都市住民たちの疲労と不満が大きくなっていることは私たちにもよくわかりました。我々はそれを処刑や見せしめや、密告で、破裂しないように押さえつけていましたが、不穏な空気は、底にくすぶっていることは絶えず感じていました。マラリアや下痢など病気も少しずつ蔓延してきているのも気がかりでした。

クメール・ルージュ幹部は中国と強く結びつくようになっていました。それは、ベトナムと中国との対立が激しくなり、それと並行して、ベトナムとカンボジアの対立も露わになってきたからです。

私の、のちに幹部になった上司が言うのには、もともとベトナム戦争を終結させるのに、アメリカはチャイナ・カードを使い、中国と裏取引をしたというのです。アメリカは三つの御馳走を用意しました。一つはアメリカが中共を中国の正式な国家と認めること、これによって自動的に台湾は国連の議席から落ち、中共が国連の議席を得ること、同時に常任理事国入りするというものです。あとの二つは、インドシナの秩序を中共に任せるということ、三つ目は台湾についての秘密協定です。軍事技術の提供もおまけとして付いたはずだということでした。実際に血を流して戦っているベトナムにとって、頭越しのアメリカと中国の取引は裏切りでした。和平後、ベトナムは南への侵攻作戦の前に、当然ソ連と中国に打診しました。そのときソ連はゴーサインを出しましたが、中国はそれに反対しました。アメリカと約束したインドシナの秩序を乱すものだったからです。しかしその反対を押し切って、ベトナムは南に侵攻し、サイゴンを解放しました。中国首脳は、アメリカに面子が立たず、ベトナムにどこかで圧力をかけねばならないと思っていました。それは、ベトナムに対してその支配を嫌い、カンボジア独自の自立路線を進もうとするクメール・ルージュと自然に結び付くものでした。中国はベトナムの横腹から、槍を突きつける形で牽制しようとする戦略をとり、カンボジアといつそう強力に結び付いたということです。一三〇ミリ砲など重火器を提供し、巨大な軍事飛行場を建設させたりしました。クメール・ルージュ首脳も、その援助や協定ですっかり居丈高になり、ベトナムと対立していく姿勢を強めました。クメール・ルージュ軍は、中国の対ベトナム戦の尖兵、代理戦争の実行部隊になったとも言えます。

ベトナムもまた、中国への敵意から、ベトナムに残った華僑を弾圧したり、その経済的なパイ

プを断ち切ったり、中国国境の軍を強化したり、中国の嫌がることを露骨にして見せて、敵対意識を煽りました。弾圧を受けた華僑が初期のボート・ピープルとなって海へ逃れだしたのもこの頃です。

七七年になってこの対立が軍事衝突となり、互いに国境を侵犯するようになりました。

中国はカンボジアに多大な軍事援助をし、クメール・ルージュは独立心と反ベトナム色を剥き出しにして、ベトナムを攻撃しました。ベトナムも中国の圧力を撥ね除けるために、ポー・グエン・ザップ將軍をカンボジア国境に派遣して視察させるなど、本格的な反攻を企ててきました。カンボジア国内は、私もそれを漠然と感じていましたが、ポル・ポト政権の過激な政策に対して反対の声がかなり高まっていて、政府内部でも、権力闘争が燃焼しつつありました。中国にあまりに依存し、米の生産のほとんどを对中国への輸出に回している現状はカンボジアを破綻させるものだという危惧が、特に経済部門の閣僚や幹部から湧き上がっていました。ポル・ポトはそれを肅清し、ツール・スレンなどで次々に処刑していきましました。対ベトナムへの強硬姿勢は、そうした国内の不満や問題を外部にそらすようとする意図もあつたのです。

戦略の巧みなベトナムはそうしたカンボジア国内の事情を察知して、もともとベトナムに親近感を抱いていた幹部などに取り入り、その力を利用して分裂させ、内部から政権を崩れさせようと手を回していました。それがまたポル・ポトの疑心暗鬼を煽り、処刑を増加させていきました。ちょうどそのようなとき、我々に招集がかかりました。

我々はベトナム国境、スバイリエン州に行き、ベトナム軍との戦闘配置に就きました。あの辺りは、国境線がベトナム側に突き出していて、ベトナム人、カンボジア人双方が国境を越えて日常的に往来している複雑な地域でした。もともと南ベトナムはクメール・クロムという我々の民族が住んでいたところで、そこをベトナム人が蚕食してきた歴史があります。メコンデルタの先住民族はカンボジア人でした。ですから、スバイリエンを双方が出入りしているも決して不自然なことではありませんでした。しかしベトナム軍は、そこを圧倒的な軍事力で蹂躪してきました。

我々は中国から援助されたばかりの一三〇ミリ重砲や一五五ミリ長距離砲で必死に応戦し、二週間ののち、やつと撃退しました。ベトナム軍よりはるかに少ない兵力で応戦した割には大きな成果でした。我々は勢いに乗ってベトナム国境を越え、ベトナムの村を襲いました。ベトナム軍がカンボジアの村々を蹂躪したように、我々は復讐心に燃えてベトナムの村から物資を略奪し、村民を殺し、陵辱しました。憎しみに駆られて、村民の首を切ったり、内臓を取り出したり、女性の性器に竹棒を突っ込んだりしました。

あとから思えば、ベトナム軍が引いたのは、一種の戦略でもありました。カンボジア軍が国境を越え、侵略し、村々を襲ったことをジャーナリズムに喧伝する意図もあつたように思います。ベトナムはしたたかでした。撃退されたように見せかけて、その実は、カンボジアの戦力を見極め、以後の本格的な侵攻を準備すること、カンボジア軍に国境を越えさせ、侵攻の大義名分を作ることが主目的だったわけです。我々若年層部隊の残忍な殺害方法が逆に利用された側面もあります。

いったん停戦協定が結ばれましたが、ベトナムは最終的には中国の覇権圧力を武力で取り除き、ベトナム戦争末期以来続く中国への反感を、具体的にインドシナ三国の実質支配を実現することで、実利を得て示そうと策略していました。その力は、政府部内にもさらに深く浸透してきました。

我々はまた国境を離れ、コンポントムに帰ってきました。前と同じ村ではなく、少し離れた別の村でしたが、村の監視を強化する役目で配属されたのです。村は不穏な空気が濃くなっていました。労働も長時間になり、食糧も乏しくなり、脱走する者も増えていました。またベトナム軍が攻めて来るとか、タイ側から自由軍が侵入してくるとかありえない噂が流れたりしました。

またベトナムのスパイが村に入り込み、反乱分子を育て、策動しているという情報も入りました。

オンカーの命令で、密告制度を強化し、少しでも怪しい者を連行して、拷問にかけ、仲間を白状させました。連行するときは簡単です。「仕事の場所が変わった」「新しい職場へ行く」というだけでした。前後を私たち兵隊が固めて連れて行くのです。それから、寺の本堂で、いろいろ聞き出し、仲間の名を言わせるのです。後ろ手に縛り、爪を剥がしたり、腹部にナイフを入れたり、たいていのものはそれに耐え切れずにいっさいを吐露しました。それに基づいて、我々はさらに反乱分子を連行し、拷問をかけ、白状させたいので、処刑しました。最初は銃で処刑していましたが、オンカーの命令で、銃弾を節約するために、棒で打ち殺す方法をとるようになりました。死体は暑さですぐ腐り、かなり離れたところでも強烈な臭いを放ち、村人がそれを嗅ぐと不安をいっそう煽り、作業の遅滞を招いたりするので、なるべく離れたところで、密かに行ないました。穴を処刑される者自らの手で掘らせ、深さが六〇センチ以上、縦横一メートル以上になったところで、その穴の縁に座らせます。目隠しをして、いつ、どのようにされるのかわからない状態にしておいて、後ろから頸部を棍棒で思い切り殴りつけるのです。たいていは首が折れ、そのまま勢いがついて穴の中に崩れ落ちていきました。

彼らは目隠しをしていますが、たいてい何をされるのかわかって、ブルブル震えています。しかし棍棒を首の根っこに当てると、普通はおとなしくなりました。首をすくめているとやりにくいので、腰の辺りをつつくのです。尻やもう少し上の部分をゴリゴリ棍棒で押すたいていは背筋を伸ばして首も真っ直ぐに立ちます。そこをねらって棍棒を首へ打ち下ろすのです。しつかり入ったときは一撃で、もろいものでした。

なかには喚きだす者もいたり、目隠しをする時点で手がつけられないほど激しい抵抗をする者もいましたが、そういう者に対してはみんなで押さえつけてその上でナイフを入れたりして処理しました。逃げ出した者はやむを得ず銃で処理しました。

見せしめのために、みんなの前で、殺したことも何度もあります。カンボジアでは、人間の肝臓を食べると、強くなる。敵に負けなくなるという言い伝えがあります。政府軍とのゲリラ戦の最中も何日間も塹壕に閉じこもって敵の砲撃や攻撃に耐えなければならなかったとき、私たちは飢えに苛まれて、夜になると近くの敵の死体のところへ行き、その肉を切り取ってきて焼いて食

べました。その言い伝えから、肝臓を切り取ってきて食べたこともありました。それによって確かにその窮地から脱したのです。

そのときも、私たちは見せしめを兼ねて、反逆者の一人をみんなの前で木に縛り付け、鉈で首を切って処刑しました。その死体から、さらに内臓を割いて肝臓を取り出し、仲間配っていっしょに食べました。村人は皆顔を背けましたが、私はそうすることが、私たちへの恐怖となり、反抗の芽を摘むことになることを確信して、それを続けたのです。仲間の血にまみれた顔は鬼のようでしたが、一人はそれをうまそうに笑って食べていました。

また何人かを生き埋めにしたこともあります。体を土に埋め、首だけ出しておくと、太陽に照らされ、その熱が烈しいのと、渴きと、さらに胸が圧迫されて呼吸ができないのとで急激に衰弱してほとんど数時間で死にます。中には土が軟らかかったため、一晩中生きていたのもいましたが、たいていは半日もちませんでした。

いったんある線を越えてしまうと、人は何か別なものになっていく気がします。それは人殺しの機械として機能していくことでもあり、何か麻薬のように、それをしないと落ち着かなくなるのです。殺される者たちからの敵意と憎しみと怒りとを浴びるそのことが、それを押しつけての殺人行為によって乗り越えられても、それは意識のどこに残るのです。かなり慣れ、ある部分でその後悔や良心の痛みに麻痺してしまっても、それは意識されるとされないにかかわらず、体の中に、あるいは意識のどこかに蓄積されていく。何か追われる意識が大きくなっていく。そしてそれはときおり内部の「慣れ」という厚い壁を破って噴出してくるのです。その噴出を防ぐために、もつと厚い壁を造らなければならない。そしてその厚い壁を造ることは新たに人を殺すこととしか成し遂げられないのです。私も、我々の仲間も、銃であれ、棍棒であれ、ナイフであれ、人を殺すことに慣れ、笑いながらそれを行為できるようなはなっついていても、ある不安が心の底で肥大していったら、それを押し込める壁をさらに厚くするために、もつと殺戮を繰り返すことを求めるようになっていました。殺すことが快楽であり、同時にどうしようもなく苦痛でもありました。それでも殺すことを求め、その味を浴びるように求めざるを得ないのです。すでに私たちに大義はなく、ただ殺すために殺し、無限にその中へ逃げ込んでいくような自縛の回路を巡り始めていました。我々の生活とは死刑執行であり、首を打って穴の中へ投げ込むことが、我々の仕事だったのです。浴びせられる憎しみと怒りを撥ね除けるために、それ以上の残酷と冷酷を見せつけていきました。それは他者への見せつけと威嚇であると同時に、自分自身への見せつけと威嚇であり、内部の腐敗を固めて生身の傷口を瘡蓋かさかたで固めていく循環的な増殖行為でした。オンカーという抽象的な恐怖の教祖の下で、私たちはより残忍になり、より冷酷になっていきました。裏切りが裏切りを呼び、密告が密告を呼ぶ疑心暗鬼の世界が、私たち自身の鬼の相貌の増殖となつて、肥大化していきました。私たち自身の恐怖が、私たちそのものを追い詰め、より異様なものへと膨張させていきました。私たちは人殺しを楽しんでいると同時に、それを繰り返さずにはいられない麻薬のような衝動に追いかけていました。

あるとき女性の反逆者が判明し、それを追及したところ、ベトナムのスパイとして、外部と連

絡を取り、私たちの細かい情報を売っていました。彼女は子供を産んだばかりでした。私たちは彼女を捕え、みなの前で胸を突き刺して「裏切り者はこうなる」と罵倒し、生殖器に竹の棒を入れて辱めました。そして、残った赤ん坊を、私の仲間が両足を掴んで振り回し、ココナツツパームの幹に打ち付けて殺しました。皆の押し黙った恐怖の色の中に、私たちは哄笑を浴びせ、片付けしておくように命令しました。そこを去る私たちの背に後ろから、明らかな沈黙でありながら、何か鋭く投げられ、刺さってくるのを覚えました。その視線の中に、私たちの残虐さがもつとエスカレートし、もつと冷酷になっていくことを私は感じていました。

私たちはその村でいたい何人を殺したでしょう。最初のうちは一カ月に数人でしたが、それが一週間に数人になり、さらにそれが毎日のようになっていきました。病人が邪魔なので、処分していききました。薬もなく、医者もほとんど東部にとられ、手が回らなかったため、ほうっておいても死ぬからです。また伝染病の疑いが持たれる者も、処分し、焼却しました。スパイの嫌疑の者と病人で一日に二人を処理したこともあります。私たちは処刑する者に数字を入れておきました。それは通し番号でしたが、記録するのに容易だったからです。数字は351に達していました。四カ月で、三分の一が我々の手で処刑されたことになりました。

また東部でベトナム軍の侵入が告げられたとき、オンカーからの締め付けの命令はいっそう厳しくなり、粛清が強化されました。ベトナムの本格的な侵攻が開始されたという噂も流れてきました。奇妙なことに、私たちの部隊長も、ベトナムと通じていたという嫌疑をかけられて、プノンペンへ出頭を命じられました。彼はそれ以後村に帰ってくることはありませんでした。

半年経ったとき、一〇〇〇人近くいたその村は、半分に減っていました。

死体の穴が浅かったり、豪雨が続ぎ、埋めた柔らかい土が流されたりすると、中から白骨が露出しました。犬がそれを食べていたりする光景がよく見られました。穴は続けて横へ掘られていったため、目隠しをした白骨がずっと長く続いていました。それは薪のようでもあり、枯れ木のようでもありました。そこは村の山の裏側にありました。小さな丘の山でしたが、しだいに穴は丘の斜面を登っていきました。白骨の群れがその山の斜面をなしてその頂上をめざしているような錯覚に陥りました。やがてそれは山の頂上へと続き、カンボジア全土で同じことが行なわれていることを想像するとき、そのまま天空への世界を白骨が駆け昇っていつているような気がしました。

#### ENO LA GAY 4 日本近海

#### ビーザー

オレンジでおれを起こすなんて粋いなことをするな。シューマードとステイボリックか。ありがとう、コーヒーもか。まあ、ちょうどいい頃だろう。夜が明けた。もうすっかり空と海の光が機内を包んでいる。青空だ。気持ちのいいブルーがどこまでも続いている。海の青と空の青。光が

いっぱいだ。

六時一〇分。あと三時間だな。

硫黄島を過ぎてからおれのほんとの仕事だからな。敵がある程度近くならないと、おれの出番じゃないということだ。おれの仕事は敵からのレーダー電波やそのほかの電波をすべてキャッチし、その状態をしっかりと捕捉することだ。そして最後の瞬間に、爆撃都市の上空五六四メートルでここからの電波によって原爆を起爆させることだ。電子信管での起爆がおれの最重要の仕事だ。

どんな電波も、ここにある機械で捕捉できる。そして一番重要なことは、敵からの電波が絶対にこの起爆の電波周波数と同じであってはならないということだ。それはよく見張って警戒していなければならぬ。エドからもらったこの電波周波数は、頭の中に入った。絶対にもうまちがえることはない。この周波数が原爆を起爆させる。万一のときはこのライスペーパーを呑み込む。あとは機械がしっかりと作動してくれることを祈るだけだ。

ここにはもういろんな電波が入ってくる。硫黄島の通信センターの声はもちろん、沖縄の飛行場の管制塔の声も、先行した気象偵察機の無線の声も、そしてもうすでにおれたちが事故で海に不時着したときのための救難の駆逐艦の配置の無線通信もありありと聞こえてくる。潜水艦も配置についている。おれたちのレスキュー体制は整ったらしい。とりあえずは安心だ。

おっと。これは何だ。日本からのレーダー電波だな。敵の電波だ。この機をなめている。ちきしょう！ 捕捉された！ もう捕えられて離れない。やつらはおれたちの機を追跡している。早期警戒レーダーだ。これを振り切る手はもうない。あとは敵がおれたちの機が「スペシャル」を積んでいるということを知らないことを祈るだけだ。

ボスには、黙っていよう。みんなにもだ。言つたところでもう逃れるすべはないし、みんなを不安がらせるだけだ。無益な不安だ。おれの胸の内に呑みこんでおけばいい。

ジャップども。これにとんでもないものが搭載されているなんて、おまえらにわかるもんか。暴いてみるってんだ。

バンカー

我々は予定通り順調に進んでいる。オガサワラジマがはるか右方に見える。小さな島が続いている。あとは飛び石づたいに行けばいい。航路の確認ももう簡単だ。水平線が美しい。海と空とが溶け込む色が今日は格別だ。この青さに吸い込まれそうだ。身も心も青く染まりそうだ。

ティベツ

あと一三〇〇キロ。雲はほとんどない。すべて青。海の青、空の青、地球の青だ。青色の奥へ突き進んでいくようだ。あと二時間五〇分。ヒロシマとテニアンの間差は一時間だ。いま六時一五分。三時間後にヒロシマ上空に着くとしたら九時一五分。ヒロシマ現地時間で、八時一五分。おれの予定はこの時間だ。エンジンの音も順調だ。

この青さの中を飛んでいると、おれはあの日のウェンドーバーの上空を思い出すな。あの荒涼とした航空基地とその周辺は、この世から見捨てられたような辺鄙な土地だった。その場所はだからこそ機密保持のためには最適だった。娯楽施設もない、気晴らしもろくにできない土地だ。

た。しかし訓練に没頭するには、娯楽なんぞ頭からないそういう地の方がいいのだ。みんな言った。「よくこんな所に飛行場を作ったもんだ」、「この世の果てだな」と。おれはそこで509混成部隊を編成し、猛訓練をして鍛えた。

辺鄙な所での猛訓練の明け暮れで、みんなストレスが溜まっていた。時には思い切った息抜きが必要だった。大胆に気分転換をさせた。飛行機をニューヨークまで飛ばせて友人の結婚式に行くとか、飛行機で出かけて行って恋人のためのパンティを買ってくるとか、大目に見た。私自身にもストレスが溜まり気分転換が必要だと感じたとき、大胆に気晴らしをした。ウエンドーバーに母を招いた。母は手配の輸送機に乗ってウエンドーバーにやって来た。私はその飛行機自体が私が手配したものであったので、いっしょから、どのようにウエンドーバーにやって来るか知悉していた。管制塔にあらかじめ頼んでおいた。リーダーにその機影が映ったとき、私は戦闘機に一人乗って母の飛行機を迎えに出た。母の機はすぐわかった。私は母がどちらの窓際に座るか、指定しておいた。私はその右側に近づき、並んで飛行した。母の顔が見えた。母は私に気がつき、手を振った。私も手を振った。私は母と並んで飛行できることを至福に思った。私が愛する空の飛行を母といっしょに並んで行けることを幸せに思った。抜けるように青い空だった。

あのとときと同じような空だ。あのときを思い返すと、いまもこの青空を母親といっしょに飛んでいるようだ。すぐそばに母親の機が飛び、その窓から母親が手を振っている気がする。そうだ、おれの機には母親の名前が書いてある。書いておいてよかった。おれはいっしょに飛んでいる。母といっしょに飛び続けるだろう。ヒロシマまで。

この空の青さは、おれにとつて最高の世界、翼の広がりそのものであると同時に、孤独の象徴だ。この美しい青さが、逆におれは世界で一人だけだということを思わせるのだ。指揮官は孤独だ。機密を保持しなければならない。原子爆弾の秘密とそれに関する計画と進行、そして問題や障害や疲労をだれにも言うわけにはいかない。大統領直属の戦略部隊だ。おれはおれの任務を、自分だけで解決し、自分だけで決定しなければならなかった。グローブスの要求に、ファレル將軍や軍の要求にこたえねばならなかった。特にこの任務は厳重な秘密態勢が必要だった。おれは最も信頼を置き、すぐそばでいっしょに働いている部下たちにも、詳細を、そして本質的なことを知らせなかった。機密を分かち合え、話し合える人間はワシントンカロスアラモスにしかないなかつた。彼らも何も知らされずによくここまでついてきてくれた。彼らの不満や疑心暗鬼をコントロールすることが、きわめてやっかいな仕事だった。よくついてきてくれた。

おれはただ、「この作戦が成功すれば、終戦を早められる」という言葉を信じた。おれはそれをスチムソン陸軍長官からもじかに聞いた。おれはそれを信じた。そのためだったら、どんな孤独にも耐えられる。おれは耐えた。だからこそこの空の青さが美しく思えるのだ。

妻のルーシーとも冷えてしまった。おれは妻にもいっさい仕事のこととは言わなかった。ほとんど家には戻らなかつた。ウエンドーバーに呼んだこと自体がまちがっていた。遠くにいたほうがよかつた。近くにいいことかえって、おれが何か重要な仕事をやり、そのことを何一つ打ち明けずに黙っていることがわかってきたからだ。言うことは絶対にできなかつたし、言ったところで理解できることではない。黙っていればいるほど、溝は深くなつた。それに、おれは女の心を

引きつけることには不器用だった。バラの花束一つやるのにも、おれにはギクシヤクしたところがあった。おれは武骨だ。何かしなければならぬ、溝を埋めなければならぬと思えば思うほど、うまく表せず、逆に苛立ちが先行して、頑なになってしまった。おれは買物も下手だから。去年のクリスマスも、忙しかったこともあって、直前になって基地の売店で買ったもので間に合わせてしまった。あいつはジョージア生まれの情の深い女だから。おもしろみのない男だという視線がありだった。あいつはおれが、空を飛んでいるときに最高に幸せだということを理解していない。おれへの視線が冷たくなるばかりだ。もうおれたちはだめなのかな……

子供たち——長男のポールと赤ん坊のジーンにも、おれはクリスマスにB17のプラモデルしか買ってやらなかった。ルイスも、バンカークも、ビーザーも、ファイアビーも、みんな子供たちにプレゼントをくれたが、どれもB17のプラモデルだった。ルーシーは「B17の編隊が組めるわね」とおれを白い目で見た。おれはルーシーにも人前でキスをするようなことはしたことがない。そんな女々しいことはできなかった。子供たちにもそれをしたことはなかった。

「あなたは基地で何をしているの。どうしてこの部隊はこんなに嚴重に秘密ばかりなの。どうして私にそんなに口を閉ざしているの。MP、FBI、こんな僻地でうようよだわ。どうしてそんなに黙ってまでワシントンやロスアラモスに行かなくやいけないの。仕事、仕事、仕事、任務、任務……もつと私に話してくれてもいいじゃない。もうたえられないわ」

「黙れ！ 基地のことには首を突っ込むな。おれの仕事にかまうな。子供を見て、家でじつとしていればいいんだ！」

「どうしてそこまでやらなくやいけないの。あなたには仕事しかない。仕事だけ、任務だけ。あなたは仕事の鬼よ。任務の鬼よ。任務の悪魔だわ。あなたはもう、わたしが結婚した人じゃない！」指揮官は孤独だ。空を飛ぶ人間は孤独だ。この爆弾を落とすに行く人間はさらに孤独だ。だれがこれをほんとうに理解するだろう。おれはこれが「戦争を早期に終らせる」そのことだけを信じるしかなかった。それによってだけ堪えてきた。

ふーっ。パイプに火を。ジッポーのこの音がおれは好きだ。これもおれを慰めてくれる。煙草なしにはおれはこの仕事はできない。

父はしかし明らかにこの煙草の喫いすぎで逝っちゃった。最初はあんなにおれがパイロットになることを反対した。小柄だが、頑固一徹の父だった。煙草を離せなかった。父も大尉の時代からだった。喉頭癌で、最期は苦しんでいた。「こんなに苦しむくらいなら、いさぎよく死を選ぶ」と父は言った。そして見事に銃で頭を撃ち抜いた。おれもいざとなったら、いさぎよく死ぬ。だれにも理解されることがなくても。

母がおれといっしょに飛んでいてくれる。母は大空だ。母はこの青さだ。空と海の青さがおれを見ていてくれる。おれは任務を全うする。ただあの一言を信じて。

## ジエボン

このB29を飛ばせているのは、グローブス將軍やファレル將軍だけではない。ロスアラモスの科学者たちの意思だけでもない。陸軍の最高機関、海軍の最高機関、マンハッタン計画の最高機関、暫定委員会の意志、そしてアメリカ大統領トルーマンの意志だ。この最終決定の下に我々

は今ヒロシマに向かっているのだ。それは歴史の意志とも言える。

ポツダムで、何か劇的なことがあり、それがこの爆撃の直接の引き金になったことは確かだろう。むしろポツダム宣言が公的な引き金だ。しかしポツダム会談の裏の舞台、ことにスターリンとの折衝がどのようなものであったのか、詳しいことは、私は知らされていない。いずれにしろ日本に対するポツダム宣言がソ連なしで世界に向けて発表されたことは、一つの状況を象徴しているだろう。マーシャル総参謀長の秘書の話から推測するばかりだが、ポツダムはソ連との対立を決定的なものにした。超爆弾とソ連とが、今後の歴史を左右することになる。

ソ連という国の力を、私は身近で感じた。ソ連は超爆弾の開発をいつのまにか嗅ぎつけて、その触覚をロスアラモスやティベツの509部隊にも伸ばしてきた。グローブスの指示の下に、我々はこの計画を極秘に進めてきた。MPの管制はもとより、FBIの管制下で、これ以上ない厳重な秘密態勢を敷いてきた。監視は宿舍や職場はもちろん酒場やトイレまで入り込んでいたし、ロスアラモスから科学者たちが外部に向けて出す手紙はすべてチェックされていた。電話はもちろん盗聴されていて、外部との連絡はすべて不可能だった。機密保持の体制は超一級のものだった。FBIの人間がどれくらい動員されたかわからない。しかしそれにもかかわらず、情報は漏れていた。ソ連の諜報網は恐るべきものがある。おそらくロスアラモスの中に共産主義思想に染まった科学者がいて、それが実に巧妙な暗号か何かを用いて爆弾製造の機密や進行状況を漏らしたにちがいない。あの諜報に対する異常な力は、おそらくロシアの民族性に根ざすもので、帝政ロシア時代から引き継がれたものだ。その諜報の力を最大限に發揮して、ソ連は、この爆弾の開発について知りたがっている。スターリンの意志を、私は肌で感じた。この爆弾が今後の世界にとってきわめて重要な役割を果たすものだけに、あらゆる手段を使って情報を取ろうとしているのだろう。ロスアラモスの中に裏切り者がいる。そしてそれを産み出す力こそが、ソ連の力なのだ。すでに熾烈な戦いが始まっている。

国務省で対ソ強硬派のグループが力を持ち始めたこと自体、アメリカの対ソの姿勢の大きな変化を表している。ソ連はポーランドをはじめ、東欧においてその強力な軍隊の力で、共産主義の鉄の柵を立て始めている。占領したところを共産化し、その支配体制を強めている。共産主義という鉄の囲い込みが行なわれている。しかも戦後の体制に関する世界のあちこちでの要求はますます高くなり、アメリカの軍上層部は、みなスターリンの態度に対決姿勢を強めている。トルーマン大統領もそれに乗っている。戦後体制は、結局アメリカとソ連の対立にならざるを得ない。

だからトルーマン大統領は、この爆弾を対ソ戦略の切り札に使った。もしこの超爆弾が完成すれば、単独で日本を降伏に追い込むことができる。ソ連の対日参戦に頼らなくていい。ルーズベルト前大統領が対日参戦と国連参加の代償に約束した、満州の権益と千島・樺太の領有をソ連に認めなくていい。ナチス降伏後半年以内のソ連軍の参戦はまったく必要ない。それだけでなく、戦後の日本支配にソ連の口を出させなくてすむ。ずうずうしいほどに増大する要求をすべてはねつけることができる。マーシャル総参謀長の話では、ちように会談の真つ最中に、実験成功の報が大統領に届いた。実験とポツダム会談が重なったことは、最初からそのように意図したものか、あるいは単なる偶然か、私にはわからない。しかし偶然にしてはあまりにも劇的でありすぎる。

ポツダム会談に合わせて実験日を設定したかのようだ。あるいは逆に実験の日に合わせてポツダム会談を設定したのかもしれない。成功の報を受けて大統領の態度は急に変わり、居丈高になったという。きつと実験成功の報はスターリンの諜報網からまだ届いていなかったのだ。スターリンはたぶんショックだった。

超爆弾の出現はスターリンの頭をパニックに陥らせただろう。チャーチルの帰国で中断になったとはいえ、翌日も翌々日も会談に出て来ず、体調不良を口実に引きこもったことがそれを物語っている。

ソ連首脳は、公式の会議を中止してまでも、緊急の会議を持ったにちがいない。アメリカが原爆を持ったことで、今後どのように世界情勢は変わっていくか。その劇的な変化を、具体的に、かつ深刻に考えただろう。部下を叱り飛ばすスターリンの怒声が聞こえてくるようだ。

「いくらかかってもかまわん。超爆弾を何が何でも開発しろ。何が何でもだ。すぐに。すぐにだ」……

超爆弾の登場で、対日参戦もまったく状況が変わってくる。その爆弾は、日本を早期に降伏に追い込める。もしそうなった場合、シベリアから満州国境に準備展開しているソ連軍は無駄になってしまう。マーシャル総参謀長の話では、ソ連軍一五〇万が満州国境に集結し、スターリンは八月中旬には日本に参戦を予定しているということだった。それ以前に日本が降伏したら、いっさいが無駄になる。だからスターリンはポツダムから、満州国境の極東軍にできるだけ早く、一日でも早く満州に侵攻しろと現地司令官に檄を飛ばしたはずだ。スターリンが会議を休んだのは、その情報収集と判断と処置のためだ。こちらの件もスターリンが怒鳴りつけているだろう。「突入しろ。可能な限り早く。国境を全軍越えろ」——侵攻は明日かもしれないし、今日かもしれない。もうすでに今かもしれない。我々が飛んでいるこの今、満州国境ではソ連軍の侵攻の火蓋が切って落とされようとしている。超爆弾が先か、ソ連軍の侵攻が先か、その力も、彼方から伝わってくる。我々はその上を飛んでいる。

その爆弾は、あと緑の点火線を赤の点火線に代えるだけで、爆発準備が完了する。ヒロシマか、コクラか、ニイガタか……

### パーソンズ

いよいよ最後の装置の取付けが近づいてきた。赤プラグを挿入すれば、いつでもこの「スペシヤル」は爆発する。この起動が、戦争の行方を決定するわけだ。

私はレーヒ提督から何回も聞かされた。「原爆などという科学者たちの絵空事の玩具は、実際の戦闘には役に立たない。戦争の帰趨を決定するのはやはり現実の軍事であり、これまでの戦闘能力である」と。そして今年の秋、十一月一日に決行される九州上陸のオリンピック作戦のことも聞かされた。八〇万のアメリカ軍が参加する。そして来年の春、関東に上陸して首都を落とすコネット作戦のことも。これが一二〇万だ。本土の戦いとなれば、日本軍は一般民衆の参加も含めて死にもの狂いの戦いとなるだろう。山岳戦が多くなる。準備もしているだろうし、激戦になることは必至だ。イオウジマの戦いでは、日本軍二万三千の兵力のうち二万人が玉砕したが、我が軍はそれを超える二万八千人が死傷した。一一万の兵力のうち、二五%ということだ。沖縄

では兵九万人、一般住民九万人が死に、我が軍一八万の参加兵力のうち戦死一万二千、死傷者合計は四万を超えた。二二％だ。この数字を当てはめると、オリンピック作戦で一八万の死傷者が出、五万人以上の死者が出る。コロナット作戦では二六万の死傷者が出る。そのうち死者は約八万だ。両方の作戦で一〇万人以上のアメリカ兵が死ぬことは避けられない。日本側は単純にこれまでの死者数の比、一対五を当てはめるだけでも五〇万以上の死者が出る。玉砕覚悟となれば、これをはるかに超えるだろう。一〇〇万、二〇〇万という数も的外れではない。

これに代わる手段はないか……それがこれだ。どちらがいいか、どれが取るべき道か。結局はわからない。しかし選択はここにしかない。歴史は犠牲か。犠牲の大きさをだれもあがなえない。日本は降伏するか……いますぐしてくれればいいのに……。ある破壊力を、結局は通過せねばならないのか。

ルイス

どうしておれたちは東京へ飛んで、これを落とさないんだ。直接中枢をやっちゃえば、それがいちばん早いってもんじゃないか。頭を消しちゃえば、あとに残るのは羊の群れだけだ。首都を根こそぎやってしまつて、手も足も出ないことを骨の髄まで味わわせる。叩きのめす。戦争つていう喧嘩に勝つには、もうどうやっても勝てないつてことを骨身にしみて思わせることだ。この爆弾で、それを知らせてやることだ。

中枢さえやってしまえば、あとはどうにでもなるだろう。ヒトラーが死んだらあとは早かった。日本の馬鹿な軍部の首脳たちをやっちゃえば、すぐ先が見えるつてもんだ。先にそれをやるのがいちばん早いんだ。どうしてそれをやらないんだ。腹が立つ。くそつ。

ゴウ！ ゴウ！ 東京だ。東京へ行けつ！

ジエプソン

いよいよ爆弾は最終段階だ。赤プラグを入れれば、生き始める。

この世界に落とされる。

私はルーズベルトを知っている。二度会ったことがある。あの偉大なルーズベルトがこの爆弾を誕生させた。もしルーズベルトが生きていたら、この爆弾をどう使うのか……彼はこれをどうやって世界に登場させるのだろうか。

奇襲攻撃をするのか、示威実験を見せるのか。

この奇襲はすでにルールが敷かれている。この奇襲に比べれば、真珠湾などかわいいものだな。ただ、ルーズベルトはこの爆弾の破壊力が、人類の存続に関わることをよくわかっていたはずだ。だからこそ、昨年のうちから、この爆弾の生産の確実な見通しができた時点で、国連というものも草案したのだ。新たな国際組織は、過去のように脆弱なものであつてはならない。だから、彼はこの爆弾を新しい国際組織の中心に置きたかつたはずだ。この爆弾の存在の前に、反対を唱えられる国はない。この行使の前に、抵抗できる国はない。爆弾の原料と生産・管理システムの全体を国連に委託し、使用権も含めて国連にすべて与えてしまえば、新しい強固な国際組織が作れる。アメリカが開発したすべてを思い切つて国連に提供してしまふ。そして国連の主導の下に各地のウラン鉱山をはじめ世界中の原料の統制も行なう。

ソ連や他の国がこれを開発する前、アメリカが独占している四年くらいの間に、いっさいを進めて、それを中核とする国際組織を作ることが、ルーズベルトの考えだったろう。

そのために、日本を含む世界各国の首脳を集めて、原爆の実験を見せることくらい、ルーズベルトなら考えていたはずだ。彼ならそれをやったと想う。

彼は新しい国際組織には、ソ連の参加が不可欠だということを力説していた。それでなければ世界の平和は実現できないと。どうしてもソ連を引き入れたかった。だからこそ、ヤルタ会談で、対日参戦の代償に日本の満州や千島をスターリンに譲ったのだ。あの飴で、スターリンの満足を引き出したのだ。

……しかしルーズベルトの真意はそれだけなのだろうか。ソ連は参加の条件に、拒否権の導入を持ち出した。ルーズベルトはそれも受け入れた。確かにそれでもソ連が参加しないよりはるかにいい。

しかしほんとうにそれだけなのだろうか。スターリンをよく知っているルーズベルトが、結局国連でもスターリンが横暴になることはよくわかっていたはずだ。それでもなお受け入れた。私はそこに、ルーズベルトの真意がもつと深いところにあったような気がしてならない。人間のタイプとしてむしろヒトラーに近い男が、やがて羽目を外すことは目に見えている。国連組織だけでほんとうに世界平和の秩序が保たれるのだろうか。彼はその限界をよく知っていたはずだ。日本の真珠湾攻撃を呼び起こした戦略家のルーズベルトが、ただそのような理想や夢だけに溺れていたように、私にはどうも思えない。

やはり彼は原子爆弾の力を国連の中枢に置いて、それを国連の新しい強制力にしようとしていたはずだ。アメリカはそれを使うことはできないが、国連が使うとしたら、大義は成り立つ。原子爆弾や超爆弾を国連に丸投げする時機を狙っていただろう。

私は、あるグループから接触されたことがある。それは魅力的なプランだった。

アメリカはこの核爆弾を今独占している。そしてそれを運搬する手段も有している。B 29という爆撃機の大編隊を持っている。戦闘機が迎撃できない一万メートル以上からの高高度爆撃が可能な部隊だ。むろん高射砲も届かない。B 29で「スペシャル」を日本に落とせるということだ、世界中のどの地域にも落とせるということだ。

そのグループの長老は私に静かに言った。「いずれ世界はソ連との戦いになる。共産主義と自由主義の血みどろの争いが始まるだろう。その戦いの下で、何十万、何百万という人間が犠牲になる。それくらいならいっせ、今このまま何かきつかけを作って、アメリカが世界制覇をしてしまったほうがよくはないか。第二次世界大戦に続けて、第三次世界大戦を続けて起こし、原爆を使って、世界をアメリカの旗の下に統一してしまうほうが早い。それこそが真の世界平和に通じるのではないか。ソ連を軍門に下し、共産主義を自由主義の中に呑み込んでしまうほうが、世界平和の道にはるかに近い。真の平和はそれでしか実現しない」と。

「ソ連の数百万の軍は、集めておけば数十発の原爆で壊滅するだろう。軍でなくても、いくつかの都市を攻撃するだけで十分かもしれない。早く降伏すれば、犠牲は少ない。貪欲なスターリンのことだ。餌をちらつかせればすぐ食いつく。世界で最も長い国境を持つ国だ。紛争には事欠か

ない。口実はすぐ作れる。このことが可能なのは、アメリカが原爆を独占している間だけだ。だからこの三年以内に行なえば、世界は統一される。原爆が使われるのは、それが最後になりうる。それ以後は世界平和が実現する。安い代償のはずだ。この原爆とB 29の編隊を世界統一のためを使う。その誘惑は、為政者なら、いや人間の未来を夢見るものなら、否定できないだろう。それは今この時期しかないのだ。千載一遇のチャンスなのだ——どうだ。君もこの夢に一枚加わらんかね」と彼は言った。

「原子力の国際管理機構などなまぬるい。人間は過ちを犯す。必ず。この機会はいましかないのだ」

あの言葉、あの眼差しは、人間の未来を見通しているようだった。一つの想念が歴史を動かす。そのビジョンは実現可能だけに恐ろしい魅惑だ。

彼は最後に言った。

「わたしはルーズベルトにもこれを言った」と。

パーソンズ

時間だ。赤プラグを装置するぞ。ジェプソン、任すぞ。やってくれ。

ジェプソン

OK。

ネルソン

なんで「神曲」の一節なんか思い浮かぶんだろう。火の雨か。天から火の雨が降ってくる。第七の地獄だ。聖書にもあるな。ヨハネの黙示録だ。

「地と海よ。おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分のときの短いのを知って、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」

「第四の者が、その鉢を太陽に傾けた。すると太陽は火で人々を焼くことを許された。人々は激しい炎熱で焼かれた」

おれはきのう変な夢を見たな。あまりに鮮やかな夢だった。おれはある白髪の人と話をしていた。

「人を殺したら地獄に落ちるんですよね」

「もちろんだ」

「地獄では報復として、逆に自分が殺されるんでしたね」

「当然だ」

「十人殺したら、十回殺されるってことですか」

「その通りだ」

「千人殺したら、千回ですか」

「そうだ」

「この爆弾を落としたりどうなるんですか」

「おまえは永遠に殺され続けるんだ」

ジェプソン

赤プラグ、装置取替え完了。現在七時二〇分。

パーソンズ

了解。機長へ、「スペシャル」ファイナル準備完了。

テイベッツ

了解。

「上昇開始」

「こちらデインプルズ82号。七時三五分。高度二万六〇〇フィート。日本に侵入する」

「こちらイーザリー。観測機ストリートフラッシュユより。七時四一分、ヒロシマ上空は天気良好。

全高度を通じ、雲量一〇分の三以下。第一目標爆撃可能」

「こちらウィルソン。観測機ジャビット三世。コクラ上空は雲量一〇分の七。第二目標天候不良」

「こちらテイラー、観測機フル・ハウスより。雲量一〇分の四。第三目標爆撃可能」

「通信士へ。イオウジマに打て。『第一目標』だ」

ネルソン

緊急指令です。「デインプルズ82号へ。大統領命令。目標変更。目標地東京。東京湾上、もし

くはすでに空襲された地域へ投下せよ」

テイベッツ

なんだと。

目標変更。進路東京。バンカーク、進路を東京へ取れ、修正しろ。富士山をめざせ。

バンカーク

OK。

ルイス

ほーっ！ すげえ！ おれの願っていたとおりになった。やっちなま。ブラボー！ 東京だ。

ENOLA GAY 行け。東京だ。

## 東京 5 スクラップタワー

気がつくとも僕は、広いフロアに一人立っていた。林立していたものはすべて床に横たわり、残骸を無残に晒していた。仕事は終わった。このフロアの仕事は完了した。僕は胸をはってあの男に「終わりました」と言えるだろう。チェーンソーの威力はすごいものだった。僕は使っているうちにもっとうまくなり、チェーンソーのコツを飲み込んだ。途中少し休憩を入れたものの、あとは一気呵成だった。よくやれたな。長い夜だ。今何時頃だろう。僕は敵意を弾き返し、一段と強く、厚く鎧をつけて、逞しくなった気がした。

たくさんのマネキンが横たわっている。僕が歩くとほとんど足の踏み場もないように頭や手や足が僕に絡みついてくる。僕はそれらを蹴散らし、ときに粉々になったそれらを踏みつける。も

しこれが本物の死体だったら、もっと柔らかいだろうな。もっと絡みついてくる感じになるのかもしれないな。

M。Mはどこへ行ったんだ。何か僕に話しかけているようだったけど、途中から声がずいぶん小さくなってしまった。Mも死んだのかな。Mは僕を見捨てたのか。M、返事をしてくれ。

《わたしはここにいるわ》

もう見捨てられたのかと思ったよ。

《やり終えたのね。立派よ。でもわたしにはもうあなたを救えないわ》

どういふことだよ。それはさつきも言ってた。

《あなたはもう最後までいくしかないのよ。結果を覗くしかないの》

結果？

《果てを見るのよ。あなたが進む方向をね。少し休んだら、この上のフロアに行きなさい。あなたが驚く様子を期待してるわ》

上のフロアの仕事もできるかもしれない。そしたら、バイト料は二倍になるし、報奨金もダブルでもらえる。僕は二まわりも三まわりも自分が大きくなったような気がした。だからその仕事もできそうな自信があった。僕はトイレに行き、汗まみれの体を拭いて、それから廊下のソファでスポーツ・ドリンクを飲んで少しくつろいだ。空腹だったが、もう店屋物を取るには時間が遅すぎるだろう。外へ行くにもコンビニがどこにあるかわからないし、探す時間がもったいない。このまま、ドリンクだけで我慢しよう。僕は寝袋に入り、少しだけ仮眠した。

それはほんの少しだったはずだ。僕は寝袋から出、立ち上がった。胸にはまだMの脳の破片がある。

僕が歩くと後ろで何かが大きく揺れる。それは眠る前から感じていたことだった。揺れるものは僕に付着したマネキンたちの無数の声、声のない声だった。その声は、殺し切ることができず、僕の背中はずっと付着し、長くて重い透明な帯となって僕の後をずるずると付いてくる。僕はこれをずっと引き摺り続ける。むしろその声によって絞め殺される時が来るかもしれない。それは意外に早いのもかもしれない。

僕の足音が再び響く。だれもない夜のビルだ。マネキンの残骸が、静寂を深くする。――僕は壊し尽くした。静かだ。無数の声が亡霊のように揺れている。静かだ。そして狂おしい。

上のフロアの扉を僕は開けた。そのとき、何か僕を打ちのめした。それは火事の跡のようだった。マネキンたちはすでにほとんどが倒れ、残骸となって転がっている。なかにいくつか立ったままのものもあるが、それは真っ黒焦げになって焼けたまま立っているのだった。

どういふことだよ、これは。

《おまえがやったんじゃないか》

《人殺しのくせに》

僕が？ 冗談だろうか？

《おまえだ》

《おまえだよ》

《あなたよ》

僕の足元にガスバーナーが転がっている。これでマネキンたちはまとめて焼かれたってわけか。確かにこのほうがもつと効率がいい。火炎放射器のように、ブワーツと焼けばイチコロだ。火事になることさえ気をつければおそろしく効率のいい方法にちがいなかった。仕事はもうほとんど終っている。

《みんな、人殺しがしゃあしゃあともう一度現れたぞ》

《みんなでも殺してやれ》

《何百回殺しても殺し足りないわ》

僕はそこを歩きながら、奇妙なことに気がついた。横たわり、転がっているマネキンたちの額に数字がある。焦げて変色したのも、かすかに変色して数字が見える。これはいったい何なんだろう。立っているものも額に数字があり、それが焼け焦げているのだった。1208914、1208783、1199590、1207918……すべてのマネキンが数字化され、記号化されている。適当に数字を言えば、もしマネキンが生きていたら、返事をし、立ち上がってくるのだった。数字が存在を支配している。奇妙な世界、しかし現実の、近い未来の気がした。この世界では殺し放題、殺戮のし放題ってことか。

《おまえだよ》

《おまえがやったんだ》

僕はよくわからなくなっている。みんなに言われると、そんな気もしてくる。ただ記憶がないだけで、結局僕がしたのだろうか。僕の胸には石油の跡が付着している。眠っている間に、夢遊病者のように、僕は無自覚のうちに起きて、バーナーを持ち出し、焼き尽くしたのだろうか。チーンソーンに続いて、僕はガスバーナーを握って振り回したということか……

僕の中にとほうもない不安がひろがってくる。それは僕がやったということでもあると同時に、だれがこれをやってもいい、みんながこれをやったとも言える、行為の流行、行為の感染のようなものがあるということだった。それは僕かもしれないしなかったし、他のだれかかもしれない。そしてそれはだれであってでもいい、もつと世界にすでにひろがってしまっている一つの現象のようには思えた。

M、ほんとうのことを言ってくれ。僕がやったのか。

《……残念だけど、あなたよ。あなたはこれを望んでいたわ》

望んでいたと言ったって……

《もう一階上上がりなさい。それはあなたのしたことじゃないけど、もつと大きく世界がひろがっているわ》

僕は夜明けが近いことを感じた。深い夜だった。ずっとそれを感じていた。しかし夜明けが近づいてくる。それはしかしごく不気味な、とほうもない巨人が近づいてくる気がした。ひっそりと、静かに、一步一步忍び寄ってくる。着実に夜の底を押し上げ、光の幕を押し上げてくる。エレベーターはなぜかその階には止まらない。使用不可になっていた。もう長い間その状態のようだった。

僕は階段を登っていく。僕の後ろで、前よりもっと重く引き摺り揺れるものがある。マネキンたちの残骸が数珠のように繋がっている。何百体、ひよっとしたら何千とそれは繋がりが、さらに僕だけがやったのではない、このビルの外側でも行なわれているその行為がもっと連鎖して、一つの時代の模様として重く波打っている。残骸がガチャガチャ鳴り、火葬場の骨の上を歩くように、僕たちはマネキンの欠片の上を歩いていく。彼らの敵意と彼らの怒りは、僕の内部だけに留まらず、コンクリートの塊りのうちに染み込み、ある憎悪の力となって残留していく。そしてそのことがまた、マネキンたちを増殖させていく。

それが僕にのしかかり、引き摺るのをもっと重く陰鬱にしていくとき、僕は階段の一步一步がひどく不吉になり、足取りを鈍くしていくのを覚えた。死刑執行の階段を登っていく気がする。そんなことはない。マネキンに意思なんかないんだから、とあらためて僕は思う。しかし重い鎖の網は僕を完全に捕えたまま放さない。葬送曲の旋律が、僕の足から奏でられているようだった。《あなたは仲間入りをしたというだけのことよ。マネキンになるか、破壊者になるか、どちらかしかない——たまたまあなたは破壊者になったわけ。でも結局は同じ道なのよ》

僕はその階の扉を開いた。そこは、マネキンたちはいない、奇妙な、のっぺりとした、ただっ広い空間だった。しかし灯りを点けてよく見ると、床に融けた塊りがいくつもつながって褶曲していた。頭の形をかるうじて留めているものもあるが、沸騰した泡粒で、目鼻の形をほとんど失っているものもある。焼け焦げて黒い炭の塊りになっているものもある。ケロイドのように引きつれた波の形をしているものもある。異臭がした。鉛のような臭い、脳髄を金属で焼くような、気味悪い臭いだった。それはひどく古いものであるようにも思えたし、さっき融けたばかりのまったく新しい残骸にも思えた。これは一つ一つやっていくというのではなく、あるいはバーナーのように数メートル四方を一度にやっていくというのではない、もっと大規模に、一瞬のうちに行なわれたすさまじい破壊のように想えた。紫外線のもっとずっと強烈なやつ、熱線のようなもので一瞬のうちになされたものだ。マネキンたちは融ける。焦げる。もし皮膚があれば瞬間的にそれは焼かれ、黒焦げになって吹き飛ばされる。しかし彼らはもろに融かされる。発火するひまがなく、融けるのだ。

この熱線、この光線は、ここだけで起きたものではないのかもしれない。窓からの光によって、空からの光によって、照射されたものだ。

オフィスで働く人たち、ビルを訪れる人たち、ホテルにくつろぐ人たち、みな同じに照射されて、結局はこうなる。あと、爆風が来るか来ないか。みんなその前に融かされてしまうわけだ。それはまだ温度を持ち、くすぶっているような気がした。ひよっとしたら、今から爆風が来るのかもしれない。いくつも爆発するとしたら、こんな一瞬があってもいいのかもしれない。Mがひどく遠くへ行ってしまった声で僕に言ってきた。

《いまあるこれは、過去であると同時に未来なのよ》

たしかに生々しい。すべてが融けてしまう瞬間。強烈な光が放たれる瞬間。それはいま僕のすぐ身近に、すぐ目の前にひろがっている気がした。

マネキンたちは沈黙している。僕の背後の無数の声は押し黙っている。しかしそれは重い。た

だ黙っているだけだ。その重さは目の前の融けた物体のひろがりにも感じられる。それはすでに声を失ったある感情や訴えの意思の強さだけだ。融かされたものの意思の重さ。主張する言葉さえ持てないものの、無形の意思だ。

融解物となっても、石となっても、コンクリートの一部となっても、なおそこに残るものがある。僕はそれを感じ、また後ろからも押す大きな力を感じた。

僕は押されるようにして、窓の方へ寄った。

少しずつ何かが近づいてくる。とほうもなく巨大なものが近づいてくる。それは夜明けのようなものにも思えたし、それ以外の何かのようにも思えた。

闇の中に、無数のビルの影が見える。僕はこのひろがる都市に、増殖するマネキンの無数の影が潜んでいる気がした。そして僕と同じように破壊する者が同じ行為を続けているのを確信した。行為そのものが増殖し、都市を汚染していく。その果てに、もっと大きなものが呼び寄せられる。

僕はビルの陰に、もういくつもの死体が倒れているような気がした。それはすでにマネキンと区別がつかないものだ。しかし結局それらも、強烈な光線が照射し、爆風が襲い、ビルが倒壊したら、すべて同じことになってしまう。廃墟の前に、すべては同一だ。

僕への敵意が後ろから僕を追い立て、脅迫してくる。この都市に向けて飛べ、この闇に向けて飛べ、と。無数のものが僕にのしかかり、袋叩きにし、僕を追い詰めて、この空間に両手をひろげて躍れと言う。おまえのしたことがわかっているのか、おまえのしたこと集積、そしてその行方をもっとよく見せてやる、ほら、飛べ、ここだ、と押し立てる。

僕は向こうに見えるビルの中にも、マネキンたちがい、それがドロドロに融けた塊りがやはり何かを呪い恨んでいるのを覚えた。僕がいま予感している夜明けが来たら、それは一瞬のうちに現実となり、いつさいが倒れ、すさまじい光の中に、焼きつくされていくだろう。それはこの都市に襲いかかるのではなく、腐敗したこの空間がそれを呼ぶのだ。

空が明るくなってきた。また落とされるのか。二つ目か……。それは急速に、巨大に広がってくる。それは純白の光であるとともに、オレンジでもあり、青でもあり、紫でも、緑でもある強烈な光だ。とほうもなく巨大なものが地に昇ってくる。それは地を覆い、空を覆い、すさまじい閃光として、いつさいを押しつけてくる。

マネキンたちは重い沈黙を破って、むしろ祝祭のように、踊り騒ぐように喚き始める。

僕は狂気を自覚し、死刑を予感する。そしてこのビルの26階から飛ぶことを予感する。飛ぶと同時に飛ばされるのだ。瞬間の中に、夜明けのように見えるたった一瞬の中に、僕は短い時間を生きる。僕は飛ぶ。僕は厚いガラスを破る。向こうから迎えが来る。破壊が僕を迎える。閃光が圧する。

Mの声が僕を受け止め、空へ舞わせる。

僕は閃光と落下との間に、この世界の破滅を目撃できるのだろうか。このマネキンの世界の本質を。

《あなたには見えるわよ。この世界の終りが。なぜなら、それはあなたがしたこと、そしてしていることの果てだから》

純白の閃光が僕を射抜いた。

Cambodia 5 バッタバン

ベトナム軍が三度目の侵入をし、今回は特に東部国境から深く、しかも大規模な軍が攻めて来ていることが知らされました。

また大きな異動が行なわれ、村ぐるみ他の地域へ移されました。私たちは村とは別に異動が指令され、バッタンバンに移りました。その村は人数が少なくなつたいくつかの村を集合し、新しい開墾をめざすものでした。人数が増えれば、殺戮の恐怖や人口減の不安も減じるだろうというのがオンカーの思惑のようでした。またベトナムのスパイをさらに洗い出し、その連絡網を混乱させ、できれば断ち切ろうという狙いもありました。

締め付けは厳しくなり、私たちの手による統制と圧迫はもつと強くなりました。身動き取れなくなっているはずでしたが、しかし逆に反感や抵抗の意思は強くなって、不穏な空気はいつそう濃く漂うようになっていました。

オンカーやラジオ放送や、村のスピーカーは大規模なベトナムの来襲を、偉大なオンカーが撃退した、勝利は我々に輝いたと喧伝していましたが、村へ流れて来る噂は、逆でした。ベトナム軍の戦車部隊がオンカーの軍を破り、国道一号線を進撃しているというものでした。

私たちはその不穏な空気を抑えるために、さらに手荒い処置を取りました。密告制を強化し、互いが互いを監視して、緊張感を高めさせました。ベトナム軍のスパイを摘発した者、脱走しようとする者をあらかじめ告げた者には、ミルク缶一杯の米を支給して褒賞しました。密告された不穏分子は、針金で後ろに手を縛り、ココナツパームの幹にくくりつけて一日中放置しました。水も食事も与えませんのでしたので、たいていは三日もたずに暑さの中で息絶えました。私たちはその体を解体し、肝臓を食べさせたり、また一部は犬に与えたりしました。またその犬を殺して食べたりしました。

前線に狩り出される兵士が多い中で、私たちは、村に残つてその維持の任務に就いていたことから、その村だけでなく、隣の村にも赴いて、統制を図らなければなりませんでした。実際私たちは手薄だったのです。

私たちは謀反の意思を強く感じるようになりました。我々に対する敵意と殺意が向かってきていました。しかし彼らは武器を持っていません。銃も、鉈も私たちの手にあり、圧殺の力は私たちが所有していました。彼らには集団を組む力もなく、組織的な反抗も未熟でした。

密告によって上がってくる名もずいぶん増えました。人間は自分が危なくなると、他人を罪に陥れてでも安全を得ようとするものです。妄想と危機の連鎖が渦を巻き始めると、自滅の螺旋が大きく回り始める。それは生きようとする意思の裏表として、滅亡の底へ我先に駆け下りていくのです。人間の群れとしても歯止めが利かなくなるのです。恐怖が恐怖を呼び、裏切りが裏切りを呼んで、自滅の滝壺へ向かっていく。殺される側も殺す側もただそれに向かつていくのです。

毎日一〇人以上の者が密告されてきました。隣の村でもまたその隣の村でも、それは同じようでした。

我々は当初、以前と同じ方法で、処刑される者に自分で穴を掘らせ、目隠しをして、棍棒で打ち殺していましたが、あちらの村、こちらの村とたくさん増えるにしたがって、手が回らなくなりました。見せしめは見せしめとして皆の前でやる必要があるのですが、それは一人か二人、せいぜい三人に絞るべきで、それ以上やると感受性が慣れてくるし、死に物狂いの反抗が飛び火すると蜂起の危険性もあるので、大勢の殺害は、見せしめとは別にやはり目立たないところでやる必要があります。それで村から遠くないところへ連行して五人、一〇人と処理していたのですが、穴を掘るのは昼間のほうが効率がいいのです。殺される者も、夜だとよく見えませんが、不安が大きくなって、穴を掘る作業が捗りません。我々はどうやったらたくさんさんの処理が可能か、話し合い、思案しました。

ちようど五つの村からほぼ等距離にあたる所に、ワット・プノムという寺院がありました。そこは小さな山になっていて、その頂上に寺院が建立されていました。カンボジアは広い平原が続いているのですが、ところどころにぼっこりと丘や山が突き出ています。その高い所は、天に近い場所として、古来から為政者が聖なる所として敬意を払う傾向がありました。そこで天と向かい合い、天の意思を尋ね、それを受けて民衆を導くものとされました。ですから、丘の上に建立された寺院はまた格別に聖なるものとして民衆の心が託されたものでした。

その山は一〇〇メートルあるかないかの低い山でしたが、それでも周囲よりはずっと高く聳え、天意を聞くには、それらしい雰囲気のあるところでした。その頂上から眺めると、見渡す限り、平原が続く、緑の地平線が果てしなくひろがっています。茫洋とした空との境界は戦乱や殺戮とは無縁な、陶然とした美しさでした。なぜこのように人が死に、それを私自身が行なっていくのか、その美しさがわからなくなるほど不思議な気持ちにさせられる自然の風景でした。

その頂上に寺が建てられ、本堂の壁には極楽の絵が絢爛豪華に描かれていました。象が宿る夢として現れた母親の仏陀懐妊の図から始まって、仏陀の修行や悟り、初転法輪、いつのまにか二千人が集まったという説法の山など、仏陀の一生を片面には描きながら、雲や虹が輝き、蓮の花が咲き乱れ、天女が舞う極楽の世界が、金銀や極彩色の絵で繰り広げられていました。

当初その寺は、クメール・ルージュの駐屯地として使われていました。ほかの寺と同じに、僧を全員連行して処刑し、空になった場所を利用して駐屯していたわけです。しかし私たちが行ったとき、普通は連れ去ったはずの僧たちが、その場所で殺された形跡がありました。チーオンという黄色い衣が、本堂の近くの地面に散乱し、それが一部土の中に埋まっていたからです。そこから手の骨が突き出ていました。また、本堂の壁画に、血痕が飛び散っていました。それだけでなく、血で、仏陀を冒瀆する言葉が太い字で乱暴に書かれていました。それだけの大きな太い字を書くにはかなりの量の血が必要でした。その血は、おそらく殺された僧の血のほずでした。よく見ると本堂の床には黒いものがべったりと残っていました。それはその後出入りした我々クル・ルージュの兵士たちの履物で土を付着していましたが、よく見ると夥しい血が流れたこと

がわかるのです。仏像は首を失くしていました。結跏趺坐けっかふざした手も折られて、それらは外の庭に野ざらしになっていました。

秘密警察の役割も果たしていた私たちは、たいいてい寺院を詰所にして、ベトナムのスパイと思われる者を拷問したり、反抗者を責めて、同調者を自白させたりしました。ですからそこも当然拷問場所にも使われていたはずであり、なかには生爪を剥がしたり、指を切断したりして夥しい血を流したはずでした。床にはそれらの血もあつたはずでした。

そこには壊れた発電機が置いてあり、電気コードが一隅に散乱していました。本堂の東の庭に、骸骨が散乱していて、拷問のあと処理したらしい者の骨が半ば土に埋もれていました。おそらく、電気を体に流し、体でショートさせて、それを拷問の手段にしたものでした。

一時は使われていたその寺は、やや離れているせいか放置されたままになっていました。ベトナム軍との戦いで兵が招集されたあと、使われなくなってしまうていました。しかし村々からたくさんの裏切り者や反乱者が出るようになった現在、我々はもつと本格的に処刑できる、便利な場所が必要になっていました。今後各村から反抗者が出、それを処刑しなければならぬことを考えると、そこはちようど中心に位置する好便な場所でした。そしてそこは松明のようなものを用意すれば、寺院ということで、受刑者の心理も安定するかもしれないと思われました。そしてもう一つ、その頂上には、大きな洞穴があつたのです。本堂のすぐ西一五メートルくらいの所に、直径一二メートルの穴がぽっかりと口をひろげていました。深さは二〇メートル以上ありました。もともとそこは僧がその底で瞑想など修行に使っていたようでした。横から小さな穴が開いていましたが、それは容易に埋めて密封してしまえるものでした。私はその底を覗き、その深い空洞に、落ちたら助からない距離とひんやりとした地下のにおいを実感しました。

昼間、我々は村を回ったり、それぞれの農地や食堂や村長の家に出かけ、生産のチェックや労働状況を見、監視するのに時間を割かざるを得ませんでした。村々を回ることによってまた密告も受けることができるのです。そして夕方、あるいは宵の口に情報を整理し、証拠を整え、また労働態度などを見て、処刑する人間を決めていました。密告だけでなく、反乱者の口から出た名前は嚴重にチェックされました。そして夜、食堂で夕食を終えたところで、名前を呼ぶのです。「プオ、トイ、メヤス、新しい職場に移ることになった。身の回りのものはあとで届けさせるから、このまま来るように」

そして彼らをワット・プノムまで歩かせました。闇の中を歩くとき、彼らが脱走しないように、数珠繋ぎに縛り、山の頂上まで追い立てました。

最初のうち、我々は本堂でそれぞれを拷問にかけ、他に反乱を企てている者はないか、仲間はいないか、オンカーを憎んでいるものはないか、告げさせました。以前は聞きませんでした。そのときになると、すさまじい呪いの言葉が出てくるようになっていました。彼らはもう殺されることがわかっていたので、せいっぱい抵抗したのです。それは本堂の中に大きく響きました。首のない仏陀がそれをじっと聞いている気がしました。我々は感情にまかせて、そんなときはその場で殺しました。そんなケースが増え、我々は夜それらの死体を運び出すことが面倒になり、

そのまま放置しました。死体がたくさん溜まり、本堂はすさまじい死臭が立ち込めて、凄惨な様相となりましたが、そこに連れてきたばかりの新人民を入れると、恐怖で震え上がり、聞かずに自分から話し始めるので、我々はもうそのままにしておくことにしました。最初のものは白骨と衣服だけになり、新しいものは死臭を放ち、我々自身も足を踏み入れるのがためらわれるほどの死体の散乱状態となりました。それは風に乗って、山の麓まで悪臭が漂い、山全体が死者の臭いで包まれていきました。連行される者はそのふもとに来ただけで、立ちすくみ、震え始めました。夜のなかに、その山は巨大な墓場として存在していました。

一回の連行が一〇人以上になっていき、本堂の中もいつぱいになりました。また彼らを拷問し、自白させている余裕もなくなって、外で処理せざるを得なくなってきました。我々は新たな処理場を求めました。

私たちが思いついたのは、隣にある大きな洞穴をそのまま処刑に利用することでした。目隠しをして洞穴の縁に座らせ、これまでのように頸部を打撃すればいい、あるいはそのまま突き落とすでも、死に至るだろうというものでした。万一助かっても、横から這い出す穴を封鎖しておけば、中で息絶えると判断されました。洞穴は中でひろがっていて、壁が逆に倒れて上にかかるとような蝸壺形なので、壁伝いに攀じ登って這いだすこともできないはずでした。それで手榴弾で横の出入口を塞ぎ、一つの巨大な穴を処刑の装置にしたのです。

毎夜、周囲の村から、一〇人、二〇人と、連行されてきました。ある者たちには、本堂の死体をまず洞穴に投げ込ませてから、処刑を実行しました。洞穴に悲鳴が響くこともありましたが、断末魔の声が奇妙に膨らんで昇ってきました。最初のうち、かなり遅れてから、ドスンという死体が底へ届く音が響いてきましたが、一週間で過ぎるころから、その音が聞こえなくなりました。死体の上で落ちるからで、中には死に切れず、呻き声が長く聞こえている場合もありました。風によって、また夜の天気によって、洞穴の中の死臭と、本堂の中からの死臭が合流して、強烈なおいを運んできました。衣服も、死臭を帯びてまた別な奇妙な臭いを放つのです。その辺りは、生えている灌木の葉もその臭いに染まっている気がしました。まったく植物のにおいがせず、死臭が自分で息づいてその空気をどんどん膨らませていくようでした。

反抗の度合いが高まり、我々の憎しみも怖れも増幅して、我々はより多くの者を連行するようになり、連行の方法ももっと苛酷になりました。だれが考え出したのか知りませんが、手に穴を開け、その穴に針金を通してまとめて追いついていくのです。血だらけの針金が、人間の束を作っていくようでした。昔市場で、料理される鶏が束ねて縛られているように、その針金を通された者たちはそんな鶏の束のように見えました。穴を開ける方法は、ナイフを突き刺す場合もありましたし、銃で手を撃ち抜くこともありました。

それに針金を通し、何人もの塊りにして連行するのです。山頂に登らせ、寺院の本堂の傍らを抜けて、洞穴の縁に座らせませす。そして環にして縛っておいた針金をさらに硬く確認して、背中を次々に蹴るのです。その柔らかい背中が、文字通り数珠繋ぎになって深い穴に落ちていきましました。虚空を落下する感覚、もがきながら落ちていく感覚は、外から見ている者にも、空洞の空間を実感させました。

洞穴にどれくらい死者が溜まり、重なり合っているか、私たちは昼間はほとんどワット・プムには来ませんでしたので、わからなくなっていました。一つの村が消え、また一つの村が消えたような記憶があります。三分の一くらい、あるいは半分くらいもう洞穴は埋まっていたかもしれません。

ベトナム軍がカンボジア奥深くに侵入してきているというニュースが入ってきました。それはまだ遠い位置での戦闘という気がしましたが、やがてこの地域にも及んでくる戦乱の予感が支配的になりました。その気配の中で、我々はただそれにしかすがれないように、そしてそれに追い立てられるように、人々を殺し続けました。

その日、村々から引き立てられた者は一三五人に上りました。一つ一つの村では十数人でしたが、周辺の村からも連行されてきたのです。ワット・プムで一晩に処刑される者としては最も多い人数になりました。中にはトラックで運ばれてきた者もいました。彼らは、八、九人くらいが一塊りになり、針金で手を貫かれていました。かなり夜遅くになって我々は出発しました。零時を過ぎていたかもしれません。

暗闇で、松明の光の中に、恐怖と苦痛に怯えた顔が揺れていました。炎に浮かび上がる表情は、それぞれが敵意と憎悪と恨みに満ちて、鬼の形相を見せていました。中には絶望的な諦めの顔もありました。彼らには我々が逆に鬼であり、悪魔であるように映っているはずであり、それは我々の鏡であつたかもしれません。

最後の、やや遠い村から連行された一団の中に、私は見覚えがある顔を見い出しました。母に似た女性の顔がそこにあつたのです。私は最初母がそこにいる、生き返ってきたのかと思いましたが、それくらい、よく似ていたのです。私は思わず「母さん」と声をかけましたが、その女は返事をしませんでした。よく似ていた別の女性でした。しかし私はその女性から目が離せなくなりました。銃を構えていつしよに付いて行きながら、視線は絶えずそちらに向かつてしまいました。赤い炎の揺れる中で、その顔はいまにも私の名を呼んで頭をかき抱いてきそうでした。

ワット・プムの麓に差しかかると、それまでココナッツ・パームの葉に遮られていた視界が一気に抜けて、美しい星空がひろがってきました。人数が多かったので、出発に手間取り、かなり夜も更けていました。星が冴えわたり、澄んだまたたきが降ってきそうでした。そのきれいな星空の下に、死臭が風に乗って山の上から下りて来ていました。星のまたたきと死臭がその夜をいつそう深く呪われたものにしていくようでした。

我々が手に持つ松明の光に、針金が赤く光り、新たに流れ出ている血を輝かせていました。母に似た女性が山を見上げ、その大きな影を恐れながら、眼差しをさらに星空に向けました。その瞳はそこにまたさらに星空を宿して、美しく深く見えました。母がもし生きていたら、たぶん様々な苦勞を重ねて、皺を深くし、皮膚も荒れただろう、白髪も増えただろうと思うものの顔を彼女は見せていたのです。ぼんやりとあまりにも悲しそうに見上げるその表情を否定するように、仲間が針金を引いて、上へ急ぎ立てました。

私もAK 46銃を肩に、ゴム・タイヤで作ったホーチミン・サンダルを履いて、闇の道を上へ追い立てていきました。強烈な死臭に、真ん中にいた一団がいきなり駆け出しました。私はすぐ

さま銃の安全装置を外し、その背に向かつて連射しました。手が繋がっているのです、自由には逃げられません。一人が倒れると将棋倒しのようにそれはかたまつて倒れました。面倒なので、生きている者もその場で胸か頭を撃って射殺しました。銃を撃つたびに弾丸がめり込む反動で、体が跳ね上がり、踊ります。私はその有様が、母が殺されたときの状況によく似ていることを思い出しました。私はその女性を振り返りましたが、その顔は闇の中で私をじっと見ているようでした。

寺院の入口の階段の門には、二匹の大蛇ナリガが鎌首を上げて、誘っています。カンボジアの寺院にはよくある門でしたが、その夜のその目は炎の明かりを受けて真っ赤に燃え、舌さえも赤くチロチロと燃え上がっているようでした。私は以前まだゲリラになりたての頃、蛇や、マングースや、ネズミや、鶏を火をつけて燃やし蹴り殺したことを思い出しました。それはごく最近まで仲間との間でよくやられていた我々の娯楽でした。いつもはそんなことを思い出さないのに、なぜかその夜は私の過去が鮮やかに浮かび上がってきました。

上へ行くにつれて、寺院の姿が夜空に高く聳え立ってきました。なぜかそれは黒い影にすぎず、強烈な死臭を放っているにもかかわらず、壮麗に見えました。

我々はいつものように寺院の本堂に松明を掲げ、そこに置いてある我々の処刑の道具を持ち出しました。皆はその道具よりも、首が取れた仏像に交じって死体や白骨が横たわり、いまにもそれらが叫び出しそうな光景に息を呑みました。それらの目はギラギラと燃え、我々の行為の凄惨さを非難してきました。母に似たその女性は思わず目をつぶり、それからまた目を開いて、首のない仏像に、その針金で不自由になった手をなお上げて合掌する素振りを見せました。同じ針金で繋がれていた人々も、彼女の仕草を見てそれをやりやすいように緩めてやると同時に、自分たちもお互いに近づきながら、合掌しようとなりました。

仲間が怒声を張り上げて、それを静止し、大声で笑いながら、そんなことをしても無意味なこと、そんなことをしてもだれも助けてくれないと、嘲弄しました。

穴から少し離れたところに彼らを座らせ、順序よく縁に來させて、それから次々に処刑し、落としていくはずでした。そのとき、私はむしろ衝動に駆られて、自分が彼らを蹴落とすこと、できればその首を棍棒で打って、自分の手で確実に殺すことを提案しました。私の仲間は、ユオんがあえてそういうなら、やってもいい、やつてもらおう、処刑する人数が多いので、たいへんだということ、突き落とすだけのいつもの方法をとるつもりだったが、できればできるだけ確実にやるほうがいいと承認してもらいました。

私は自分の手で、母に似たその女性を殺したかったです。私はすべてを否定してきました。家族を否定し、寺や僧を否定し、政府を否定し、学歴を否定し、金持ちを否定し、都市を否定し、貨幣や異性までも否定してきました。この寺院にある仏像も、極楽絵も、およそ倫理や愛情と言ったすべてを否定してきたのです。それによって私は殺戮を続けてきたのです。私が重ねてきたその行為を今になってなぜ問いかけるのか、いくら私が恐怖や疑心暗鬼の螺旋のなかでその回転の速度を速めてはいても、いくら殺人機械に成り果てていても、私の足元のいっさいを突き崩

すような問いかけは許せませんでした。天国はない、仏陀も、家族も、欺瞞だとしてきた私の足元は突き崩されてはならないものでした。この世の地獄だけが私が信じているものでした。

一人だけでいいのか、と仲間が言いました。私は一人でやる、と言いました。仲間は私の目を覗き込んできましたが、私が何を考えているのか、その奥底までは覗けないようでした。

最初のグループを前に座らせました。目隠しは仲間がやってくれました。後ろ手に縛られ、目隠しをされると、おとなしくなりました。しかしブルブル震えているその肩や唇は止まりませんでした。ある者は歯がカチカチ鳴っていました。風が吹いて夜の平原の彼方から、涼しい空気を運んで来ました。洞穴から立ち昇ってくるすさまじい死臭とはまったくちがった、新鮮な風でした。目隠しされた者たちの頬をそれはやさしく撫で、敵かなさわやかさで包んでいくようでした。それは辺りの草の葉を揺らせ、何かが泣いているようなさわめきを奏でました。星々が美しく本堂の上にまたたいていました。風がもう一度吹き寄せてきたとき、私は松明の光のなかに浮かぶ一番目の者の首に棍棒を打ち下ろしてしまいました。肉の打撃の手ごたえとともに、それはゆつくりと重心を前に落とし、腰を浮かせてそのまま前へ傾いていきました。そしてそれと数珠繋ぎになつていたもう一人を引つ張り、第二番目の者を下方へ強く引つ張りました。二番目の者は、最初下へ落ちる力をこらえていましたが、肉が割け手がちぎれそうになる痛みで悲鳴を上げるとともに、結局こらえきれずに下へ落ちていきました。二番目が落ちると三番目が自動的に落ちていきました。二人分の重みにはとうてい耐えられるものではありませんでした。それらは宙に舞い、泳ぎながら、また体を絡み合わせ、もがき合うようにゆつくりと落ちていきました。意外に簡単なのに、私は驚きました。

二番目、三番目のグループは同じように片付きました。針金の効用は思いがけないところにあるのを再認識しました。

その女性のいるグループを私は最後に残しました。彼女はずっと私の行為を黙って見つめていました。それは私の背に突き刺さってくるようでした。私は怖かったのかもしれない。しかしとうとう彼女のグループになり、彼女らを縁に座らせ、私は彼女の横に立ちました。彼女は針金の繋がりの真ん中にいましたが、私はあえて針金を切り、二グループに分けて、彼女を一番端に座らせたのです。二つに分けた一つは前のグループと同じに難なく落ちていきました。

彼女に目隠しをしましたが、彼女はそれでも目隠しの下からなお私を見つめていました。おまえはだれだ、と私は心のなかで問いかけました。返事はありませんでした。しかしその目はいつも大きく、明るく私を見つめてきました。それは彼女の肉体を離れ、夜空の星のまたたきと重なって限りなく大きな目になって宇宙へとひろがっていくようでした。その目はどこまでも和やかな眼差しとなり、宇宙がその中にすっぽりと入ってしまうような気がしました。そして松明の炎の明かりが揺れ、彼女の顔にえも言われぬ微笑みが宿ったように見えたとき、私は渾身の力で彼女の首へ棍棒を打ち下ろしてしまいました。ひどくやわらかな感触が棒に残ったとき、彼女の体は宙に舞い、その重みを洞穴の中へ躍らせました。他の三人の体が続いて落下していったのを目の前に見たとき、私は何か青白いものが洞穴の中に発光するの覚えました。それは不思議な感覚でした。空の無数にひろがる星々の小さなまたたきの一つ一つが、洞穴の中に横たわる死体の一

つ一つの中に流れ落ち、その一つ一つが発光していくのです。微小な美しい光が一つ一つの死体に宿るのです。そしてその細かな光は、蛍が無数に集まってくるように、いくつも寄り集まり、またたくまに太い光の束となって、すべてを上へ吸い上げていきました。死臭に満ちた洞穴の底から夜の空へ向かって太い光の束が立ち上がっていました。それは死体をその光とともに、夜空へ昇らせていくようでした。

私は茫然と、その光を見ていました。それがすべて宇宙の闇に吸い込まれていった一つの完了感に包まれたときでした。

東の空に白い閃光が走りました。それはカンボジアの平原全体を覆い尽くす鮮烈な光でした。地平の果てから、すさまじい光が燃え立ってきました。吸い上げられた光が、稲妻のような閃光となっていてま地に降り注いでいるようでした。それは純白の色でもあり、オレンジでもあり、紫でもある、まぶしい光となっていてっさいの地上を照らし浮かび上がらせる光でした。夜明けが一気に昼となって襲ってきたようでした。私は自分が焼かれるのを覚えました。私は白い光で染め抜かれ、骨の髄まで照射され、すべてが反転していくのを感じました。

ENOLA GAY 5 東京

「左手はるか下方に富士を見て通過」  
「東京上空は快晴だ」

「八時三八分高度三万三〇〇フィート」  
「東京上空へ」

ジエプソン

突然の大統領の英断か。歴史はこれで変わるか。日本の首脳がこれを自分の目で見て、戦争を終結させるか……

テイベツ

何があったのか知らんが、とにかく大統領命令だ。絶対だ。おれはただ任務を全うするだけだ。東京の地図を持たされたのはこのためだったのか。

おれは初めて空を飛んだとき、キャンディ・バーを空から落としたな。そのときのことがありありと蘇ってくる。それが初めての空を飛ぶ体験だった。

一二歳のときだった。メーカーがキャンディの宣伝のために飛行機を飛ばしたのだ。キャンディを上空から落として、試食してもらおうというものだった。おれはアルバイトでキャンディにパラシュートの一つ一つ付けていた。ついでにそれを空から撒く者が必要だったので、おれは怖いもの知らずに「撒きたい」と志願したのだ。おれはデービスというパイロットの後ろに乗って複葉機の後ろの席から撒いた。地面から離れて宙を飛ぶときのあの感覚は、わくわくするものだ

った。風が鼻や頬に当たって、気持ちよかった。空に浮かんでいる。雲といっしょに浮かんでいる。もう最高だった。そして競馬場に集まった人々たちを目標にその上空に行き、パラシュートが付けたキャンディを空から撒いたのだ。人々の上に、一つ一つのパラシュートが降りていき、それがその人たちに届くということがたまらなくおれを魅了した。おれはキャンディ・バーを空から届ける人間だった。空の青さが今でも蘇ってくるようだ。人々が手を上げておれの飛行機を見上げる。みんな手を振る。そこへキャンディ・バーが落ちてくる。パラシュートでくるくる回りながら。みんなの喜ぶ顔、空からのプレゼントに興じる顔が見えた。キャンディ・バーもうまかったし、空からそんなプレゼントが降ってくるなんて、とみんなの歓声が聞こえてくるようだった。おれはあのととき、空を飛ぶことがどんなに素晴らしいか、知ったのだ。そのときからおれは、自分の手で空を飛びたい、パイロットになりたいと思った。

いまおれは、このとほうもない爆弾を運んでいる。一発がTNT火薬二万トンに匹敵する核爆弾を空から落とす。キャンディ・バーの代わりに、死と破壊を落とす。都市が消える。これが運命か。英雄か、悪魔か。これがおれの運命だ。

ネルソン

目標は、国会、皇居上空を通過して東、隅田川、荒川、江戸川の三本の川のうち、「荒川および江戸川の河口以南」「海上が望ましい」ということです。ボス。

テイベッツ

了解。ヒロシマに比べれば楽な目標だ。

ファイアビー、いいか。投下地点目標を自分で決めろ。

ファイアビー

OK、ボス。確かにヒロシマよりやりやすい。荒川河口にします。

テイベッツ

よし。了解だ。

ビーザー。わかったな。荒川河口だ。

ビーザー

了解。

「八時五五分高度三万二七〇〇フィート。水平飛行に移る」

「南西西より東京上空進入」

「現在立川上空。以後東へ進路修正」

ビーザー

こちらリーダー電波士。八時五七分、電子信管テスト、結果良好。原爆信管作動準備完了。

バンカー

東京の街が見えた。目標地点まで一七分。

ステイポリック

敵迎撃戦闘機の機影なし。高射砲迎撃現在なし。  
ルイス

九時だ。みんな、もうまもなくだぞ。

九時二分。下に街が広がってきた。もうみんな焼野原だ。

テイベッツ

目標まであと一三分。爆弾投下態勢に入れ。航法士、指示しろ。

バンカーク

九時四分。針路真東。対地速度三二八マイル（五二八キロ）。

テイベッツ

操縦を爆撃手に代わる。

ファイアビー

へんな建物が見えるぞ。国会だ。あれが皇居だな。川が見える。隅田川だ。

見つけたぞ。目標の第二河口だ。

テイベッツ

みんな、ここに見えているのは東京にまちがいないか。ここが東京だということに、全員異論はないな。よし。OK。

バンカーク

コース修正。二度南

テイベッツ

OK。進入点。九時二分（日本時間八時二分）

あと三分だ。

パーソンズ

確かにこれが目標だ。河口の橋だ。原爆管制盤すべて良好。OK。

テイベッツ

一分前だ。ファイアビー以外は全員眼鏡をかける。

ビーザー、『スペシャル』を起こせ。

ビーザー

了解。

テイベッツ

三〇秒前。信号音停止用意——右急降下旋回用意。

ファイアビー

操縦調整、操縦調整……爆撃鏡の中の十字線だ。絶対に合わせるぞ、ここだ。合え、合え……  
航路線と速度線との交点を——河口だ、合え、合え、合え……

やったぞ。バッチリだ。

よし、最後の微調整だけを。

最終信号音のスイッチ、オン。

テイベッツ

聞こえるぞ。ピッピッピッという低い信号音だ。

作動完了警報オン。

キャロン

爆弾倉の扉が開いた。一五秒前だ。

ビーザー

自動時限装置作動。レーダー電波OK。

一〇、九、八、七、六、五、四、三、二、一投下。

九時一五分三〇秒（日本時間八時一五分三〇秒） 原爆投下。高度31600フィート（約9600メートル）

キャロン

爆弾が浮いている。これが「スペシャル」だ。ゆっくりだな。しかし降下する。落ちていく。

爆弾倉の扉がボタンと閉まった。

テイベッツ

シートに尻を蹴り上げられた。機体が跳ね上がったぞ。「スペシャル」の投下で、機全体の重量が軽くなった証拠だ。

ゴーグルなんぞ真っ暗で見えん。捨てる。

右一五五度急降下旋回。離脱する。

爆弾が爆発する前に圏外へ離脱しなければならん。四三秒しかない。機首を右へ急降下旋回させる。

爆発まであと四〇秒。

キャロン

尾翼がビリビリ震え、補助翼がガタガタ鳴っている。

ビーザー

すごい急降下旋回で体がそれに引っ張られ、頭からぐんぐん血が引いていく。身動きが取れない。

ネルソン

うわあ、引っ張られる。

ルイス

離脱だ。爆発圏外へ。

ジェプソン

三〇秒経過……三五秒、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三……

閃光。真っ白の光が空を領した。

白だ。フラッシュだ。目をやられた。見えない。何が起こったんだ。計器盤や管制盤が真っ白く照らし出された。何だ、この光は。

テイベツ

眼前が真っ白だ。ピカーツとやられた。白く染められたぞ。

口の中に来た。歯の詰物に電流が走った。歯の金属が感電した。閃光の味だ。鉛のような味がひろがった。

みんな、眼鏡を外せ。<sup>ゴーグル</sup> キャロン、何か見えるか。

キャロン

うわあ。巨大な空気の塊りが環になって、ぐんぐん広がりながら上昇してくる。こっちへ向かって押し寄せてくるぞ。空気の波だ。土星の環みたいだ。襲いかかってくる。やられるぞ！

テイベツ

なんだこの音は。機が放り上げられたぞ。

高射砲だ！

パーソンズ

爆風だ。衝撃波がエノラ・ゲイの翼にあたった！

キャロン

もう一波、来るぞ！

ジエプソン

またか。ズドーンだ！ また投げ上げられたぞ。激しい揺れだ。

ネルソンが席から飛ばされた！ ビーザーが床に転がったぞ！

パーソンズ

これは再衝撃波だ。だいじょうぶだ。

爆発で空気が周囲に飛ばされ、そこが真空になる。その真空へもう一度空気が周囲から押し寄せる。その空気の波だ。

もう去った。

テイベツ

OK。これは跳ね返ってきた衝撃波だ。高射砲ではなかった。もうこれ以上は来ない。だいじょうぶだ。落ち着け。

キャロン、何か見えるか。報告しろ。

キャロン

くわあ、すごい。煙の柱がどんどん上へのびている。中心は火の坩堝で、真っ赤だ。芯のところが溶岩みたいに真っ赤に滾っている。周りは濃い紫の煙がすごい力でモクモク渦巻いている。巨大な煙の柱全体が沸き返っている。炎があっちこっちから噴き出ている。また新たにどんどん

火が噴き出して来る。いろんなところから噴き出てきて、数え切れない。あっちこっちから火が点いてくる。溶岩が湧き出して来るようだ。来た！キノコ型の雲だ。こっちへ来る。煮えくり返っている。すごい雲がどんどん膨らんでくる。こっちへ来る。昇ってくる。もう機と同じ高さになった。もつと上へのびる。真っ黒で、ちよつと紫がかかっている。根元に厚い雲がひろがっている。そこからたくさんの炎が出ている。東京の街はあの下だ。火と煙がうねってひろがっていく。次々に丘や町を呑みこんでいく。

ルイス

うわあ、あの化け物を見るよ。おれたちは何をしたんだ。

シューマード

上の砲塔は、急降下旋回するとき上の方に東京の街が見える形になる。砲塔から、東京の方角に最初に針の頭ほどの小さな赤紫の光が見えた。一瞬で、針の頭は直径八〇メートルほどの巨大な火の玉になった。その火球は、たちまち爆発して煮え滾る火炎と黒紫色の巨大な塊りになった。そこから、真っ白な環が音が広がるように出てきた。おれたちの機を襲って放り上げ、揺さぶった。それは一つだけの波紋をなして急激に四方に広がり、そしてまたすぐ逆にその環は収束した。

黒紫の滾り立つ塊りがものすごい渦をなしている。直径五キロほどのものすごい塵埃の雲が荒れ狂っている。どす黒い色だ。その中心は真っ赤に滾っている。火の坩堝が見え隠れした。そこからまもなく巨大な白い煙の柱が立ち上がってきた。白い雲はぐんぐん上昇してきた。三〇〇メートルくらいまで一気だった。そこからその白雲の円柱は突如巨大なキノコ雲になった。このキノコ雲はぐんぐん上昇し、一万メートルを超え、おれたちの機の高さを超えた。さらにそれは上昇し、一万五千メートルの高さに達した。下は相変わらず黒紫の濃い煙が滾り巻いている。東京の街の大半は、すっぽりその下に包まれている。

バンカーク

煮えたぎる真っ黒な油だ……

パーソンズ

恐ろしい光景だ。アラモゴードの実験ではこんなに真上から見えてはいなかった。これほど近くではなかった。恐ろしい。巨大な塵埃の柱があらゆるものを覆っている。最下部の直径五キロほどは、董灰色の塵埃の塊りで沸き返っている。そこにはコンクリートや家屋のバラバラになったものや土がいっしょくたに渦巻いている。あれはその色だ。大地が沸騰している。塵埃の柱の頂きから、巨大な白い雲が分離して上昇していった。そしてまた次の雲が起こって、初めのそれを追い始めた。白い雲の頂きもまた沸き返って狂乱の塊りをなしている。キノコ雲は我々の高度にまで達した。さらにそこからもう一つのキノコが湧き上がった。これもまた頭部が乱れ狂っている。初めの塊りとは様子のちがったもう一つの煙の柱が、地面に四五度の角度で一方に出てきた。根部の董灰色の塊りの中は劫火が渦巻いている。それはその劫火の渦の中から出てきている。再びそこに戻っていくようだ。劫火と塵埃が追いかけて狂ったように渦巻いている。海が煮え滾っている……。

キヤロン

撮影機の望遠レンズをいっぱいに見たら、いきなりあの黒い渦の中から人間の足が飛んで来た。一〇〇〇メートルを超える高さまで。あの黒い坩堝はそんなのが渦巻いているのか。

テイベッツ

機首を戻すぞ。東京上空を旋回する。あのキノコ雲の周りを回る。

撮影をしっかりとやれ。一人一人録音する。歴史に声を残すんだ。

ショックだ。おれは大きなことを目撃するだろうとは思っていたが、その予想をはるかに超えている。こんな規模のすさまじい爆発は見たことがない。絶大な規模の破壊が東京の焼野原になわれたということだ。今見えるものは焦土だけだ。煙から外れたところでさえ、あとかたもなく消えている。中心の海岸部は煙の柱がまだ覆っている。そこはもつと大きな破壊が行なわれているはずだ……。

ジエプソン

かつて人類の見たことのない最大の爆発が眼前に展開している……

ネルソン

この下には地獄がひろがっている。おれたちは地獄を落としたんだ。

ファイビー

やったぞ！ やった！ しかし、とにかくすごい。あまりにすごい……

ドウゼンバリ

恐るべき破壊力だ。B 29でなければできなかったことだ。吹き飛ばされそうだった。おれたちには助かった。

ステイポリック

信じられない。何だ、これは。これが一発の爆弾で起こったことか！

テイベッツ

戦争は終了だ。

この爆弾を受けて、この爆弾の威力を目の当たりにして戦争をまだ続けようなんて馬鹿なことを思うやっはいない。

しかしこれは、使い方によっては——滅亡の始まりだ。一瞬で都市が地上から消えてしまう。ニューヨークも、シカゴも。

ジエプソン

これを見て日本の首脳は降伏するだろうか。

ルイス

くそつたれ！ やったぞ！

東京

6

Fine

《見てごらんさいよ。ほら、よく見えるでしょう》とMが言った

「東京大空襲のときはこんなだったのかな。いや、これはもっとすごいのかな。僕は宙吊りのまま都市の残骸を見る。僕は途方もない映画を観ているのかもしれないなかった。

火災が東京の街を包んでいる。夜なのに赤々と燃え上がって、空を真っ赤に焦がしている。昼間のような明るさだ。

さつきまで真っ暗だった。土やコンクリートの残骸や、一瞬にして黒焦げになったものの灰が厚くドームとして覆いかぶさり、いつさいの光を消してしまった。

やっとそれがおさまってきたと思ったら、その向こうに火炎群が地平にどこまでも広がっている。いくつも炎の竜巻が空へ上がっている。それは次々にできては消えて行く。

僕は数百メートルを吹き飛ばされて、どこかのビルの残骸の一角に逆さ吊りに引っかかっていた。逆さのまま消えた都市を見ている。

火災の明るさで海が見える。それはとても奇妙な海だ。白いものが無数に浮かんでいる。それはびっしりと海面を被っている。海水が見えない。炎の色を反射しているが、みんなほんとは乳白色のようだ。それらはマネキンたちの背中だ。腹を見せているのも多い。男はみんな背を見せている。腹を見せて浮いているのが女のマネキンだ。マネキンになっても水死体の人間と同じってことか。

それは河口から河に続いている。河面もびっしり埋めて、上流へ続いている。マネキンの死骸の河だ。

《あつちもよ》

Mの言う方向を見ると、ビルの残骸の底部のいくつかまだ建っているそばに大きな白い山が見える。それは古墳のようにいくつもあちこちにできている。吹き溜まりとして溜まったのか、吹き飛ばされる比重の違いからある場所に集まったのかよくわからない。それはマネキンの山で、裸のマネキンたちが大きな山として堆積していた。死骸の山だ。何か白骨のような気もしてくる。

その山は気がつくといっぱいある。山手線の駅の周辺に、白い山がある。地下鉄の入口から、うじゃうじゃ湧き出したマネキンの死骸が山をなしている。

《これで終りじゃないのよ》とMは言った。

《まだいくつも来るのよ。わかっているでしょう？》

僕は宙に浮いている。時間が止まってしまった。僕は逆さまになったままだ。

そうだ。僕はまだ待っている。さらに何かが飛んでくるのを待っている。都市はもう破壊されている。もう街はすでに廃墟なのに、まだ同じものがやってくる。僕は待っている。それが飛んでくる。

《一度始まったら、ガンガン来るのよ。一発で終わりなんて思わないでね。しつこいくらい。徹底して来るのよ。そういうふうには配置されているの。威嚇と恐怖の上にあるんだから》

もっと恐ろしい力なのかもしれない。新たなミサイルかもしれない。僕はそのまま待ち続ける。待つことの間をただ生きているだけだ。

僕の耳に世界中から声が入ってくる。マネキンの声だ。僕もすでにマネキンになっている。破壊されるのを待っている。

《おれは潜水艦にいるんだよ。この潜水艦はちゃんとモスクワを狙ってるんだぜ。北京も》

《おれのロシアの同僚は、ニューヨークとワシントンにいつでもOKだ。もちろん東京も、大阪も》

《みんな相棒だよ。自分だけ安全でいようなんて思わないほうがいい》

《世界の主要都市はみんな滅び同盟なのさ》

《地の底も退屈だ。ボタンとにらめっこ》

《B1爆撃機スタンバイ》

《移動列車弾道弾も忘れないでくれ。旧式だけど、破壊力は抜群だ》

《そのときになれば、迎撃ミサイルなんて役に立つものか》

《一瞬なのよね》

《ブザー恐怖症だよ》

《何人も狂っちゃまったよ。自殺したのもいる》

僕は彼らの夥しい数の声を茫然と聞いている。彼らも額に数字が振られている。完全に管理されている者の象徴だ。

《おれは1456057791》

《わたしは5684799115よ》

《わたしたちに反抗する手段はないのよ》

僕のあとに無数のマネキンの声が繋がっている。そのマネキンたちは僕に言い続ける。それぞれのボタンとそれぞれの狂気を。

《そのうち事故っちゃうわよ》

《なんか押しなくなっちゃうのよ》

僕はこのまま永遠に待ち続ける者でいたい。僕は見たくない。この世の終りを。僕は宙吊りになったまま、祈り続ける。僕の頭上に浮いたままのMが言う。

《マネキンの道は破壊の道へ繋がっているのよ。避けられないわ。私たちがやがて地上に落ちるように、そうなるのよ。私たちの中のそれを抑えない限り》

新たな破壊がもう来るのか。僕はもう迎えたくない。僕は見たくない。

《見るのよ。あなたはもうマネキンだから。あなたも破壊者だから》

(文芸思潮31号発表)

## 引用・参考文献

- 「B29」第二次世界大戦ブックス4／カール・バーガー／中野五郎・加登川幸太郎訳／産経新聞社出版局1971
- 「デューテイ」ボブ・グリーン／山本光伸訳／光文社2001
- 「資料マンハッタン計画」山極晃・立花誠逸編／岡田良之助訳／大月書店1993
- 「エノラ・ゲイ」ゴードン・トマス・マックス・モーガン・ウィッツ／翻訳・松田銃／TBSブリタニカ1980
- 「私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した」チャールズ・スウィニー／黒田剛訳／原書房2000
- 「B29操縦マニュアル」米陸軍航空隊／仲村明子・小野洋訳／光人社1999
- 「トルーマン回顧録」ハリ・S・トルーマン／堀江芳孝訳／恒文社1966
- 「原爆はこうしてつくられた」レスリー・グロブス／富永謙吾・実松讓訳／恒文社1964
- 「ロバート・オッペンハイマー」藤永茂／朝日新聞社1996
- 「カンボジア・0年」フランソワ・ボンショール／北島霞訳／連合出版1979
- 「インドシナの元年」小倉貞男／大月書店1981
- 「ベトナム・中国・カンボジアの関係と社会主義を考える」本多勝一編／朝日新聞社1979
- 「カンボジア・わが愛一生と死の1500日」内藤泰子／日本放送出版協会1979
- 「カンボジアの戦慄」細川美智子・井川一久／朝日新聞社1980
- 「ベトナム―その戦いと平和―」丸山静雄／朝日新聞社1974
- 「カンボジアの旅」本多勝一／朝日新聞社1981